福　岡　市

有田・小田部

第23集

福岡市埋蔵文化財調査報告書第470集

1996

福岡市教育委員会

福　岡　市

有田・小田部

〈福岡市早良区有田・小田部における遺跡群の発掘調査報告〉

第23集

1996

福岡市教育委員会

序

福岡市は地理的に中国大陸や朝鮮半島に近く、古来より大陸文化との交流の門戸としての役割を果してきた。そのため、市域内には多くの遺跡が残されています。特に、福岡市の西南部に位置する早良平野は、福岡平野に比べ都市化がやゝおくれ、ここ20数年の間に開発が集中したために、多くの遺跡が調査され、周知されています。

早良平野の中央より、やゝ北東に片寄った有田・小田部地区の低丘陵上に位置する有田遺跡群は、昭和41年の九州大学考古学研究室による区画整理に伴う発掘調査以来、約180次におよぶ発掘調査が実施されています。その結果、旧石器時代から近世におよぶ遺跡が明らかにされ、福岡市内に分布する遺跡の中でも、最も重要な遺跡の一つであります。特に弥生時代初頭の環濠集落や古代の柵列に囲まれた倉庫群、奈良時代の官衙と考えられる建物群は注目されるところです。

本報告書に収録した第４・176次調査では旧石器時代・古墳時代・歴史時代の各時期の遺構・遺物が明らかになり、早良平野の歴史をより明らかにすることができました。

発掘調査から報告書作成まで長時間を要しましたが、その間、ご指導いただいた先生方をはじめ、地元の皆様・発掘作業員・整理作業員等、多くの方々の協力を得ましたことに深甚の感謝を表するものであります。

本書が埋蔵文化財の保護と理解を深める一助となり、併せて研究資料としてご活用いただけることを願うものであります。

平成８年３月29日

福岡市教育委員会

委員長　尾　花　　剛

例　言

（1）　本書は福岡市早良区有田・小田部・南庄地域内に広がる有田遺跡群における開発に伴い、福岡市教育委員会が、昭和52年・平成6年度の国庫補助を得て実施した緊急発掘調査の報告書である。

（2）　本書には昭和52年度に実施した第4次調査、平成6年度に実施した第176次調査の2ケ所について収録する。

（3）　本書では有田・小田部台地の遺跡を一連のものと見做し、広義の有田遺跡と呼称する。

（4）　本書に収録した発掘調査は、第4次調査を山崎純男・沢皇臣・山口譲治・横山邦継、第176次調査を池崎譲二が担当した。

（5）　本書に掲載した遺構実測、写真撮影は以下のとおりである。

第4次調査	実測	山崎・沢・山口・横山・福岡大学歴史研究部
	写真	山崎・沢・山口・横山
第176次調査	実測	池崎
	写真	池崎

（6）　遺物実測は第4次調査は山崎・山口・横山、第176次調査は池崎が担当した。

（7）　遺構・遺物実測図の製図は、第4次調査を山崎、第176次調査を池崎が行った。

（8）　本書の執筆は第1章～第3章を山崎純男が、第4章を池崎が分担して行った。

（9）　報告書作成にあたっては、久賀登世子、小松原澄江、藤アイ子、矢川みどり、成清直子の協力を得た。

(10)　本書の編集は、池崎譲二の協力を得て、山崎純男が行った。

本 文 目 次

第１章　はじめに……1
　１．調査に至る経過……1
　２．調査体制……1
第２章　遺跡の立地と周辺遺跡……2
　１．遺跡の立地と調査区の位置……2
　２．周辺の遺跡と歴史的環境……5
第３章　第４次調査の記録……9
　１．調査区の地形と調査概要……9
　２．旧石器時代の調査……11
　３．歴史時代の調査……12
　　(1)　調査区の土層……12
　　(2)　掘立柱建物と出土遺物……12
　　①　掘立柱建物……12
　　②　出土遺物……29
　　(3)　SD－01と出土遺物……30
　　①　SD－01……30
　　②　出土遺物……30
　　(4)　SD－02と出土遺物……33
　　①　SD－02……33
　　②　出土遺物……33
　　(5)　土壙墓と出土遺物……36
　　①　土壙墓……36
　　②　出土遺物……37
　　(6)　製鉄遺構……37
　　①　第１号製鉄炉址……37
　　②　第２号製鉄炉址……37
　　③　第３号製鉄炉址……37
　　④　第４号製鉄炉址……39
　　(7)　竪穴遺構……40
　　①　第１号竪穴……40
　　②　第２号竪穴……40
　　③　第３号竪穴……41
　４．第４次調査区のまとめ……43
　　(1)　旧石器時代……43
　　(2)　掘立柱建物について……43
　　(3)　製鉄遺構について……44
第４章　第176次調査報告……45

調査概要……45
まとめ……48

挿 図 目 次

Fig. 1　有田・小田部の位置と周辺遺跡 …… 3
Fig. 2　調査区の位置 …… 4
Fig. 3　第４次調査区遺構全体図 ……10
Fig. 4　旧石器実測図と土層実測図 ……11
Fig. 5　調査区土層断面実測図 ……12
Fig. 6　掘立柱建物実測図Ⅰ（SB－01～06）……13
Fig. 7　掘立柱建物実測図Ⅱ（SB－07～11）……14
Fig. 8　掘立柱建物実測図Ⅲ（SB－12～16）……15
Fig. 9　掘立柱建物実測図Ⅳ（SB－17～21）……17
Fig. 10　掘立柱建物実測図Ⅴ（SB－22～25）……18
Fig. 11　掘立柱建物実測図Ⅵ（SB－26～31）……19
Fig. 12　掘立柱建物実測図Ⅶ（SB－32～37）……20
Fig. 13　掘立柱建物実測図Ⅷ（SB－38～43）……22
Fig. 14　掘立柱建物実測図Ⅸ（SB－44・45・47～50）……25
Fig. 15　掘立柱建物実測図Ⅹ（SB－51～61）……27
Fig. 16　掘立柱建物実測図Ⅺ（SB－62～68）……28
Fig. 17　掘立柱建物柱穴出土遺物実測図 ……29
Fig. 18　SD－01先端部実測図 ……30
Fig. 19　SD－01出土遺物実測図Ⅰ ……31
Fig. 20　SD－01出土遺物実測図Ⅱ ……32
Fig. 21　SD－02実測図 ……33
Fig. 22　SD－02出土遺物実測図Ⅰ ……34
Fig. 23　SD－02出土遺物実測図Ⅱ ……35
Fig. 24　土壙墓実測図 ……36
Fig. 25　土壙墓出土遺物実測図 ……36
Fig. 26　第１～３号製鉄炉址実測図 ……38
Fig. 27　第４号製鉄炉址実測図 ……39
Fig. 28　第１号竪穴実測図 ……40
Fig. 29　第２号竪穴実測図 ……41
Fig. 30　第３号竪穴実測図 ……42
Fig. 31　第176次調査地点位置図・調査区設置図（１：200）……45
Fig. 32　第176次調査遺構配置図（１：100）……46
Fig. 33　SB－02、SC03、SX04、SC05実測図（1：60、1：40）……47
Fig. 34　出土遺物実測図（１：３）……48

図 版 目 次

ＰＬ．１　①調査区全景　②旧石器時代探査の調査状況　③旧石器探査の試掘トレンチの位置
ＰＬ．２　①調査区掘立柱建物全景　②中央部掘立柱建物　③中央部（拡大）
ＰＬ．３　①調査区西半部・掘立柱建物　②調査区中央～西半部・掘立柱建物　③調査区東半部・掘立柱建物
ＰＬ．４　①調査区全景・南北棟建物　②調査区・南北棟建物　③調査区東半部・掘立柱建物
ＰＬ．５　①SD－01先端部状況　②SD－01全景
ＰＬ．６　①～③SD－01遺物出土状況
ＰＬ．７　①SD－02先端部　②SD－02全景
ＰＬ．８　①～③SD－02礫露出状況
ＰＬ．９　①～③SD－02遺物出土状況
ＰＬ．10　①～③SD－02遺物出土状況
ＰＬ．11　①土壙墓（東より）　②土壙墓（北より）
ＰＬ．12　①～③土壙墓・副葬土器出土状況
ＰＬ．13　①第２号製鉄址　②第２号製鉄址スラッグ出土状況　③第３号製鉄址
ＰＬ．14　①第４号製鉄址全景　②第１・４号製鉄址全景（西から）
ＰＬ．15　①SB－02　②SB－01　③SB－01・02
ＰＬ．16　①SB－05（南から）　②SB－05（北から）　③SB－05（東から）
ＰＬ．17　①SB－06（東から）　②SB－06（北から）
ＰＬ．18　①SB－68　②SB－23　③SB－38（北から）
ＰＬ．19　①SB－24　②SB－10　③SB－21
ＰＬ．20　①SB－04（南西から）　②SB－22　③SB－60
ＰＬ．21　①SB－29（北から）　②SB－29（南から）　③SB－04
ＰＬ．22　①SB－39（東から）　②SB－39（西から）　③SB－52
ＰＬ．23　①SB－09（南から）　②SB－09（北から）　③SB－61
ＰＬ．24　①SB－03　②SB－67　③SB－27
ＰＬ．25　①SB－60　②SB－04　③SB－07
ＰＬ．26　①SB－32　②SB－54　③SB－40
ＰＬ．27　①調査区・北東部　②調査区・北東部　③SB－07
ＰＬ．28　①SB－62（西から）　②SB－31（西から）　③SB－44（南から）
ＰＬ．29　①調査地点調査前近景（北東から）　②遺構検出状況（南西から）　③遺構完掘後（南西から）
ＰＬ．30　①竪穴住居SC03検出状況（西から）　②竪穴住居SC03完掘後（東から）　③掘立柱建物SB02（西から）
ＰＬ．31　①溝状遺構SD01（南西から）　②不明遺構SX04（西から）　③拡長区遺構検出状況（西から）
ＰＬ．32　①竪穴住居SC05（西から）　②ピット（西から）　③出土遺物

第１章　はじめに

１．調査に至る経過

福岡市の平野部は、大きく東の福岡平野と西の早良平野からなっている。有田遺跡群の所在する有田・小田部地区は、西の早良平野の中央よりやゝ北東に片寄った所に位置していて、かつては福岡市近郊の農村地帯であった。しかし、経済の高度成長と歩を同じくして、市域の都市化が進み、特に昭和47年、政令指定都市になった以後の都市化はめざましく、昭和57年の市営地下鉄の開通はさらに都市化に拍車をかけることとなった。比較的中心部に近い有田・小田部地区は例外とはなりえず、激しい開発の波が押し寄せ、今はかつての田園風景は消え、高層住宅が建ち並んでいる。

福岡市教育委員会は、有田・小田部地区のこれらの開発に対処し、破壊される地区については発掘調査を実施してきた。それらの多くは専用住宅建設であり、その他、学校建設、市営住宅建設などの公共事業や、民間の開発に伴う原因者負担の事業も含まれている。有田遺跡群の調査件数は平成７年まで180件に達している。本書には、国庫補助事業として調査を実施した昭和52年度の第４次調査、平成６年度に調査を実施した第178次調査の成果を報告する。

２．調査体制

(1)　第４次調査の調査組織

調査地区　福岡市早良区小田部
調査期間　昭和52年６月９日～８月19日
調査主体　福岡市教育委員会
教育長　戸田成一、社会教育部長　青木　嵩、主幹　志鶴幸弘、文化課長　清水義彦
庶務担当　埋蔵文化財係長　三宅安吉、国武勝利
発掘調査　山崎純男、沢　皇臣、山口譲治、横山邦継
調査補助員　前田義人、原　俊一、奈良崎和典、曽根田諭、久保達三、市橋重喜、吉留秀敏
整理作業　久賀登世子、小松原澄江、藤アイ子、矢川みどり、成清直子

遺跡調査番号	7710	遺跡略語	ＡＲＴ－４
地番	小田部２丁目139	分布地図番号	原82
調査期間	昭和52年６月９日～８月19日		

第２章　遺跡の立地と周辺遺跡

１．遺跡の立地と調査区の位置

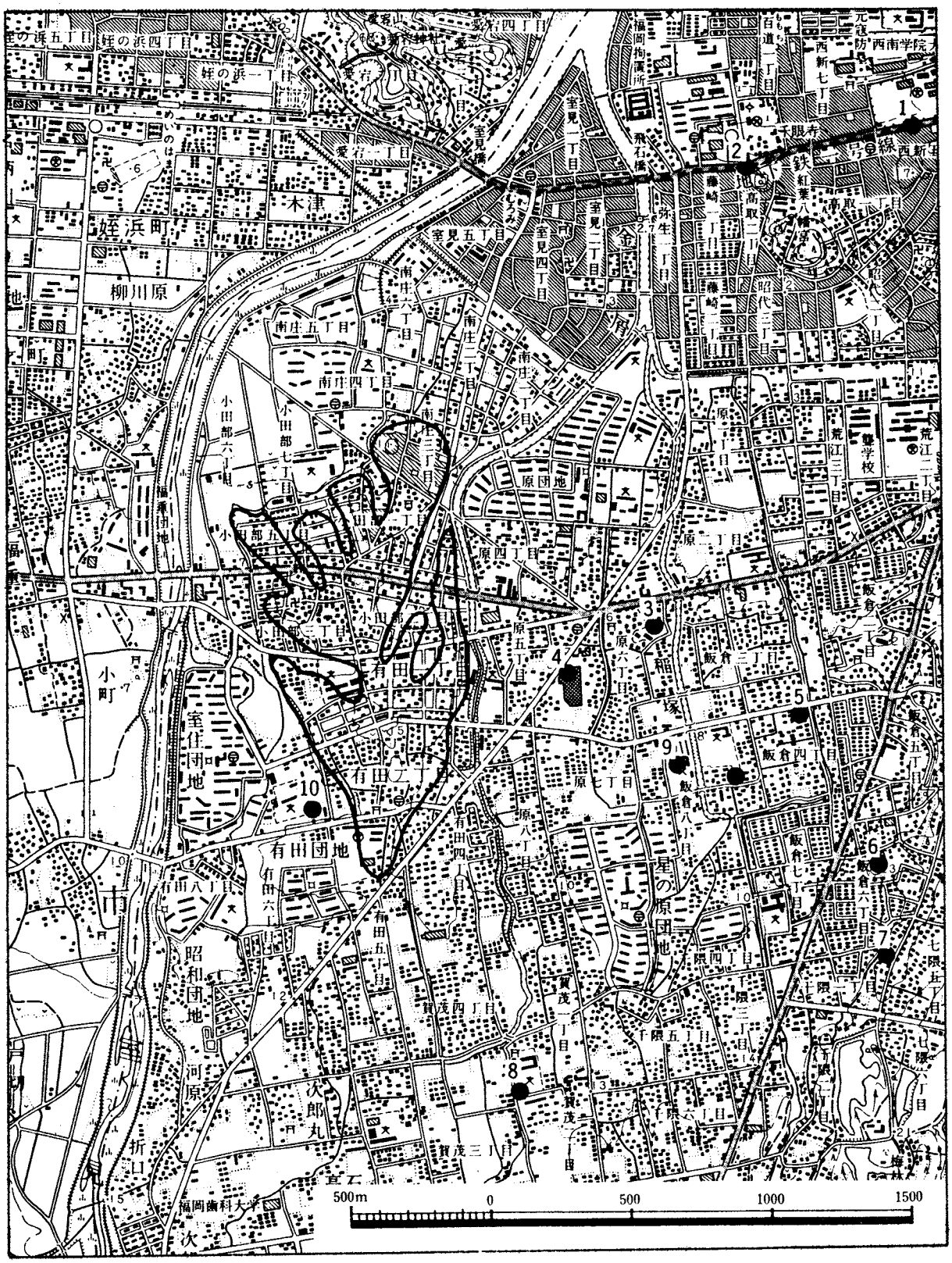
福岡の平野部は地形的に大きく東の福岡平野と西の早良平野に二分される。この両平野の境界をなすのが、脊振山系の一支脈である油山（標高569.4m）より派生した平尾丘陵（最高位は鴻ノ巣山の標高100.5m）や長尾・飯倉の南北に細長く発達した低丘陵である。

有田遺跡群は西の一画を占める早良平野の中央よりやゝ北東にずれた所に位置する標高15m前後を測る独立した中位段丘II面を中心とした地域に分布している。台地の西側には、脊振山系を水源とする室見川が早良平野を東西に二分するように中央部分を北流している。また、台地の東側には同様に金屑川が北流している。金屑川は室見川に水源を求め、室見川に比較し小規模な川であるが、室見川東岸の水田の主要な用水路の機能を果している。有田・小田部の東西の台地裾は流路の侵蝕によって削られ、段丘崖を形成している。このような地形と遺跡立地、換言すれば、中位段丘の東西（両側）が川に狭まれ、一方の川は小規模で水田の用水が求められる地形は、福岡平野における弥生時代開始期の遺跡として著名な板付遺跡のあり方と極めて類似し、共通点が多い。有田遺跡群にも同時期、あるいはやゝ時期の下る環濠が三ケ所に存在する。水稲農耕開始期には、このような地形が開田を行うに有効であり、積極的にこのような立地条件の地を求めていったものと考えられる。今後は地形学的な面からも弥生時代開始期の状況を追求する必要性があろう。

有田遺跡群の立地する有田・小田部・南庄の台地（中位段丘II面）の形成は洪積世までさかのぼることが明らかである。砂礫層の上に台地の基盤層となる阿蘇火山灰に由来する白色粘土の八女粘土層が２～４mの厚さで堆積し、その上位に同じ由来の黄褐色の鳥栖ローム層が１～２mの厚さで堆積。さらにその上位に新期ローム層が堆積しているが、この層は部分的で存在しない所もある。また、場所によっては、この層中に旧石器が包含されている。新期ローム層の上には沖積層が堆積するが、未発達でほとんどみることはできない。調査区の大部分は、畑の耕作土となっている表土層を除去すると、直下に新期ロームないしは鳥栖ロームがすぐ顔を出す。これは上記の沖積層形成の未発達もさることながら、中世における削平が大きな原因と考えられる。遺構は新期ロームないしは鳥栖ロームに切り込まれたものであるが、完全に遺存する遺構は、中世を除いて極めて少ない。

有田・小田部・南庄の台地は南北方向に細長く、南北の長さ約１km、最大幅0.7kmを測り、北に緩やかに傾斜している。旧地形では最高所（第６次調査区周辺部）は標高約15m、周辺の水田面との比高差は５～７mである。台地には浅く緩やかな谷がいくつも形成され、台地は北方向にむかって八つ手状に分岐している。浅い谷は弥生時代には水田として利用された可能性が強い。特に東側の谷は大きく、試掘調査の結果では、幾重にも重なりあった水田土壌が観察される。

各調査区の位置は、第４次調査区が、台地北側のほぼ中央部に位置し、国道202号線バイパスに面している。丘陵尾根部に近く、周辺では最も高く、平坦面も広い。標高は約12mで緩るやかに東に傾斜している。



1．西新町遺跡　2．藤崎遺跡　3．原遺跡　4．原談儀遺跡　5．飯倉遺跡
6．飯倉原遺跡　7．干隈遺跡　8．鶴町遺跡　9．原深町遺跡　10．有田七田前遺跡

Fig. 1　有田・小田部の位置と周辺遺跡

Fig. 2　有田・小田部台地と発掘調査地点（縮尺 1/5,000）

Fig. 2　調査区の位置

2．周辺の遺跡と歴史的環境

有田遺跡群の調査を含めた早良平野における考古学的調査は、市街地の拡大に伴い飛躍的な増加を示し、福岡市内で最もその内容が明らかになりつつある地域である。以下、有田遺跡群を中心にすえて、早良平野における各時代の歴史的展開の概略をながめていこう。

旧石器時代

早良平野に残された人類の足跡は旧石器時代までさかのぼる。これまでは、表面採集の遺物によって数ケ所の遺跡が知られていたが、最近では調査例も増加してきた。本報告の第4次調査でも、わずか1点であるがブランテングの施されたナイフ形石器が出土している。第6次調査では文化層を確認できた。ナイフ形石器を主体とした2ケ所の石器集中区があり、集石も発見された。この調査は早良平野では最も早い旧石器時代の調査例である。以後、有田・小田部の台地では各所で散発的ではあるが遺物が調査されている。また、樋井川の上流域、柏原遺跡群ではナイフ形石器や細石器を出土する小規模な遺跡が調査され、下流域の神松寺の丘陵では三稜先頭器が出土した。吉武高木地区では圃場整備に伴う調査で細石器文化の良好な遺跡が発見され、有力な資料が提供された。以上の結果、早良平野の旧石器時代の変遷は、他地域と同じ動きをしていることが明らかになった。今後は、より具体的な遺跡間の関連性がもとめられる。

縄文時代

旧石器時代同様に、遺跡としては、若干の遺物が表面採集されている数ケ所の遺跡に過ぎなかったが、最近の調査で多数の縄文時代遺跡が発見、調査され、飛躍的な成果をあげつつある。遺跡は草創期から晩期の各時期にわたり、その数は50ケ所を越えている。遺跡数の増加や内容が明らかになるにつれて、従来の北部九州における縄文時代観は完全に払拭されたとみてよいであろう。

縄文時代草創期、早期の遺跡は最も発見例が多い。早良平野をとり囲む、東側の油山をはじめ、その支脈、南側の脊振山系、西側を限る飯盛山、叶岳とその支脈の山麓部に点在し、日増しに密度が濃くなっている。草創期遺跡には隆起線文や爪形文土器のような最古段階はないが、これらの土器と押型文土器の間を埋める刺突文、粘土貼付文、条痕文、無文土器が確認され、これまで北部九州で空白であった土器群の出土は大きな成果であった。押型文土器はベルト施文押型文から平底押型文土器までの北部九州における変遷がおさえられ、石器組成も把握することができ、押型文土器期の生業活動にせまることができるようになった。また、遺跡の分布や変遷から同期のテリトリーも明らかにされつつある。草創期の代表的な遺跡には柏原E、柏原F遺跡がある。早期遺跡はいずれも押型文土器の遺跡である。代表的な遺跡は油山山麓に柏原A、柏原F、柏原K、クエゾノ、田村、脇山遺跡、西側の飯盛山、叶岳山麓部に広石、コノリ遺跡がある。なお、最近調査された野芥大藪遺跡では、北部九州では極めてめずらしいアカホヤ層が確認され、その下位より条痕文土器が出土している。アカホヤ層の分布が著しい中九州以南の土器群との対比が可能となり、また、北部九州におけるアカホヤ火山灰の降下状況を知る手がかりなる大きな成果を得た。

前期・中期の遺跡も前時代同様に増加しつつある。遺跡の立地は前時代と異なり、山麓部と沖積地の境に分布する傾向が認められる。立地からみて生業活動の変化を読みとることができる。前期の遺跡としては五ケ村池遺跡が古くから知られていたが、湯納遺跡、四箇遺跡、柏原K遺跡、柏原L遺跡は新たに発見された代表的な遺跡である。いずれも轟式・曽畑式土器からなる遺跡であるが、今後は他の型式を主体する遺跡の発見も期待できる。湯納遺跡ではドングリ・ピットが発見されており、前記

した生業活動の変化の一端をみることができる。中期遺跡には有田高畠遺跡、吉武遺跡群、柏原K遺跡、四箇遺跡群、入部遺跡群などがある。前二者は阿高系土器段階の大規模なドングリ・ピット群の遺跡で、生業がより植物食に比重を移していったことが感知される。これに対し、後二者は九州外の東の土器型式である鷹島式土器や船元式土器が主体を占めるなど、在地土器と搬入土器のあり方に興味をそそられる。集落構造にも変化があったとみられ、有田高畠遺跡のピット群は径40mの環状をなすことが判明し、これから集落構造についても追求できる展開にある。

後期遺跡としては前記の有田高畠遺跡、吉武遺跡群が後期に継続する。新たに出現する代表的な遺跡として四箇遺跡、四箇東遺跡がある。四箇遺跡、四箇東遺跡は共に沖積地の自然堤防上に立地しており、前時代よりより低地への移行が進み、以後の弥生時代と同様の立地を示している。前時代以上に植物食への依存度が増したことが推測できることは、遺跡自体が、ドングリの皮で占められた特殊泥炭層からなっていることからも容易であろう。泥炭層中から木製品やヒョウタン、リョクトウなどの栽培植物の種子も発見されていて、北部九州における後期後半の代表的遺跡の一つといっても過言ではない。四箇東遺跡では多量の土器と共に土偶や玉類が出土している。特殊泥炭層こそ伴わないが、有望な遺跡であることは疑いない。時期的には四箇遺跡に後続し、四箇遺跡から四箇東遺跡への移住も考えられる。

晩期遺跡は前半期は未だ少ない。柏原K遺跡で中頃の土器がセットで出土しているのが注目される。また、入部遺跡ではこの時期の最小単位の集落が把握されていて極めて注目される。円形竪穴住居址、3棟からなっている。今後、晩期集落の基準となろう。終末期の突帯文土器段階の遺跡の増加はめざましい。水稲農耕の開始期でもあり、その分布は注目される。次の弥生時代の頃でさらに分析してみよう。日本における弥生時代の開始をより理解するためには、両時代の内容が明らかになりつつある早良平野の縄文・弥生時代遺跡の研究は欠かせないものとなろう。

弥生時代

早良平野の考古学的調査で最も大きな問題を提起したのは、弥生時代遺跡の調査である。一つは水稲農耕開始と弥生時代開始期の関連性とその上限問題、他の一つは階級の発生過程と国の成立の問題である。

水稲農耕、弥生時代開始期の問題は縄文時代終末期の突帯文土器段階から弥生時代初頭、板付Ⅰ式土器段階へかけての問題である。早良平野にはこの時期の遺跡が集中して分布し、かなりの遺跡で発掘調査が実施されている。突帯土器期の遺跡は早良平野で約50ヶ所確認されており、早良平野の水田可耕地全域に及んでいて、これまでの遺跡のあり方を一変させている。代表的遺跡には有田七田前遺跡、石丸・古川遺跡、入部遺跡群などがある。有田七田前遺跡は有田台地の西側の沖積地に立地し、調査により溝が検出され、突帯文単純期の遺物が多量に出土している。遺物の中には、磨製石剣、磨製石鏃、柱状・扁平片刃石斧などの大陸系磨製石器をはじめ、稲作関連資料が含まれ、日本における水稲農耕の開始を突帯文土器単純期まで遡らせる重要な役割を果した。同様に石丸・古川遺跡でも多量の遺物が出土し、石包丁などの稲作関連資料が出土している。入部遺跡群では突帯文土器単純期の墓地が確認されるにいたった。藤崎の砂丘に形成された墓地も突帯文単純期に遡る。また、古くから知られた船石遺跡は、早良平野唯一の支石墓である。以上のように早良平野における突帯文土器の段階は、既に、後の弥生時代の原形が存在していたことは、遺跡分布や内容から知ることができる。弥生時代初頭の遺跡としては有田遺跡があまりにも有名である。南の台地中央に突帯文土器～板付Ⅰ式土器段階の環濠が確認されている。環濠は長径300m、短径200m、濠に囲まれた面積は約4haの大規模なものである。さらに、最近この環濠に後続する板付Ⅰ式土器段階、板付IIa式土器段階の環濠の存在

も確認され、環濠集落のあり方や意義づけにも問題を提起している。有田遺跡よりやゝおくれて重留遺跡群にも環溝集落が出現し、突帯文土器段階より、さらに面的ひろがりをみせている。明確な水田址は確認されていないが、橋本遺跡では用排水路や堰等の水田関連遺構、四箇遺跡では矢板が打ち込まれた畦畔が確認されている。いずれも突帯文土器段階の水田関連遺跡であり、今後、良好な水田遺構が検出されることは疑いない。拾六町築地遺跡では前期から古代にかけての多量の木製品が出土し、特に、前期の木製農耕具は種類も多く、道具類の面から初期水稲農耕の実態を明らかにしたことは特筆される。今後、さらなる追求、検討が必要であろう。

階級の発生と国の成立の問題で特記されるのは吉武の圃場整備に伴う吉武高木、大石、樋渡の各遺跡群と入部地区の圃場整備に伴う東入部遺跡群の調査である。吉武高木遺跡では甕棺墓13基、木棺墓4基が調査され、細形銅剣、玉類をはじめとする多量の副葬品が出土している。中でも3号木棺からは細形銅剣2、細形銅矛1、細形銅戈1の4個の青銅製武器、多鈕細文鏡1面、ヒスイ製勾玉と碧玉製管玉からなる装身具が集中して出土し、注目される。時期は前期末～中期初頭に比定できる。大石遺跡は約220基からなる共同墓地である。8基に10個の青銅製武器が副葬されるが、吉武高木遺跡に比べ、副葬品もつ比率は低い。時期は前期末～中期後半に比定できる。樋渡遺跡は、やゝ時期が下り、中期中頃～後半、長方形プランをなす墳丘墓とみられる。甕棺墓6基から、重圏文星雲鏡1面、細形銅剣3個、素環頭鉄刀1個、鉄剣2個などが検出されている。これら一連の墳墓群は早良平野を代表するものであり、これらの分析は上記問題に大きく迫るものとなろう。また、最近調査された東入部遺跡では、甕棺墓170基、土壙、木棺墓50基が調査され、方形状に祭祀溝で区画された墓域の墓から、細形銅剣2個、銅釧6、鉄剣1、素環頭鉄刀1、鉄刀1、鉄矛2などの副葬品が集中して出土している。同一墓域における隔差、時期変遷における差など、今後の分析によらねばならないが興味あるあり方である。また、前記の吉武遺跡群との比較することによって、早良平野権力の動向はより明らかなものとなろう。

この他、従来から判明していた有田遺跡、飯倉唐木遺跡、野方久保遺跡でも甕棺墓に青銅製武器の副葬例や丸尾台遺跡の日光鏡3面、鉄刀の副葬例、最近調査された有田遺跡の2基の甕棺から出土した内行花文昭明鏡、朝鮮半島製とみられる小形内行花文彷製鏡各1面の副葬例などを含め、これらを比較検討することによって、国がどのように形成されたかの検証に大きな飛躍が期待できる。調査の進んだ早良平野は一つのモデルとして重要である。

古墳時代以降

古墳時代～歴史時代にかけても、早良平野における考古学的調査の進展によって、歴史解釈の変化を余儀なくされている。

古墳時代において、早良平野は、福岡、糸島の有力な両平野に狭まれ、緩衝地帯としての役割があるが故に、前方後円墳のない地域として特殊視されていた。しかし、最近の調査成果はそれをくつがえしつゝある。重留の拝塚古墳は墳丘が削平されていたが、調査の結果、全長70.8mの特殊な形をした前方後円墳であることが判明した。吉武樋渡古墳も造出し部をもつことがわかった。共に埴輪を有している。梅林古墳は新たに発見調査された前方後円墳である。全長27m、竪穴系横穴式石室を内部主体とした5世紀後半の古墳である。早良平野には面しないが、樋井川流域でも新たに古墳が発見されている。田島の京ノ隈古墳は、前方後方墳で、後方中央に主軸に平行して割竹形木棺を内蔵した粘土槨がある。4世紀後半の築造と考えられる。神松寺御陵古墳は、全長20mの小型の前方後円墳で、後円部に、前方部とは逆方向に開口する横穴石室を有する。築造年代は6世紀中頃。最も上流にある柏原A－2号墳も前方後円墳である。横穴式石室を内部主体とする。6世紀後半の築造である。この他、海岸

部の藤崎遺跡では方形周溝墓が調査され、うち1基には三角縁神獣鏡が副葬されていた。以上のように、皆無であった前方後円墳（前方後方墳）も5基に増え、今後も増加傾向にある。他平野との隔差も縮まり、特殊化する必然性は薄くなりつつある。今後は在地的色彩の強い古墳とされた五島山古墳や重留箱式石棺墓等との検討が必要となってこよう。

早良平野の古墳時代の特徴の一つとして、韓半島産の土器等の多量出土があげられる。飯盛地区圃場整や道路建設に伴う発掘調査で、4～5世紀の韓式土器が多量に出土し、原深町遺跡でも出土している。有田遺跡第6次調査では陶質土器が祭祀遺物に混入して出土している。吉武塚原古墳群第8号古墳や広石古墳群A－1号墳、吉武圃場整備地内古墳等から副葬品として陶質土器が出土していて、今後さらに増えそうである。このように韓半島に出自をもつ遺物が、どのような経緯をもって早良平野にもたらされたかは、今後充分検討する必要があろう。

早良平野では、三方を囲む山麓部に分布する群集墳も重要である。各小群に分かれ数百基が分布する。開発に伴う調査で、約100基の内容が明らかであり、その分析は、当時の社会構造を知る上では見のがせない。和名類聚抄の早良部の六郷（毗伊郷、能解郷、額田郷、早良郷、平群郷、田部郷）との対応関係は注目される。ちなみに六郷を現地名にあてると、毗伊郷－旧・樋井川村、能解郷－野芥、額田郷－野方、早良郷－麁原、平群郷－戸切、田部郷－小田部となる。

古代遺跡で注目されるのは、有田・小田部遺跡群中にみられる3本単位の柵列に囲まれた倉庫群と官衙と考えられる建物群の存在である。前者は、現在、有田・小田部の丘陵上に6ケ所確認されている。全容が明らかな例がないため、規模や用途は不明。第6次調査区を中心とした柵列の推定規模は、一つが南北約57m、東西約50mの半町四方、他の一つが、南北町57m、東西55m以上の半町四方の区画である。内部には総柱の倉庫群を伴う例が多い。同様の施設は福岡平野の比恵遺跡群で数ケ所発見されている。時期的な問題が残るが、那ノ津宮家との関連が想定される重要な遺構である。後者は、有田台地の最高所の中央部に区画内に大型建物や大型の総柱建物が柱すじを合せて検出されている。早良郡衙あるいは郡倉とみられるが確証はない。今後の検討が必要である。この他、早良平野で確認されている大型建物群は下山門敷町遺跡がある。大規模な製鉄遺構が伴い、鉄生産に関する官衙的な遺跡とみられている。同遺跡周辺では特に古代の製鉄関連遺跡が多く、下山門遺跡や石丸・古川遺跡では製鉄遺構を伴い、多量の越州窯系青磁器や白磁が出土している。延喜式巻24・主計寮にみられる筑前国の貢納品中の鍬・鉄と符号し、これらの遺跡はその生産の一端をになっていたと思われる。また、最近の調査では、郷の実態も明らかになりつつある。樋井川の上流に位置する柏原M遺跡では約1万㎡の調査範囲内に2群の建物群があり、越州窯系青磁や白磁・長沙窯磁器・晩唐三彩等多量に出土し、約100点の墨書土器の中には「郷長」「佐原補」などがあり、同遺跡が郷長の居館と推定することができる。周辺の集落と比較検討を進めていけば、考古学的に郷の実態は明らかになろう。本書に収録した第4次調査区は、田部郷の一部にあたり、そのあり方は注目される。

中世遺跡の調査も進んでいるが、文献との関係で注目されるのが、柏原K遺跡である。入来文書に見える弘安の役恩償地と遺跡が完全に一致し、注目されている。今後、同時期の遺跡と文献の比較は、早良平野の歴史をより具体的にするものと考える。

第３章　第４次調査の記録

１．調査区の地形と調査概要

第４次調査区は福岡市早良区小田部２丁目139の1,500㎡を対象として調査を実施した。調査期間は1977年６月９日～８月19日までの72日間である。

調査区は早良平野の中央よりやゝ東北に片寄った所に位置する有田・小田部の独立丘陵上に立地している。この独立丘陵は八女粘土層、鳥栖ローム層の洪積層を基盤とした中位段丘Ⅱ面で、有田の最高地（標高15m）を中心とする中央部にはかなりの広さの平坦面を有する。その南北には小さな谷が解析され、谷と谷にはさまれた舌状の台地がヤツデ状に分枝しながら延びている。調査区は北側丘陵のほぼ中央部に位置している。標高約12mで、調査区周辺が北側丘陵では最高所にあたり、平坦面が広がる。調査区の北側に接して202号線バイパスが東西に走っている。小田部集落の北東端にあたり、調査前は畑地となっていたが、現在は、建物がたちこめ、昔日の姿はない。

調査区は東西35m、南北45mのやゝ南北に長い長方形をなしている。調査面積は約1,400㎡をはかる。調査区西側は北丘陵の最高所で、東と北にむかってゆるやかな傾斜をもって低くなっている。特に東側は調査区のすぐ東から落ち込み小さな谷部に連なっている。北側は先述したようにバイパスになっており、約１m前後が削平され、遺構は完全に消滅してしまったものと思われる。調査区は厚さ約20～40㎝の表土層（現在は畑の耕作土となっている）の直下に、新期ローム層が直接顔を出しており、縄文時代以降の土層堆積や遺物包含層は存在しない。（ただし、東側の段落ち部より東には若干の中世の遺物包含層が残存している。）新期ローム層の下は前述したように鳥栖ローム層、八女粘土層が堆積している。遺構はローム層中に掘り込まれていて、深い遺構（溝）は八女粘土層まで達している。遺構は多数の柱穴と溝、土坑、製鉄関連遺構があり、比較的単純である。柱穴間には、かなりの重複関係がみられる。柱穴や土壙墓が比較的浅い事や遺物包含層が存在しない事等からすれば、調査区全体にわたって数10㎝前後の削平があったとみられる。

本調査区から検出した遺構、遺物は比較的単純で、いくつもの時代にわたるものではない。以下、調査の概要についてみていこう。最も古い時期に属する遺物は、表面採集資料であるが旧石器１点がある。遺物包含層確認のため試掘トレンチを入れたが、包含層を確認するにはいたらなかった。旧石器時代を除けば、他の遺構・遺物は、古代末～中世の数100年間続いた集落遺跡の一部とみることができる。最も多い遺構は柱穴である。これら柱穴の組み合せによって復原される掘立柱建物は極力、現地で確認したが、一部、図上で復原したものを含め68棟が存在する。建物方向は東西棟、南北棟の二つの方向性があり、比較的統一性がある。掘立柱建物は相互に重複が著しく、最も激しい所は５棟が重なりあっている。これから見ると、少なくとも５時期にわたる生活が考えられる。溝は調査区東側に２条検出した。一部、段落ちと重複しているために残存状態は良好でないが、出入口状に掘り残された部分がある。また、この溝より東には柱穴が極端に少なくなり、復原できる掘立柱建物が少ないことから、この溝はある時期、掘立柱建物を囲むように存在していたものと考えることができる。溝底には多量の円礫や遺物が投棄された状態で出土しているが、これは、有田・小田部の中世溝と共通したものである。この他、３基の土坑がある。プランや深さはまちまちで、使用目的等は明らかにできないが、時期的には掘立柱建物群と同時期である。製鉄関連遺構は４基確認した。いずれも炉址と考えられるが、形態はいずれも異なる。第４号製鉄炉址では、炉の周囲に柱穴がめぐり、炉に屋根か

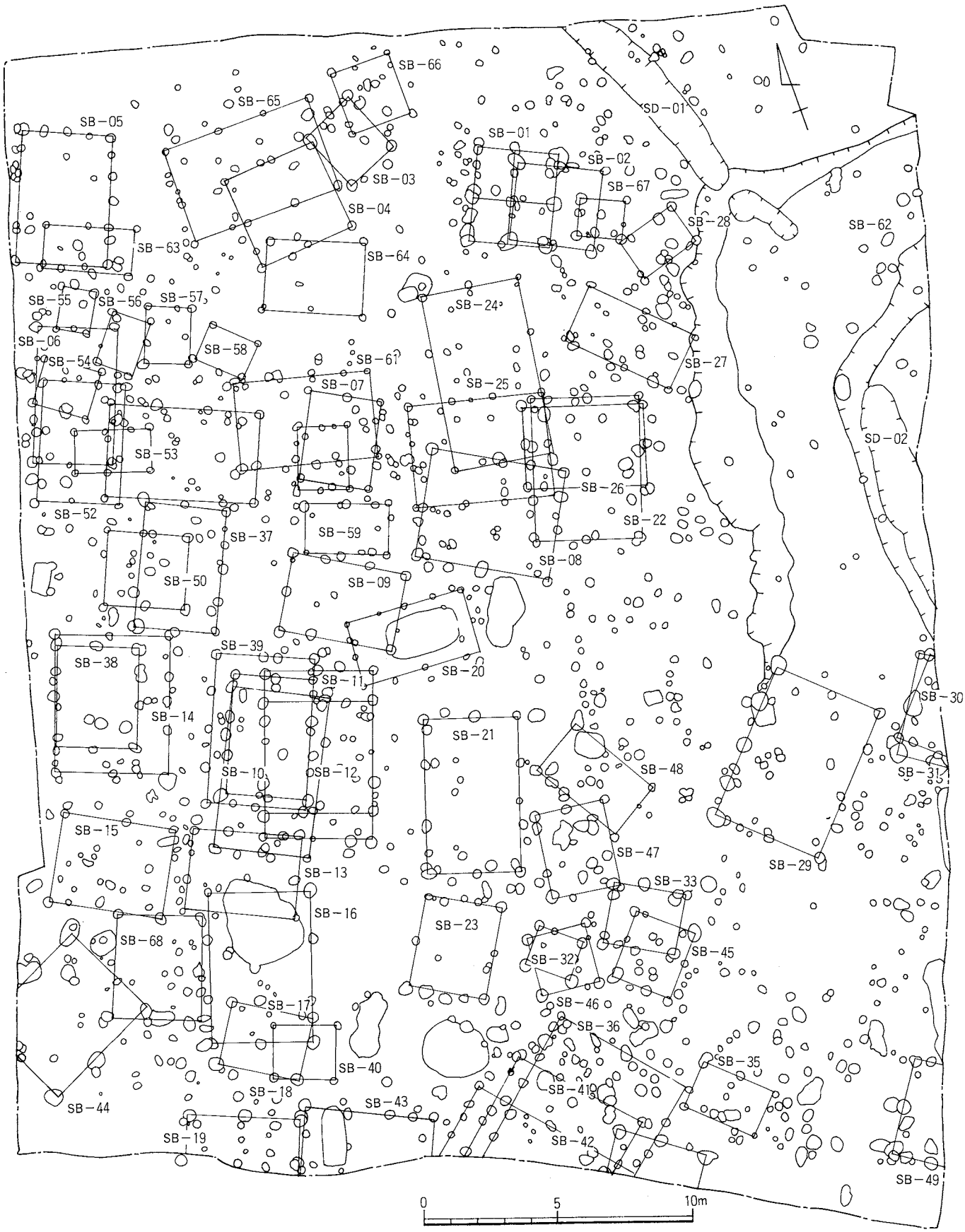


Fig. 3　第４次調査区遺構全体図

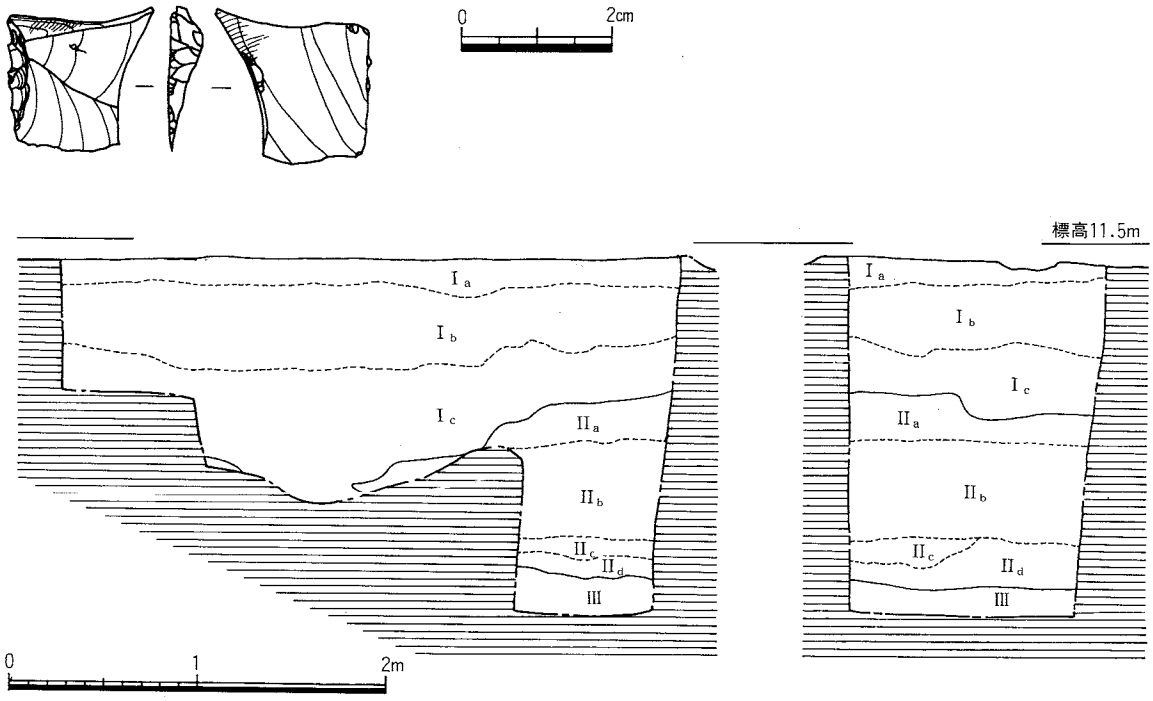


Fig. 4　旧石器実測図と土層実測図

けがあったことが明らかになった。遺構の中で最も時期が遡るのは、土壙墓である。調査区南端に検出した１基がある。土器７点が副葬されていた。時期的には古代末に比定される。屋敷神的な存在と考えられ、掘立柱建物の上限も、この時期におさまるものと考えられる。集落全域を調査した訳ではないが、その一端を把握し、ある程度、集落の構造分析ができる資料を得ることができたのは、重要な成果であった。

２．旧石器時代の調査

表面採集資料中に１点の旧石器を発見したので、集落遺構の調査終了後、遺物包含層の探査の試掘トレンチを設定し、発掘を実施した。試掘トレンチは、新期ローム層の最も残りの良い調査区西側に、対角線状に幅1.5m、長さ40mで設定し、新期ローム層から鳥栖ローム層上面までの約20cmの深さを発掘したが、遺物、あるいは礫群などを発見することはできなかった。トレンチ南端の一部を土層観察のため深く掘り下げた。今後のために、ローム層の堆積状況を以下に説明する。

土層断面図はFig. 4に示した。土層の違いは明瞭でないが、上よりⅠa層　暗褐色粘質土層、厚さ10～15cm。Ⅰb層　褐色粘質土層、厚さ30～40cm。Ⅰc層　淡褐色粘質土層、厚さ30～50cm。Ⅱa層　赤褐色土層、厚さ20cm前後。Ⅱb層　黄褐色土層、厚さ50cm前後。Ⅱc層　黄褐色土層、黒色の風化礫を含む。厚さ10cm前後。Ⅱd層　黄褐色土層、Ⅱb層に比べ砂粒が細い。厚さ10cm前後。Ⅲ層　黄白色粘質土層となっている。Ⅰa層が新期ローム層、Ⅰc～Ⅱd層が鳥栖ローム層、Ⅲ層が八女粘土層である。

遺物は表面採集の１点がある。黒曜石製、両側にプランティングがある台形様石器である。長さ2.1cm、幅2.0cm、厚さ0.4cm。

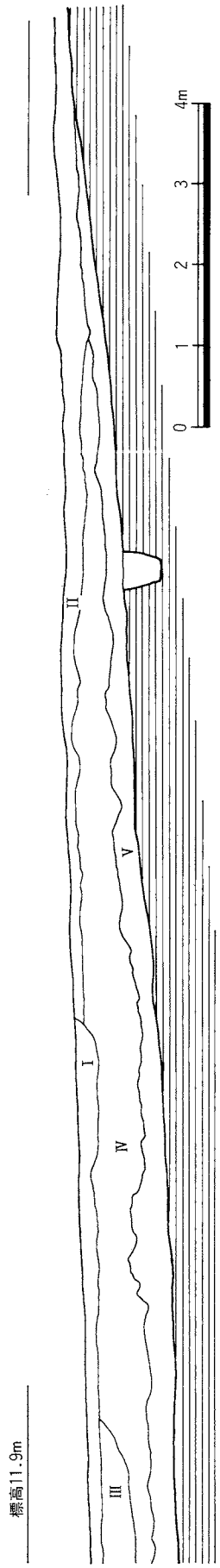


Fig. 5　調査区土層断面実測図

3．歴史時代の調査

(1)　調査区の土層

調査区内の土層は、先述したように表土下、すぐがローム層となるが、東側は落ち込み、東半部にわずかな包含層が残っている。調査区南側壁の状態から土層堆積をみてみよう。

Ⅰ層、赤褐色砂層　調査区東端にのみある土層、後世に搬入されたものか。厚さ10～20cm。Ⅱ層、砂を多く含んだ暗灰色土層、厚さ20～40cm、Ⅰ・Ⅱ層は畑の耕作土層である。Ⅲ層、やゝ砂を含んだ暗褐色土層、厚さ40cm、調査区東端にわずかにみられる土層である。Ⅳ層、黒褐色土層、厚さ10～60cm、調査区中央付近より始まる土層である。Ⅴ層、粒子が小さく粘性をもった黒色土層。厚さ10～50cm。層の上面は凹凸が著しい。Ⅳ・Ⅴ層が遺物包含層となっているが、遺物量は多くなく、破片も小さい。共に西側の高所から流れ込んで堆積した土層である。

(2)　掘立柱建物と出土遺物

①　掘立柱建物

SB－01（Fig. 6）

調査区北端中央部に検出した建物で、SB－02と重複関係にあり、SB－02に切られている。梁行、桁行共に２間の総柱建物、主軸方向をN－25°－Wにとる。梁行・桁行は共に3.2m、柱間1.6m、柱穴は径30～80cm、深さ40～50cmである。

SB－02（Fig. 6）

SB－01．67と重複関係にあり、SB－01を切っているが、SB－67との関係は不明、梁行・桁行は共に２間の3.2m、柱間1.6mである。主軸をN－62°－Eにとる総柱建物。柱穴は径30～50cm。深さ20cm～40cmである。

SB－03（Fig. 6）

SB－01の西側にある。SB－４・65・66と重複関係にあり、SB－04を切る。SB－65・66との関係は不明。梁・桁共に１間、柱間2.4m。柱穴は径40cm前後、深さ20cm前後。主軸方向N－25°－W。

SB－04（Fig. 6）

SB－01の西側に存在する。SB－03・64・65と重複関係にあり、SB－03に切られている。SB－64・65との関係は不明。梁・桁行共に２間、梁行3.4m、桁行3.6m。柱間1.8m。柱穴は径20～40cm、深さ20～30cm。主軸方向N－６°－W。

SB－05（Fig. 6）

SB－04の西側、調査区西端に検出した建物である。SB－63と重複関係にあるが、先後関係は不明。梁行２間、3.4m、桁行３間、5.0m、柱穴は径30～40cm、深さ30～40cm。主軸方向N－23°－E。

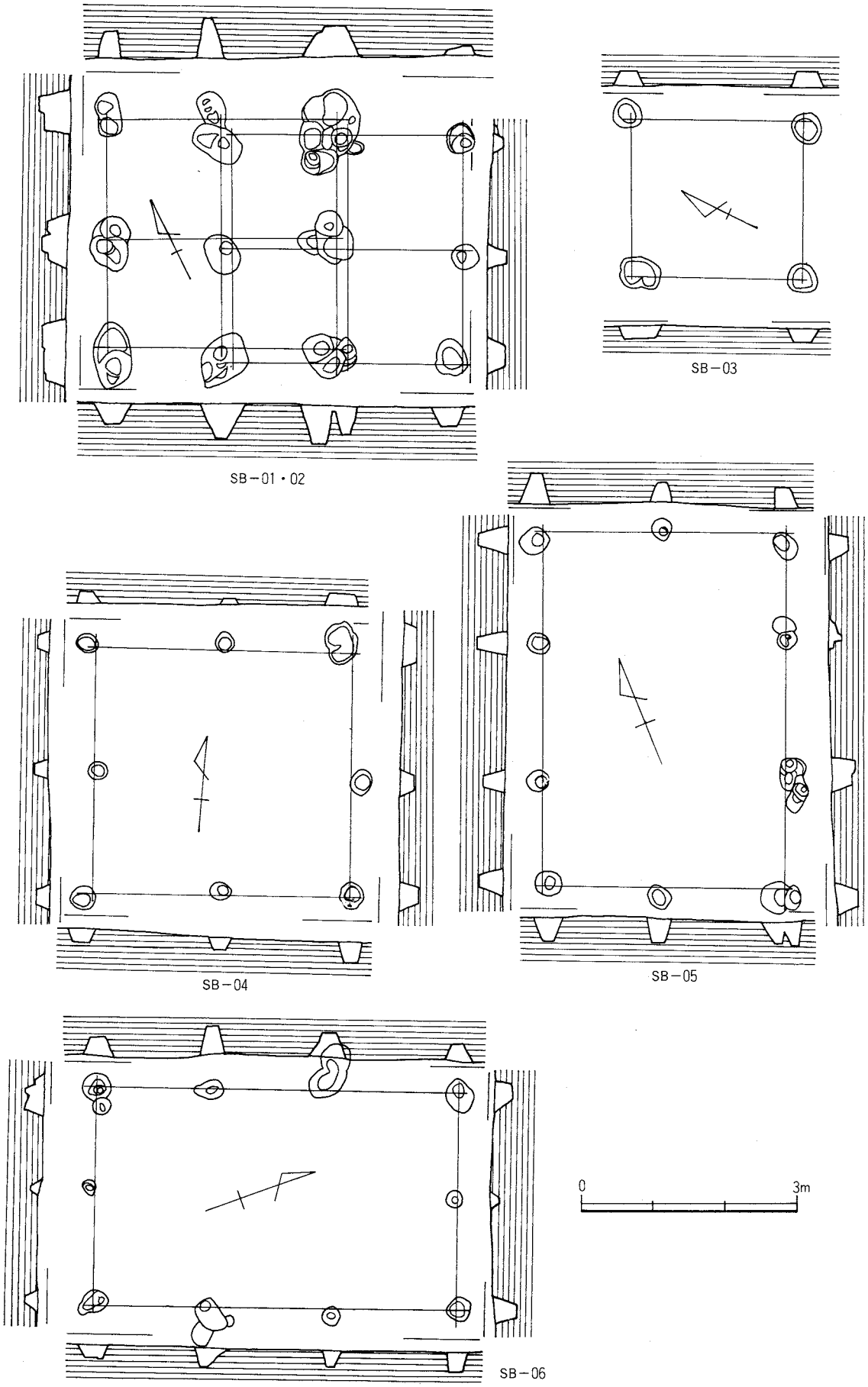


Fig. 6　掘立柱建物実測図Ⅰ（SB－01～06）

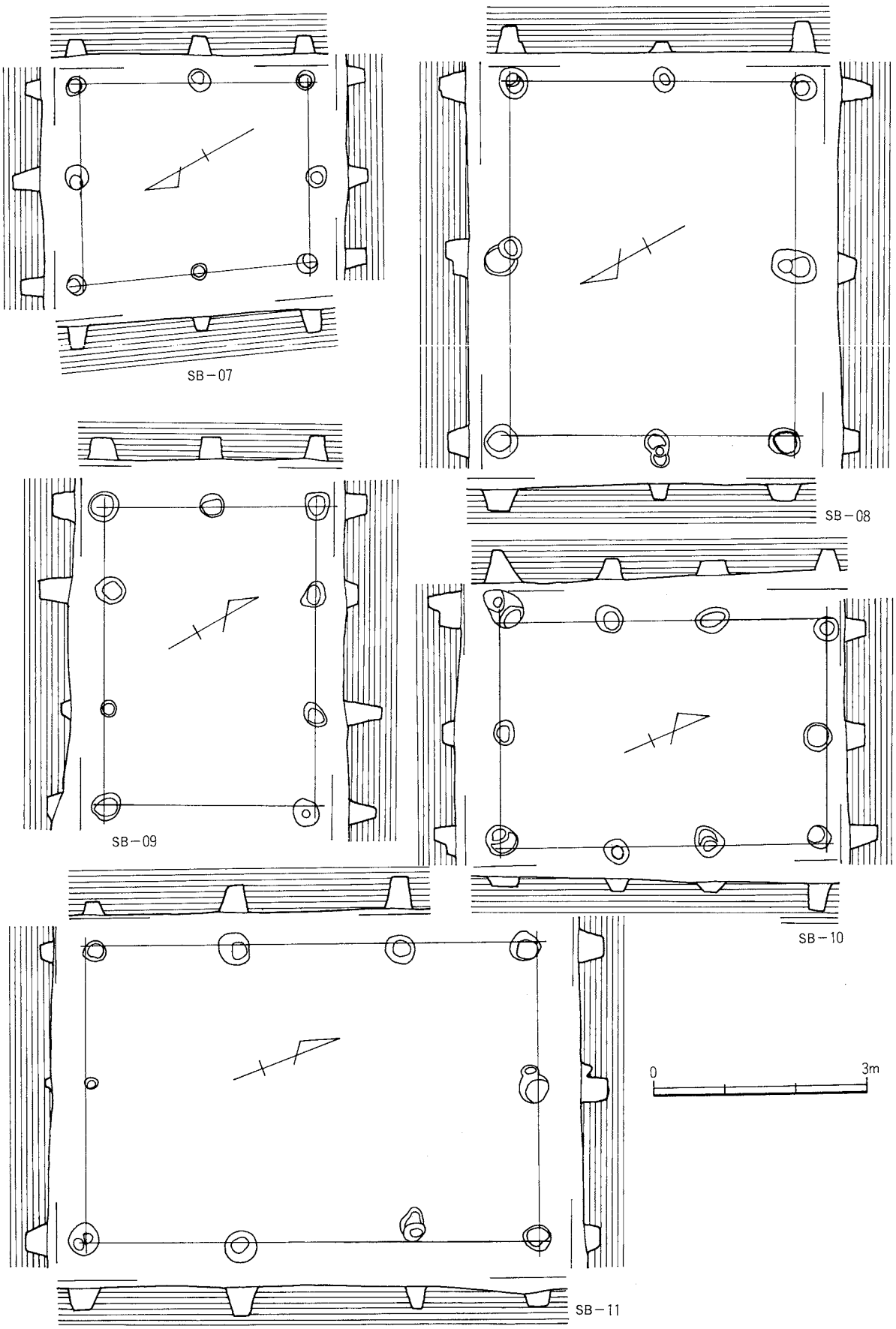


Fig. 7　掘立柱建物実測図II（SB－07～11）

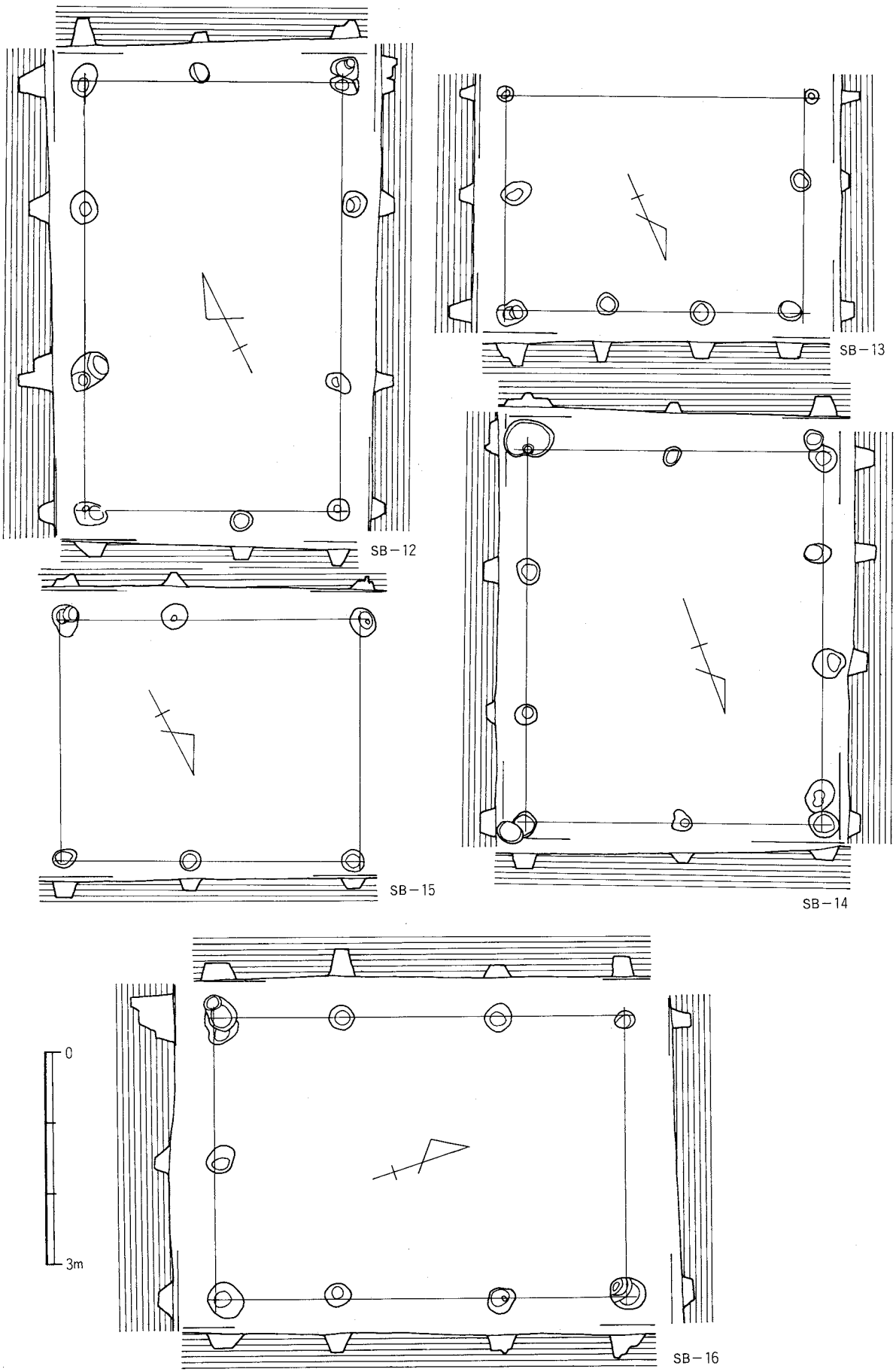


Fig. 8　掘立柱建物実測図Ⅲ（SB－12～16）

SB－06（Fig. 6）

SB－05の南側に柱筋をそろえて位置する。SB－51～56と重複関係にあり、SB－52に切られているが、他との関係は不明。梁行２間、3.2m、桁行３間、5.2m、柱穴は径20～40cm、深さ10～40cm。主軸方向N－22°－E。

SB－07（Fig. 7）

SB－06の東、SB－04の南に位置する。SB－60・61と重複関係にあるが、先後関係は不明。梁・桁行は共に２間、2.8m、3.2mを測る。主軸はN－29°－Eにとる。柱穴は径20～30cm、深さ20～40cm。

SB－08（Fig. 7）

SB－07の東側、調査区のほぼ中央に位置する。SB－22・25～26と重複関係にあり、SB－24・25に切られている。他との先後関係は不明。梁・桁行共に２間、4.0m、5.0mを測る。主軸方向はN－61°－W、柱穴は径30～50cm、深さ30～40cm。

SB－09（Fig. 7）

SB－08のすぐ南西に位置する。SB－20・59と重複関係にあるが、先後関係については不明。梁行２間、3.0m、桁行３間、4.2m。主軸をN－60°－Wにとる。柱穴は径30～40cm、深さ20～50cm。

SB－10（Fig. 7）

SB－09の南側に位置する。SB－11・12・39と重複関係にあり、SB－12を切っているが、他との先後関係は不明。梁行２間、3.2m、桁行３間、4.6m。主軸をN－24°－Eにとる。柱穴は径30～40cm。深さ10～40cm。

SB－11（Fig. 7）

SB－10と重複するが、やゝ東に寄っている。SB－10・12・20・39と重複関係にあるが、先後関係については不明。梁行２間、4.2m、桁行３間、6.4m。主軸をN－21°－Eにとる。柱穴は径30～50cm、深さ25～40cm。

SB－12（Fig. 8）

ほぼSB－10と重なるが、やゝ南にずれている。SB－10・11・39と重複関係にあり、SB－10に切られているが、他との先後関係は不明。梁行２間、3.6m、桁行３間、6.0m、主軸をN－27°－Eにとる。柱穴は径30～40cm、深さ20～40cm。

SB－13（Fig. 8）

SB－12と一部重複し、さらに南に位置する。SB－11・12・16・68・SK－03と重複関係にあり、SK－03に切られているが、他との先後関係は不明。梁行２間、3.2m、桁行３間、6.0m、主軸をN－66°－Wにとる。柱穴は径20～30cm、深さ20～30cm。

SB－14（Fig. 8）

SB－10の西側、調査区西端に位置する。SB－37・38と重複関係にあり、SB－37に切られ、SB－38を切っている。梁行2間、4.2m、桁行3間、6.2m。主軸をN－19°－Eにとる。柱穴は径20～40cm、深さ10～20cm。

SB－15（Fig. 8）

SB－14の南側に位置する。SB－68と重複し、SB－68を切っている。梁行１間、3.4m、桁行２間、4.2m。主軸方向N－63°－W。柱穴は径20～30cm、深さ10～20cm。

SB－16（Fig. 8）

SB－12の南に位置する。SB－13・17・40・SK－03と重複関係にあり、SK－03に切られているが、他との先後関係は不明。梁行２間、4.0m、桁行３間、5.8m、主軸をN－18°－Eにとる。柱穴は径30cm前後、深さ30cmで、ほぼそろっている。

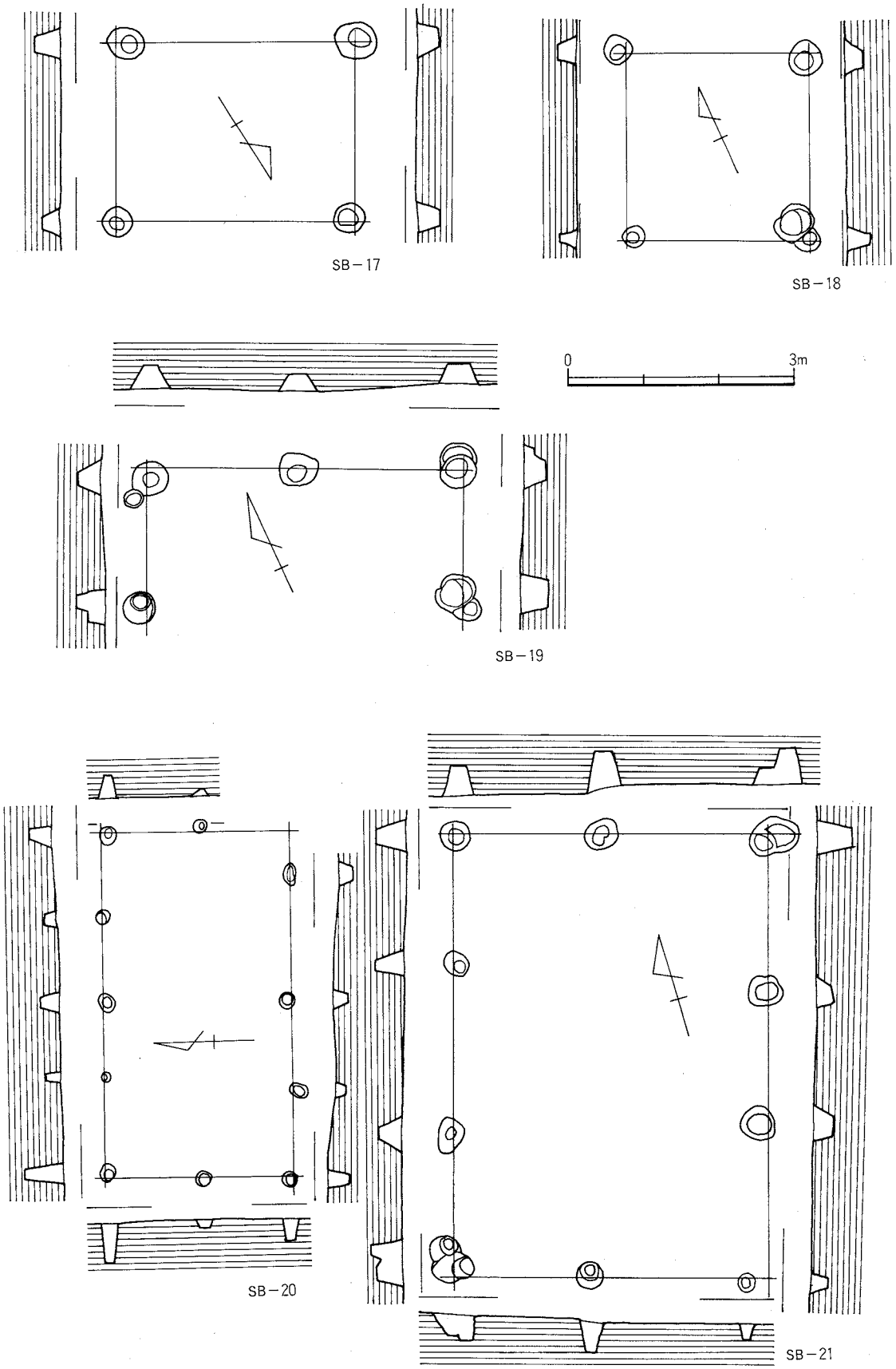


Fig. 9　掘立柱建物実測図Ⅳ（SB－17～21）

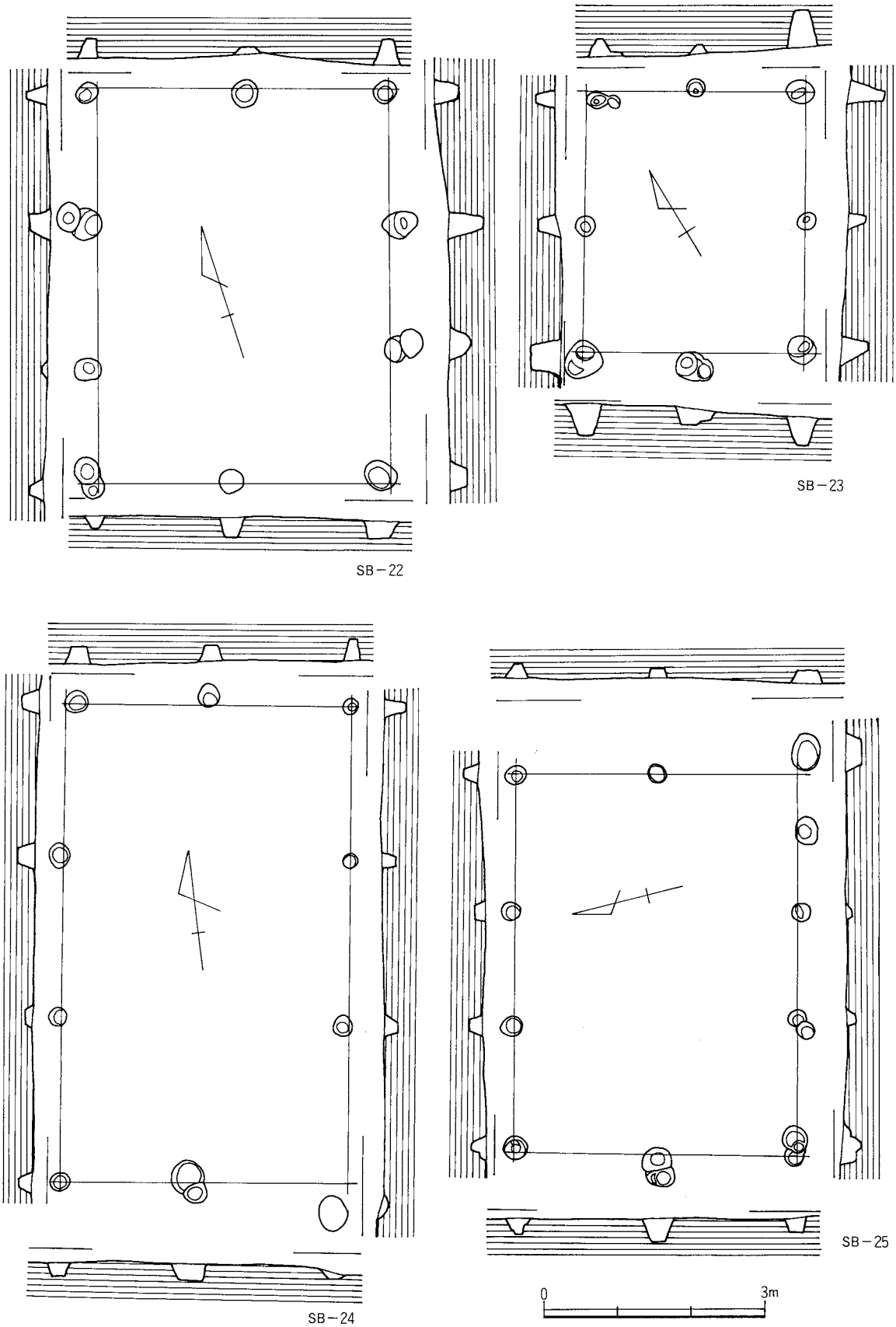


Fig. 10　掘立柱建物実測図Ⅴ（SB－22～25）

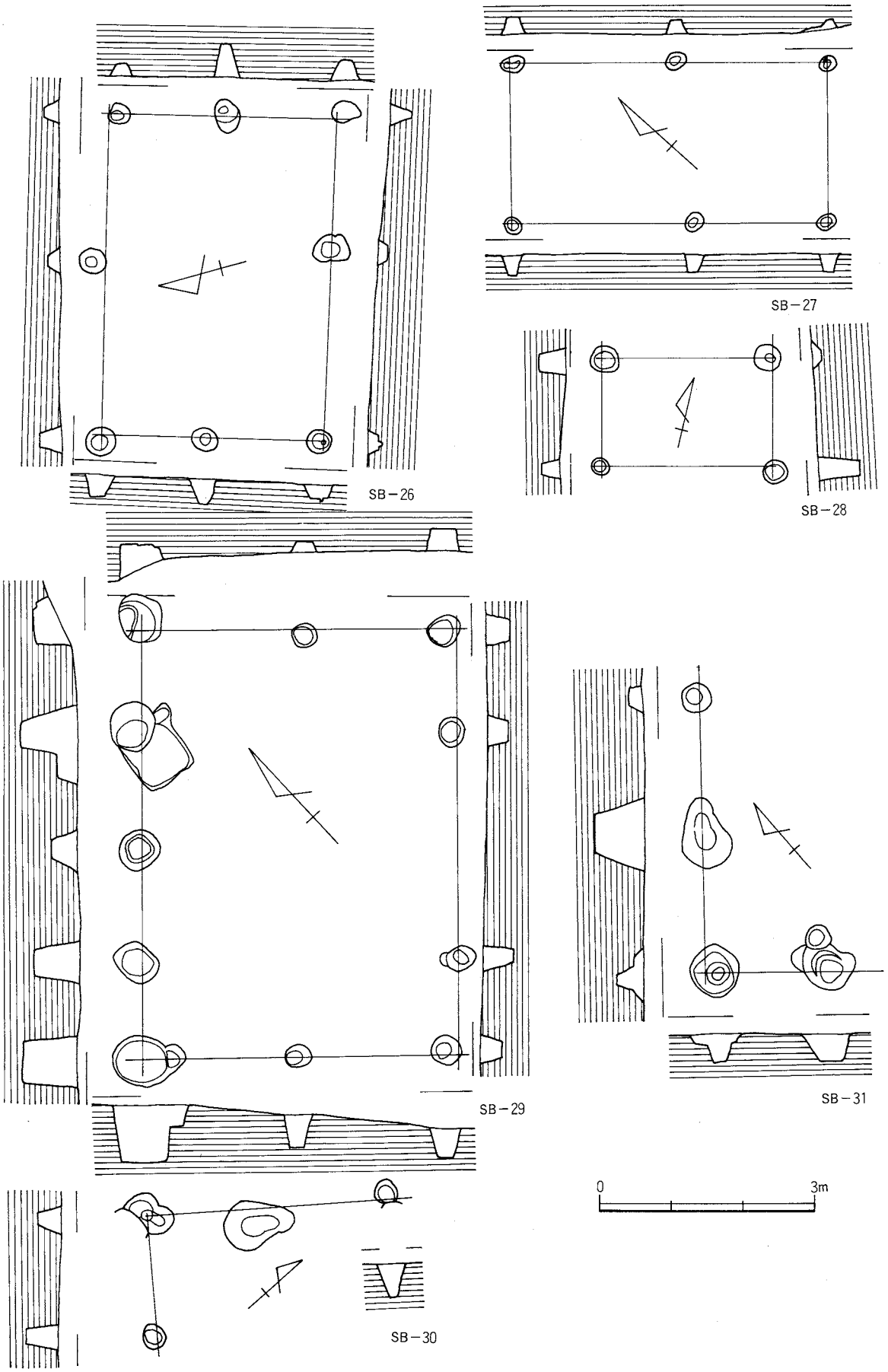


Fig. 11　掘立柱建物実測図Ⅵ（SB－26～31）

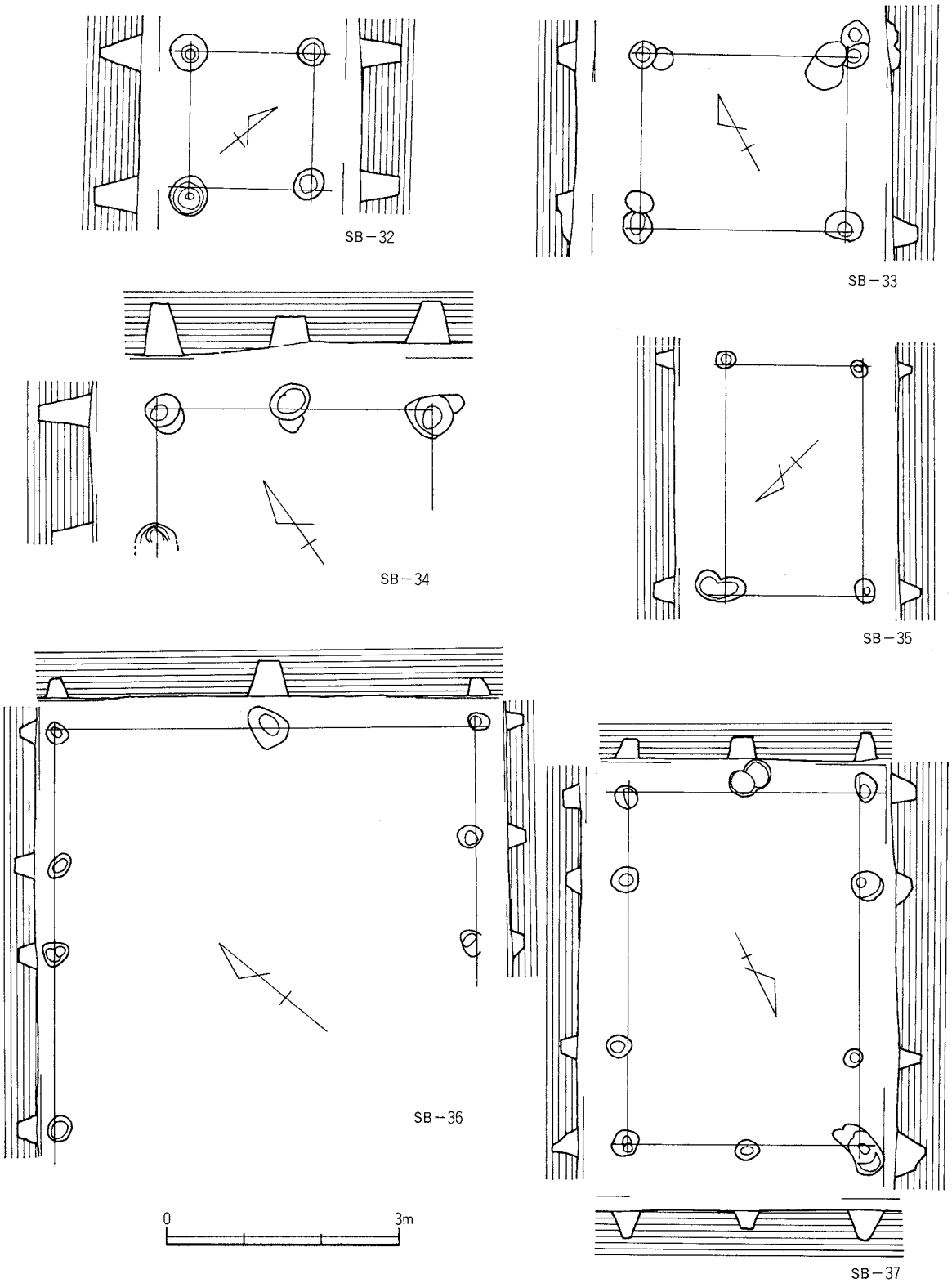


Fig. 12　掘立柱建物実測図Ⅶ（SB－32～37）

SB－17（Fig. 9）

SB－16と一部重複し、さらに南に寄っている。SB－16・40と重複関係にあるが、先後関係は不明。梁、桁共に１間、2.4m、3.2mを測る。主軸方向N－58°－W、柱穴は径40cm前後、深さ30cm。

SB－18（Fig. 9）

SB－16の南側、調査区南端に位置している。SB－19・43と重複関係にあり、SB－19に切られている。他との先後関係は不明。梁、桁共に１間、2.6m、主軸方向N－23°－E、柱穴は径20～40cm、深さ20cm。

SB－19（Fig. 9）

SB－18と一部重複し、やや西に片寄る。建物の一部は南側の調査区外にのびる。SB－18・43と重複し、SB－18を切っている。梁行１間、4.2m、桁行１間以上、２m以上。主軸をN－25°－Eにとる。柱穴は径40cm前後、深さ30cmとほぼ一定である。

SB－20（Fig. 9）

調査区のほぼ中央に位置する。第４号製鉄炉に関連した建物である。SB－09・11と重複関係にあり、SB－09に切られている。SB－11との関係は不明。梁行２間、3.0m、桁行４間、4.4m、南東コーナーの柱穴を欠くが、これは炉との関連性がうかがえる。主軸はN－89.5°－Wにとる。柱穴は径20cm前後、深さ20～50cm。

SB－21（Fig. 9）

SB－20の南に位置する。単独で存在し、他との重複関係はみられない。梁行２間、4.4m、桁行３間、5.6m、主軸をN－17°－Eにとる。柱穴は径40cm前後、深さ20～40cmで、ほぼそろっている。

SB－22（Fig. 10）

SB－08と一部重複し、さらに東側、調査区のほぼ中央に位置する。SB－08・25・26・62と重複関係にあり、SB－26に切られている。他の建物との関係は不明。梁行２間、4.0m、桁行３間、5.2m、主軸方向N－17°－E。柱穴は径30～40cm、深さ10～50cm、径がそろっている割には深さはバラバラである。

SB－23（Fig. 10）

SB－21の南、調査区南端近くに検出した建物である。他遺構との重複関係は認められない。梁、桁行共に２間、2.8m、3.6mを測る。主軸をN－31°－Eにとる。柱穴は径30～40cm、深さ30～50cm。

SB－24（Fig. 10）

SB－01のすぐ南に位置する。SB－08・22・25・26と重複関係にあるが、先後関係については不明。梁行２間、3.8m、桁行３間、6.6m。主軸方向N－７°－E、柱穴配置にやゝ乱れがある。柱穴は径20～40cm、深さ10～30cm。

SB－25（Fig. 10）

SB－24と一部重複し、さらに南に片寄った所に位置する。SB－08・22・24・26と重複関係にあり、SB－08に切られている。他との関係は不明。梁行２間、3.8m、桁行３間、5.2m。主軸をN－77°－Wにとる。柱穴は径30～40cm、深さ20～30cmで、比較的そろっている。

SB－26（Fig. 11）

SB－22と重複して、調査区のほぼ中央に位置している。SB－08・22・24・25と重複し、SB－22を切っているが、他の建物との関係は不明。梁、桁行共に２間、3.2m、4.4mを測る。主軸方向N－76°－W。柱穴は径30～60cm、深さ20～40cm。

SB－27（Fig. 11）

SB－26のすぐ北側に単独で位置し、他の遺構との重複関係は認められない。梁行１間、2.2m、桁行２間、4.4m、主軸をN－43°－Wにとる。柱穴は径20～30cm、深さ20～30cmで、ほぼそろっている。

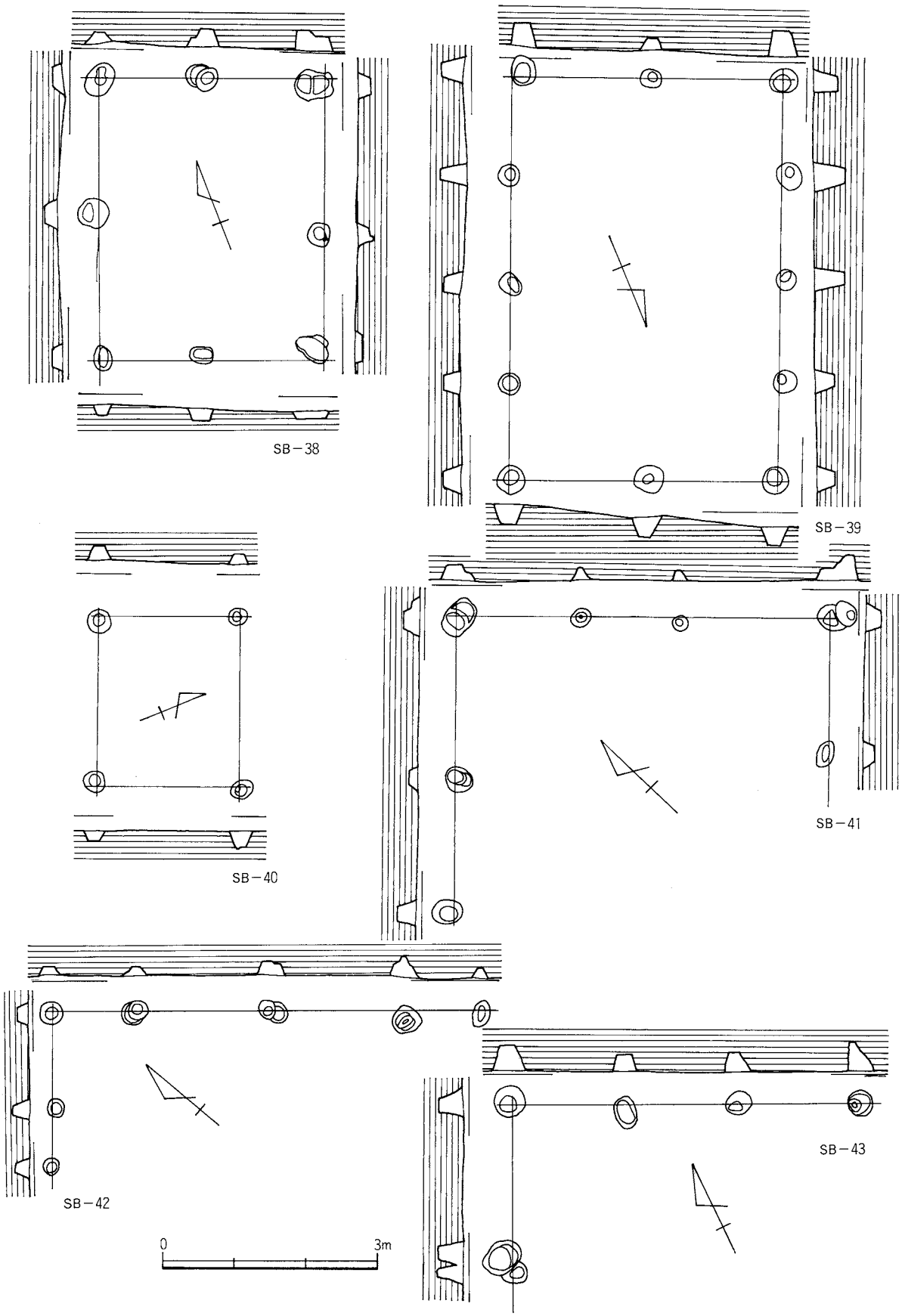


Fig. 13　掘立柱建物実測図Ⅷ（SB－38～43）

SB－28（Fig. 11）

SB－27のすぐ北側に位置する。SB－67と重複関係にあるが、先後関係は不明。梁、桁行共に１間、1.5m、2.4m、主軸方向N－77°－E。柱穴は径30cm、深さ10～50cm。

SB－29（Fig.11）

SB－21の東側、調査区の南東端近くの段落ち部分に単独で位置する。梁行２間、4.4m、桁行４間、６m、主軸をN－42°－Eにとる。柱穴は東側が削平のため小さいが、西側は径60cm、深さ80cmとかなり大きい。

SB－30（Fig. 11）

SB－29の東側に位置し、大部分は調査区外にのびている。SB－31と重複関係にあり、SB－31に切られている。梁行２間、3.4m、桁行１間以上、1.8m以上、主軸方向N－36°－E。柱穴は径60cm前後、深さ40cmで、ほぼそろっている。

SB－31（Fig. 11）

SB－29の東側にあり、SB－30と重複し、SB－30を切っている。建物の大部分は調査区外にのびている。梁行２間、3.8m、桁行１間以上、1.8m以上、柱穴は径40～60cm、深さ20～60cmと比較的大きい。主軸方向N－39°－E。

SB－32（Fig. 12）

SB－23の東側に位置し、SB－46と重複関係にあるが、先後関係については不明。梁、桁行共に１間で、1.6m、18mを測る。主軸方向N－51°－W、柱穴は径30～50cm。深さ50cmで、ほぼそろっている。

SB－33（Fig. 12）

SB－32のすぐ東に位置する。SB－45･47と重複関係にあり、SB－47を切っているが、SB－45との関係は不明。梁、桁行共に１間で、2.3m、2.7mを測る。主軸方向はN－61°－W。柱穴は径40cm前後、深さ30cmで、そろっている。

SB－34（Fig. 12）

調査区南端中央部に位置し、大部分は調査区外にのびる。SB－36・41・42と重複関係にあるが、先後関係は不明。梁行２間、3.6m、桁行１間以上、1.8m以上。主軸方向はN－35°－W、柱穴は径40～50cm、深さ40～60cm。

SB－35（Fig. 12）

SB－34のすぐ北側に位置する。SB－36と重複関係にあるが、先後関係は不明。梁行１間、1.8m、桁行１間、3.0m、主軸方向はN－46°－W、柱穴は径20～30cm、深さ30cm。

SB－36（Fig. 12）

SB－35の西側に位置する。調査区南端で一部は調査区外にのびている。SB－34・35・41・42と重複関係にあるが、先後関係は不明。梁行２間、5.5m、桁行３間以上、5.2m以上、主軸をN－50°－Wにとる。柱穴は径20～50cm、深さ20～40cm。

SB－37（Fig. 12）

SB－09の西側、調査区西端中央部に位置している。SB－50と重複関係にあるが、先後関係は不明。梁行２間、3.0m、桁行３間、4.6m、主軸方向N－25°－E。柱穴は径20～40cm、深さ30cm。

SB－38（Fig. 13）

SB－37の南に位置する。SB－14と完全に重なり合っているが、先後関係については不明。梁行２間、3.2m、桁行２間、4.0m、主軸方向はN－21°－E。柱穴は径30～40cm、深さ10～20cmで、ほぼそろっている。

SB－39 (Fig. 13)

SB－38の東に位置する。SB－10～12と重複関係にあるが、いずれとも先後関係は不明。梁行２間、3.8m、桁行４間、5.7m、主軸方向N－23°－E、柱穴は径30～40cm、深さ20～40cm。

SB－40 (Fig. 13)

SB－39の南側に位置する。SB－16・17と重複関係にあるが先後関係は不明。梁、桁行共に１間で、2.0m、2.4mを測る。主軸方向N－67°－W、柱穴は径20～40cm、深さ10～20cm。

SB－41 (Fig. 13)

調査区南端の中央部に位置する。建物の一部は調査区外に延びている。SB－34・36・42と重複関係にあるが、相互間の先後関係は不明。梁行３間、5.2m、桁行２間以上、4.2m以上、主軸をN－47°－Eにとる。柱穴は径20～40cm、深さ10～30cmとほぼそろっている。

SB－42 (Fig. 13)

SB－41と重複するが、さらに南に片寄って位置する。SB－34・36・41を重複するが、先後関係は不明。梁行１間以上、2.2m以上、桁行４間以上、6.0m以上。主軸方向N－40°－W。柱穴は径20～40cm、深さ10～30cm。

SB－43 (Fig. 13)

SB－42の西側に位置する。建物の一部は調査区外にのびる。SB－19・第１号土壙墓と重複関係があり、SB－19に切られている。土壙墓との先後関係は明らかにできないが、出土遺物から見れば、土壙墓が先行する可能性がある。梁行１間以上、2.0m以上、桁行３間以上、4.8m以上を測る。主軸方向N－65°－W。柱穴は径30～40cm。深さ20～40cmである。

SB－44 (Fig. 14)

調査区の南西隅に位置し、一部は調査区外に延びる。SB－68と重複関係にあるが、先後関係は不明。梁行１間、4.0m、桁行２間、4.8m。柱穴は径40～60cm、深さ20～30cm。主軸をN－60°－Eにとる。

SB－45 (Fig. 14)

SB－29の南西に位置し、SB－33と重複関係にあるが、先後関係は不明。梁、桁行共に１間で、2.3mと2.8mを測る。主軸方向N－38°－E、柱穴は径20～60cm、深さ20～30cm。

SB－46 (Fig. 14)

SB－23の東に位置する。SB－32と重複関係にあるが、その先後関係は不明。梁、桁行共に１間で、1.8m、1.8mを測る。主軸方向N－４°－E。柱穴は径30cm前後、深さ30cmで、ほぼそろっている。

SB－47 (Fig. 14)

SB－46のすぐ北に位置する。SB－33、48と重複関係にあり、SB－33に切られている。他とは先後関係不明。梁、桁行共に１間、2.6m、3.2mを測る。主軸方向N－13°－E。柱穴は径30～50cm、深さ20～30cmである。

SB－48 (Fig. 14)

SB－21の東にあり、SB－47と重複関係にあるが、その先後関係は不明。梁、桁行共に１間で、2.4m、3.8mを測る。主軸方向N－31°－W、柱穴は径20～50cm、深さ20～40cm。

SB－49 (Fig. 14)

調査区の東南隅に位置し、大部分は調査区外に延びる。梁行２間、3.6m、桁行１間以上、1.6m以上、主軸方向N－33°－E。柱穴は径30～50cm、深さ10～40cm。

SB－50 (Fig. 14)

SB－37と重複し、やゝ西に片寄って位置する。SB－37との先後関係は不明。梁行１間、2.8m、桁

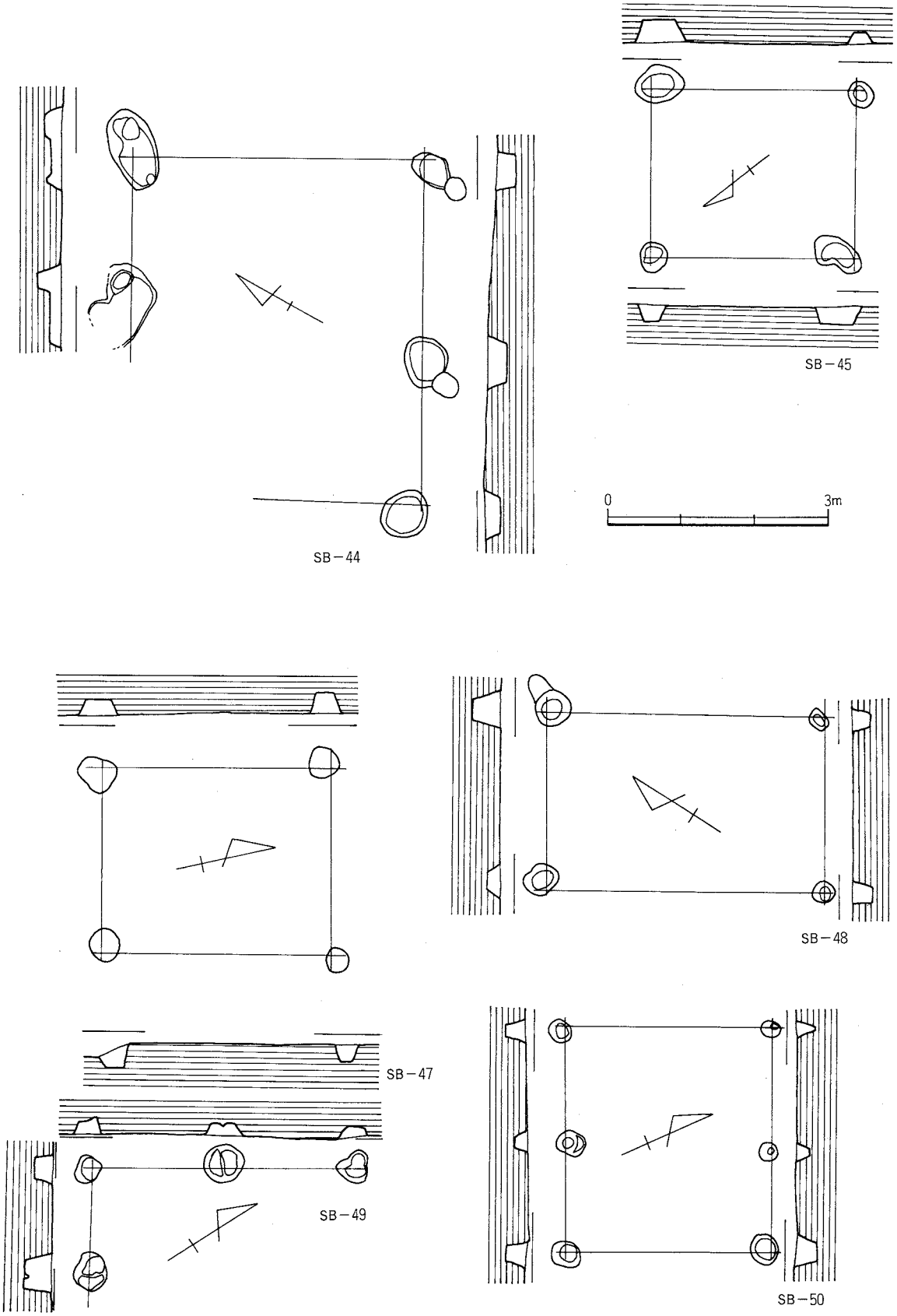


Fig. 14　掘立柱建物実測図Ⅸ（SB－44・45・47～50）

行2間、3.2m、主軸をN－67°－Wにとる。柱穴は径20～40cm、深さ20～30cmとやゝばらつきがある。

SB－51 (Fig. 15)

SB－50のすぐ北側に位置する。SB－06・37・52・53・61と重複関係にあり、SB－37に切られている。他の建物との先後関係は不明。梁行2間、3.4m、桁行3間、5.6m、主軸方向をN－67°－Wにとる。柱穴は径20～40cm、深さ10～30cm。

SB－52 (Fig. 15)

SB－51の西側、調査区西端に位置する。SB－06・51・53・54と重複関係にあり、SB－06を切っているが、他との先後関係は不明。梁行2間、3.1m、桁行3間、4.6m、主軸方向N－23°－E、柱穴は径20～40cm、深さ10～30cm。

SB－53 (Fig. 15)

SB－52と重複するが、やゝ東に片寄った所に位置している。SB－06・51・52と重複関係にあるが、先後関係は明らかでない。梁行1間、1.6m、桁行2間、2.8m、主軸方向N－73°－W。柱穴は径20cm前後、深さ20cmで、ほぼそろっている。

SB－54 (Fig. 15)

SB－53のすぐ北側に位置する。SB－06・52と重複するが、先後関係は不明。梁、桁行共に1間、1.8m、2.2mを測る。主軸方向N－55°－E、柱穴は径30cm前後、深さ20cmで、ほぼそろっている。

SB－55 (Fig. 15)

SB－06のすぐ北側にあり、SB－06と重複するが、先後関係は不明。梁、桁行共に1間で、1.2m、1.6mを測る。柱穴は径20～30cm、深さ10～20cm、やゝ不ぞいである。主軸方向N－38°－W。

SB－56 (Fig. 15)

SB－55の東に位置する。SB－06・57と重複するが、先後関係は不明。梁、桁行共に1間で、1.4m、2.0mを測る。主軸方向N－37°－E、柱穴は径20cm前後、深さ20cmで、そろっている。

SB－57 (Fig. 15)

SB－56のすぐ東にある。SB－56・58と重複し、SB－58を切るが、SB－56との先後関係は不明。梁、桁行共に1間、1.8m、2.2mを測る。主軸方向はN－24°－E、柱穴は径30～40cm、深さ15～20cmで、ややばらつきがある。

SB－58 (Fig. 15)

SB－57のすぐ東に位置する。SB－57・61と重複するが、先後関係は不明。梁、桁行共に1間、1.4m、2.0mを測る。柱穴は径20～30cm、深さ15～30cm、主軸方向N－45°－W。

SB－59 (Fig. 15)

SB－07、09の間、調査区のほぼ中央に位置する。他遺構との重複はない。梁行1間、2.0m、桁行2間、3.0m、主軸をN－72°－Wにとる。柱穴は径15～30cm、深さ10～30cm。比較的小さい。

SB－60 (Fig. 15)

SB－59のすぐ北に位置する。SB－07・61と重複するが、先後関係は不明。梁行2間、2.0m、桁行2間、2.6m、主軸方向N－18°－E。柱穴は径20～30cm、深さ15～30cm。

SB－61 (Fig. 15)

SB－59の北側に位置する。SB－07・51・60と重複するが、先後関係は不明。梁行2間、3.2m、桁行3間、5.0m、主軸方向はN－77°－W、柱穴は径20～30cm、深さ20～35cmで、大きさはばらばらである。

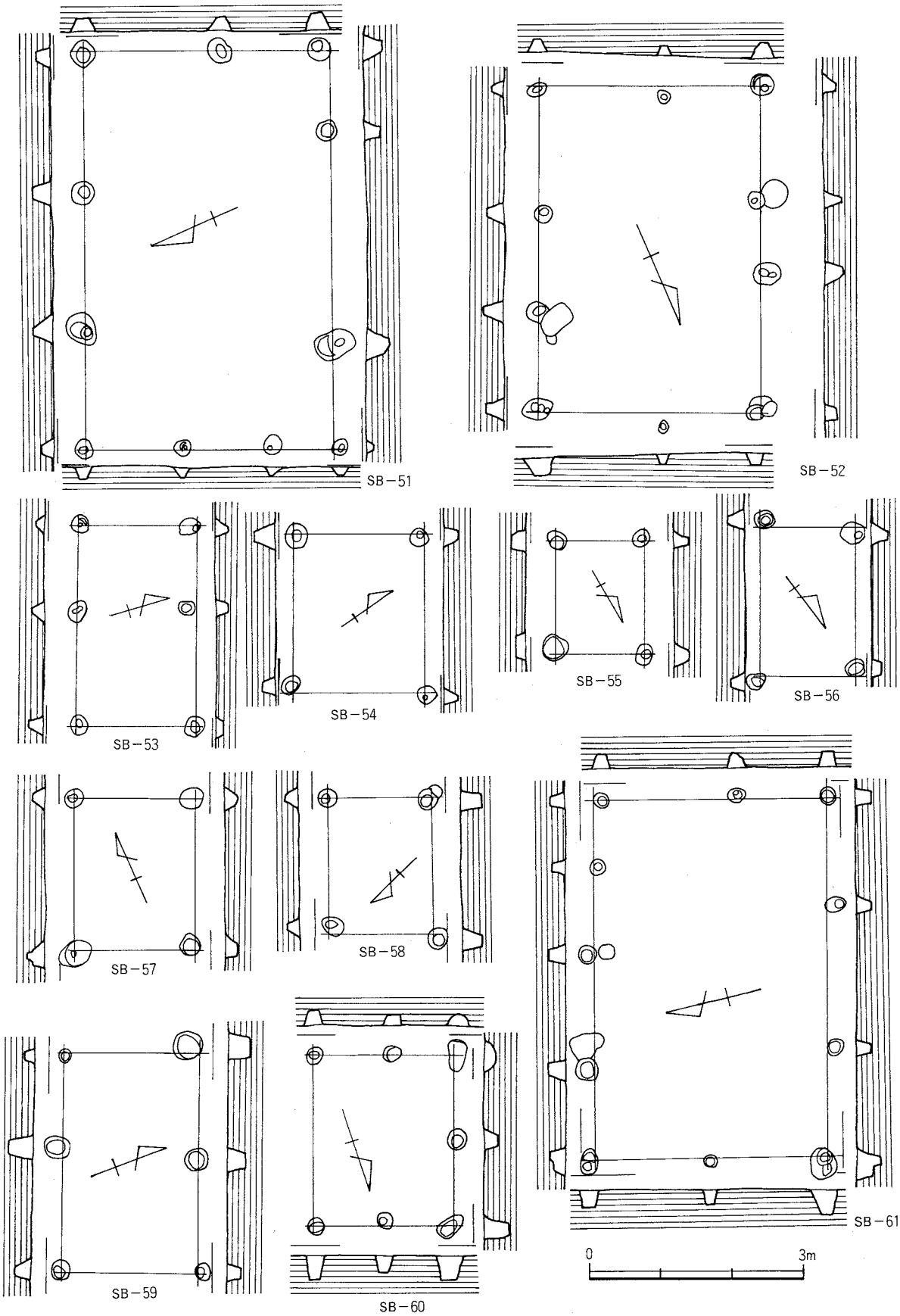


Fig. 15　掘立柱建物実測図X（SB－51～61）

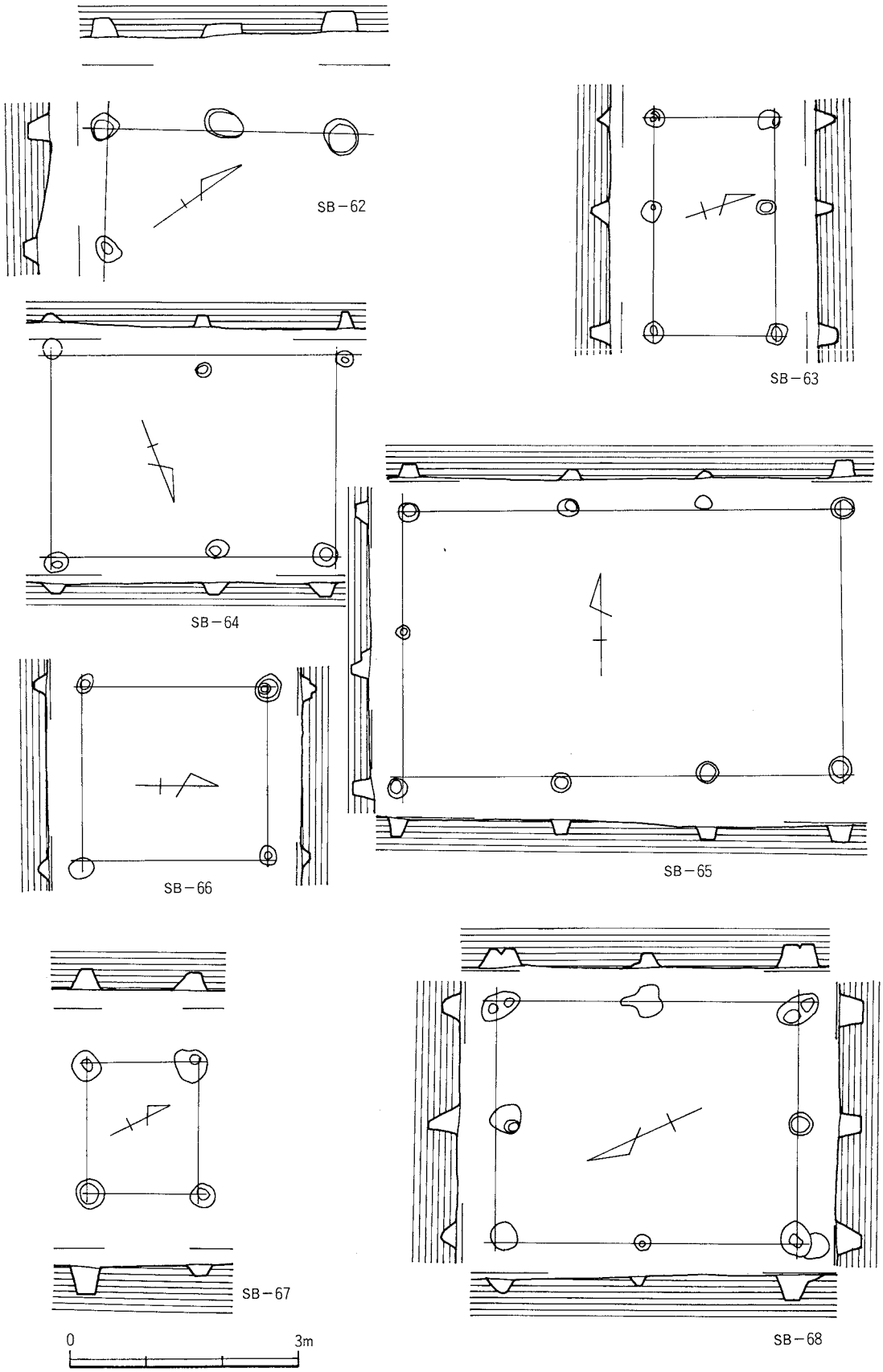


Fig. 16　掘立柱建物実測図XI（SB－62～68）

SB－62（Fig. 16）

調査区の東北隅に位置する。大部分は調査区外にのびている。SD－02と重複し、SD－02に切られている。梁行２間、3.0m、桁行１間以上、1.6m以上、主軸方向N－54°－W。柱穴は径30～40cm、深さ15～25cm。

SB－63（Fig. 16）

調査区北西端に位置している。SB－05と重複するが、先後関係は不明。梁行１間、1.6m、桁行２間、3.0m、主軸方向N－71°－W。柱穴は径20～30cm、深さ15～30cm。

SB－64（Fig. 16）

SB－61の北側に位置する。SB－04と重複するが、先後関係は不明。梁、行１間、2.6m、桁２間、3.8mを測る。柱穴は径30cm前後、深さ15cm。

SB－65（Fig. 16）

SB－64の北側に位置する。SB－03・04と重複するが、先後関係は不明。梁行２間、3.6m、桁行３間、5.8m、主軸をN－90°－Eにとる。柱穴は径20cm前後、深さ20cmで比較的そろっている。

SB－66（Fig. 16）

SB－65のすぐ東に位置する。SB－03と重複するが、先後関係は不明。梁、桁行共に１間、2.2m、2.4m、主軸方向N－0°－E、柱穴は径20～30cm、深さ10～20cm。

SB－67（Fig. 16）

SB－02のすぐ東に位置する。SB－01・28と重複するが、先後関係は不明。梁、桁行共に１間、1.5m、1.8mを測る。主軸方向N－64°－W、柱穴は径30cm前後、深さ30cmで、そろっている。

SB－68（Fig. 16）

調査区南西隅に位置し、SB－15・44と重複するが、先後関係は不明。梁、桁行共に２間、3.2m、4.0mを測る。主軸方向はN－25°－W、柱穴は径20～40cm、深さ10～40cm。

② 出土遺物（Fig. 17）

柱穴から出土した遺物は、いずれも小破片で、時期が判別できるものや図化できるものは極めて少ない。以下、図示した３点について説明する。

１はSB－59内にあるピットから出土した瓦質土器。口縁直下に低い鍔がつく。全体に黒色で、口縁部は暗灰色をなす。器形は鉢形。口径20.6cm、器高11.0cm、外面は指調整で凹凸があり、内面は横方向の細い刷毛目調整。２はSB－16を構成する柱穴より出土した須恵器坏。高台は低いが外に張る。体部は外反気味にたちあがる。口径10.3cm、器高3.9cm、全体に黒灰色をなす。３はSB－50内にある柱穴

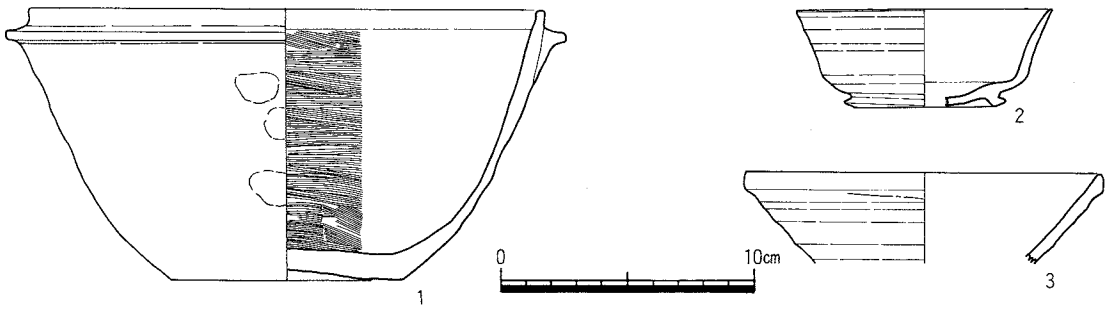


Fig. 17　掘立柱建物柱穴出土遺物実測図

より出土した白磁椀。口縁が肥厚する。外面下半は無釉で露胎のままである。釉色は縁灰色。口径は14cmを測る。これらは、柱穴出土土器とはいえ、直接、掘立柱建物の年代を示すものでないが、遺物は古代～中世の時間幅を示し、後述する溝の遺物として付号する。

(3) SD－01と出土遺物

① SD－01 (Fig. 18)

調査区北端、東より10mの所から南東方向（N－24°－W）に延びる溝状の遺構である。溝は先端部に近いところが、攪乱によって破壊されているがつながりは復元できる。また、調査区外の北側も道路建設の掘削よって消失している。溝幅は南東の先端部にむかってせまくなっている。溝幅0.7～1.5m。深さは北半部は0.5mと浅く、断面は皿形をなすが、先端部（南半部）は階段状に掘りくぼめられ、深くなり、最深部は1.0mを測る。この部分には、床面よりやゝ浮いた状態で拳大～人頭大の礫が敷きつめられたように投棄されている。礫に混じり、布目瓦・青磁器・白磁器・陶器・高麗青磁・スラッグ等が存在する。単に棄てられたものとは考えがたく、意味する目的があったものと考えられる。SD－01の延長部分には約6m離れてSD－02が存在し、SD－01・02が一連の溝として機能していたことがうかがえ、SD－01と02の間の空間は出入口として利用されていたものであろう。溝の西側に建物が集中し、溝の東に建物が極端に少ないことからも出入口として肯首できる。

② 出土遺物

出土遺物は、いずれも礫と混在した状態で出した。高麗青磁、中国産の青磁・白磁・無釉陶器・須恵器・土師器・滑石製石鍋・布目瓦・鉄滓・鉄器片がある。遺物にはかなりの時間幅が存在し、すべ

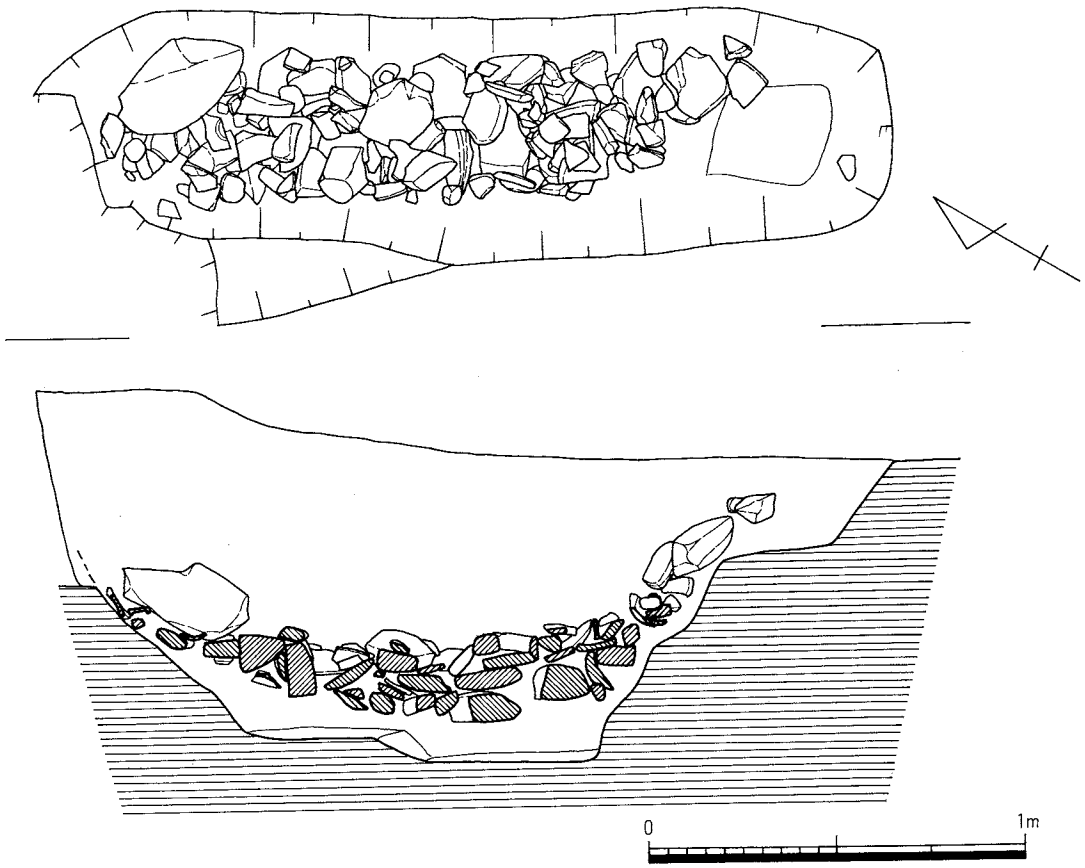


Fig. 18 SD－01 先端部実測図

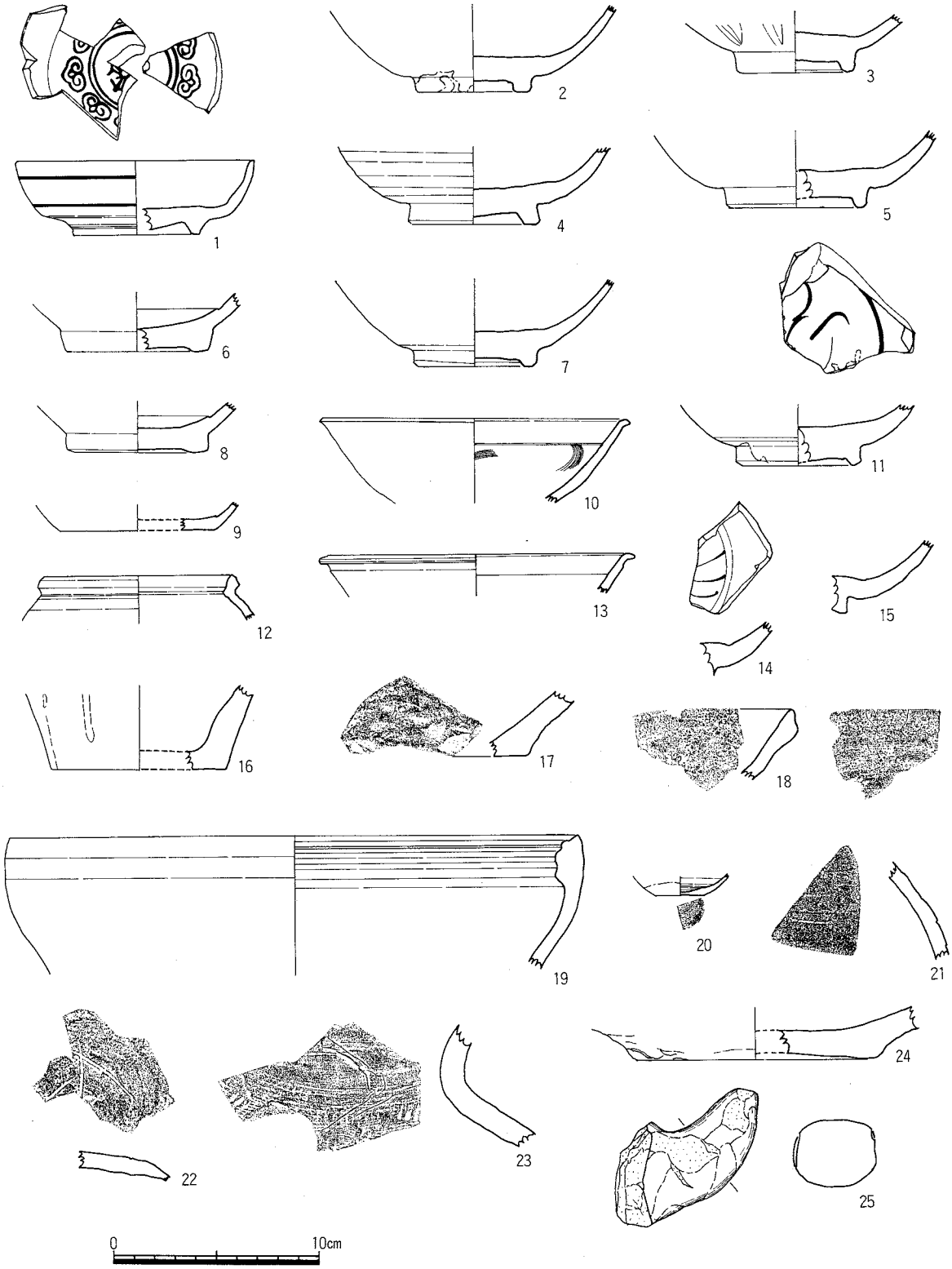


Fig. 19　SD－01 出土遺物実測図 I

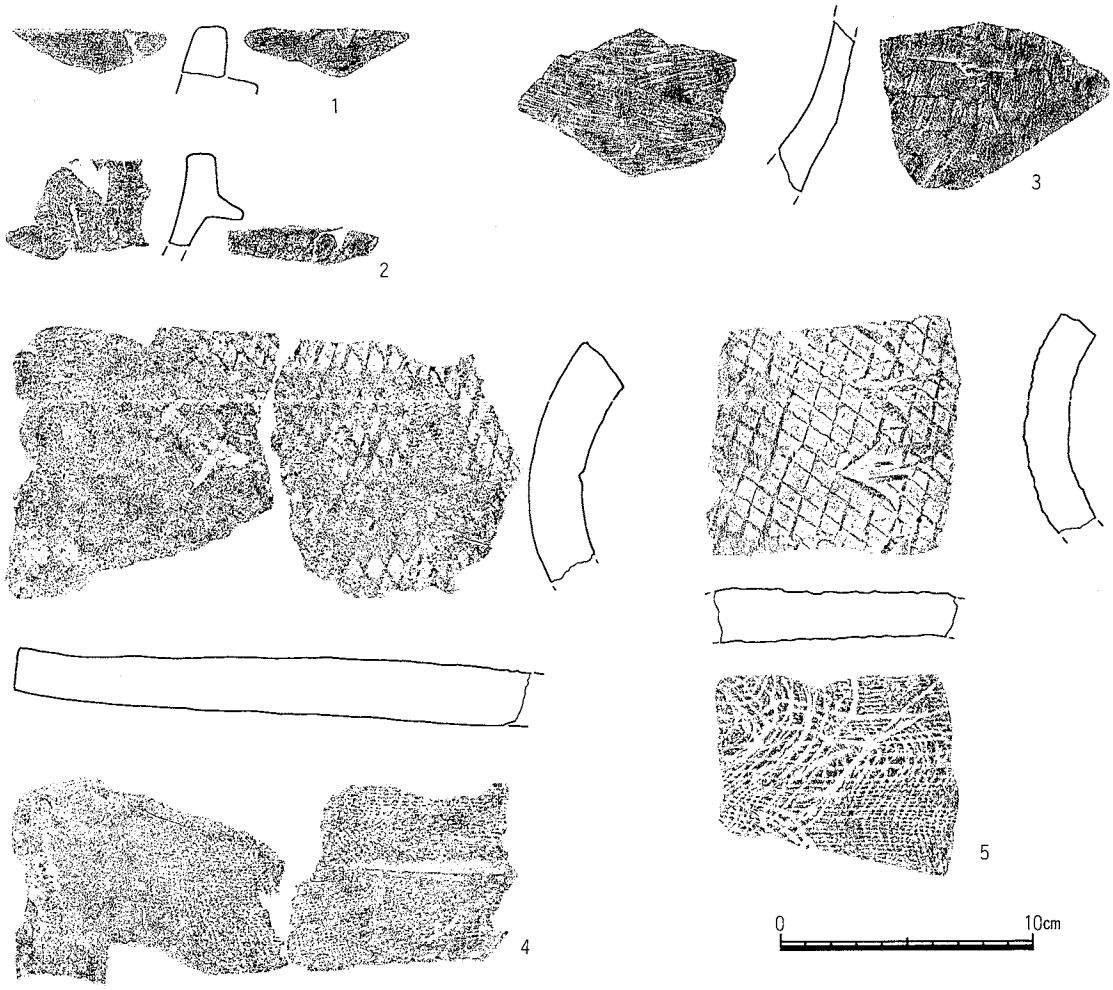


Fig. 20　SD－01 出土遺物実測図II

てを共伴とすることはできないが、遺跡の存続期間とすることはできよう。

Fig. 19－1は高麗青磁。低い直立した高台がつく皿形の器形をなす。口径11.6cm、高台径6.1cm、器高3.6cm、外面に二条、見込みに白色の象眼文様が入れられている。全体に灰色がかった青色釉がかけられる。2～5、7、11、14、15は中国産の青磁器である。いずれも椀形品。2は高台径5.4cm、褐緑釉をかける。3は高台径5.8cm。外面に鎬葉蓮弁の文様がある。全体に褐色をおびた青釉がかけられる。4は高台径6.4cm、見込みに箆描き花文文様を入れる。釉は3と同様である。5は高台径6.8cm、見込みに釉だまりがみられる。青緑色釉をかける。7は高台径5.8cm。全体に青釉をかける。11は高台径5.0cm、見込みに箆描きの草花文を施す。釉は淡緑色。14は見込みに花輪文を施し、釉は黄褐色。15の釉は淡緑色。6、8～10、13は白磁器。6、8は同一個体の可能性がつよい。玉緑の白磁の高台と考えられる。高台径は共に6.9cmを測る。10、13は口縁部で共に口縁部が外反し、内側の口縁直下に一条の細い沈線をめぐらす。10は沈線下に櫛描文を施す。口径は10が15.2cm、13が15.4cm。釉は共に灰色がかった白色釉である。9は青白磁の皿である。平底で底径7.4cm。12、16、21は褐釉陶器、釉は全体にうすくかけられる。17、18は瓦質土器。19、24は中国産の無釉陶器、19は口縁部、24は底部破片である。19は口縁内側が肥厚し、凹線3条がはいる。胎土は共に粗雑で、多量の砂粒を含む。20は合

子の身か。22、23は須恵器、22は坏蓋、23は甕の頸部破片。25は土師器の把手である。Fig. 20－1～3は滑石製石鍋の破片。1、2は口縁部。2は外面の口縁直下に低い鍔をめぐらす。3は体部破片。内外面共にノミの製作痕が顕著である。4、5は布目瓦。共に丸瓦の破片。側面の切り離し痕は荒い。外面は斜格子目文のタタキ、内面には粗い布痕がみられる。5のタタキには「介」の文字がみられる。

(4) SD－02と出土遺物

① SD－02 (Fig. 21)

SD－01の先端から約6m離れて、SD－02の先端が始まる。溝は主軸をN－89°－Wにとりほぼ直線に10mのび、調査区東壁の中央部で調査区外にでる。溝は先端を丸くおさめ、南に順次幅をひろげる。溝幅1.0～1.4m、深さは0.9mで、断面形は逆台形状をなす。溝の埋土は3層に分離できる。第1層は暗茶褐色粘質土層、厚さ40cm前後。第2層　赤褐色土層、厚さ20cm前後。第3層　黒褐色粘質土層、厚さ30cm。いずれの層も流れ込みによるレンズ状堆積でなく水平層をなしている。第3層中にはSD－01の先端部同様に多量の礫が敷きつめられたように存在し、多量の遺物が伴出している。

② 出土遺物 (Fig. 22、23)

SD－01同様に礫に混在して多量の遺物が出土している。遺物の内容もSD－01と大差ない。以下、主要な遺物の説明をする。

Fig. 22－1～4は青磁器、1は口

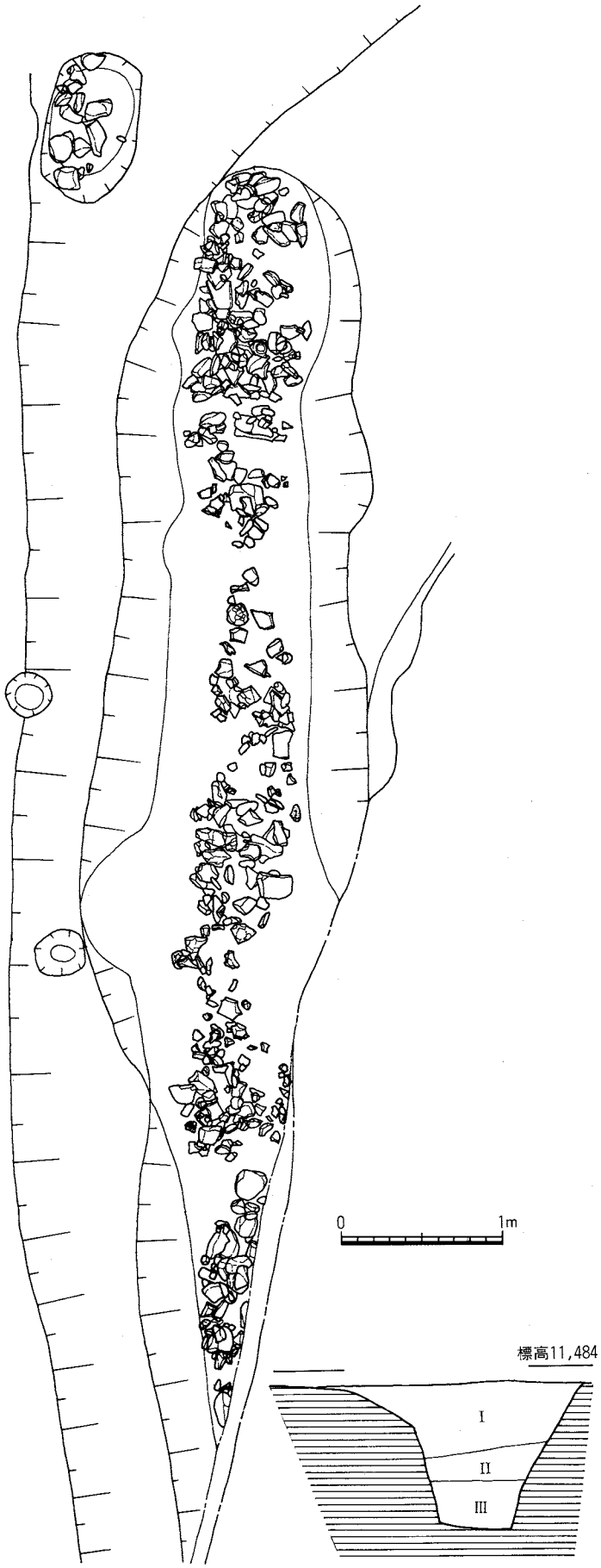


Fig. 21　SD－02実測図

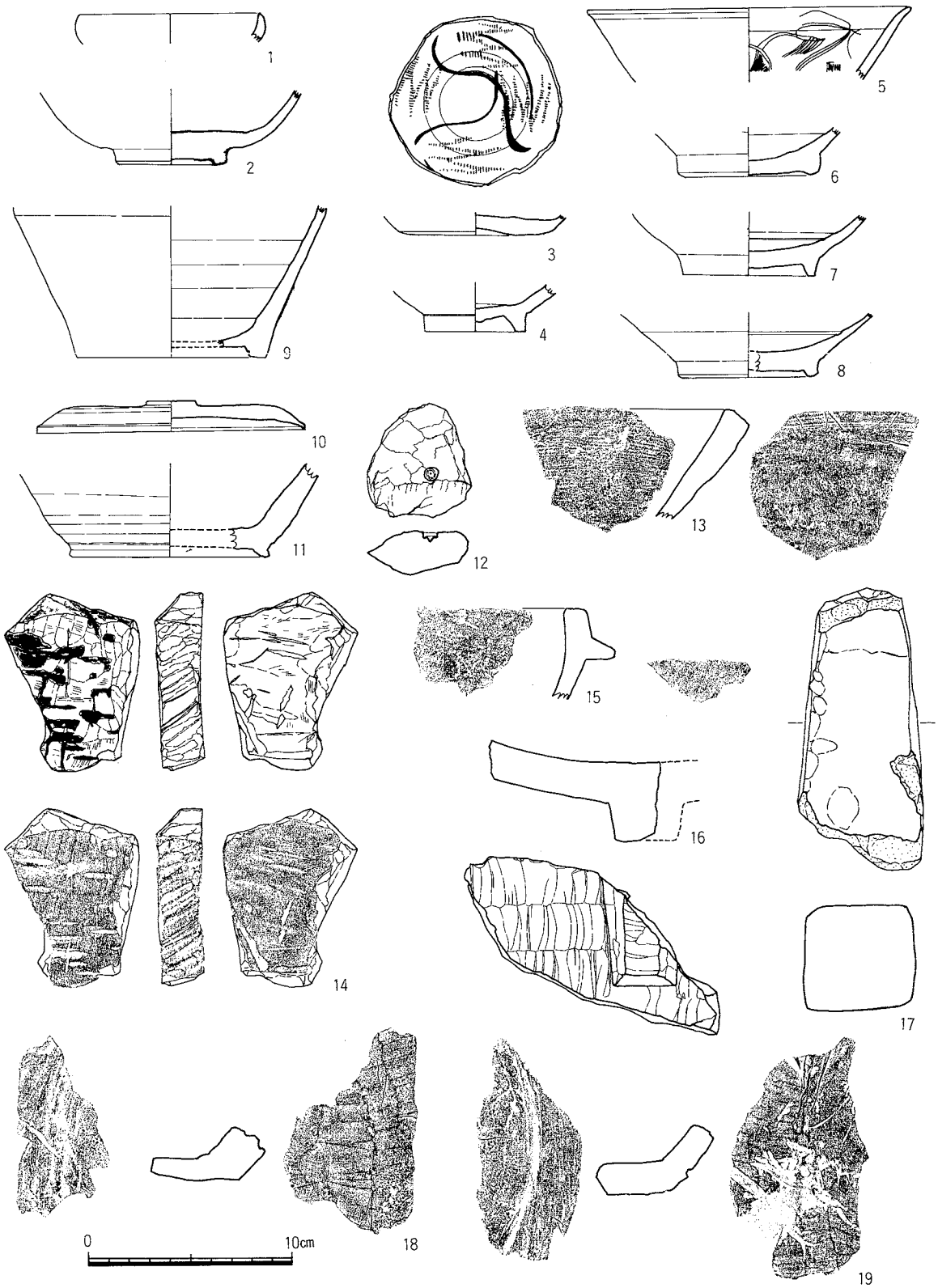


Fig. 22　SD－02 出土遺物実測図 I

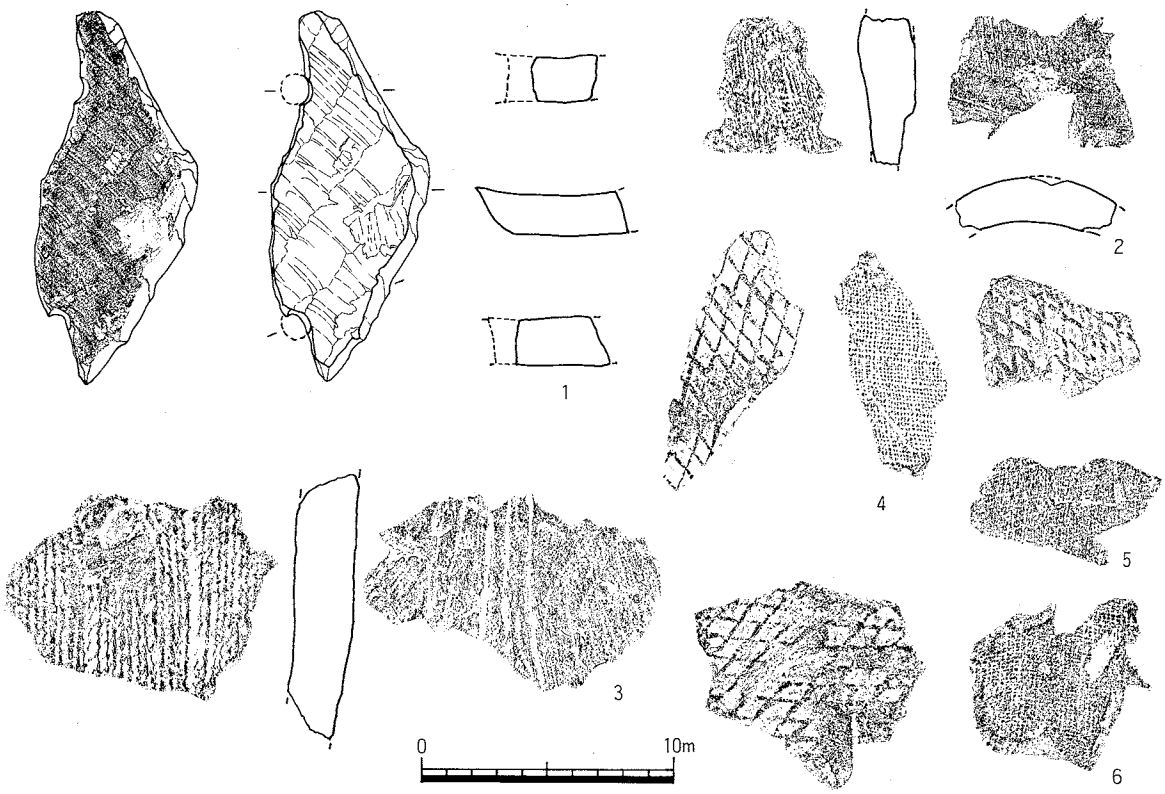


Fig. 23 SD－02 出土遺物実測図 II

縁部で、わずかに内傾する。口径9.2cm。釉は淡青色。2は椀。高台径5.4cm。体部は丸味をもってたちあがる。釉は淡緑色で全面に丁寧にかけられる。3は皿。見込みに箆描きと櫛歯による草花文が施される。釉は淡緑色。4は高台径5.0cm、釉は褐色～淡緑色。5～6は白磁器、5は口縁部破片、口端部は外反する。内面の口縁直下に一条の沈線をめぐらす。また、内面にはヘラ描きと櫛歯による草花文が描かれる。口径16.0cm。釉は淡灰色、6は低い高台、高台径7.0cm、釉は灰白色釉である。7は高台径6.4cm。見込みには輪状に釉がけがない。釉色は灰白色。8は高台径7.0cm。見込みに沈線1条をめぐらす。外面は下半はヘラ削り痕が顕著である。釉は灰白色。9は褐釉の壺、底部はあげ底で、底部径9.3cm。10、11は須恵器。10は蓋、低いつまみがつく。口径13.2cm、器高1.6cm、11は壺の底部、低い高台がつき、高台径9.8cm。13は瓦質土器、鉢形をなし、内外面は刷毛目調整。17は土製支脚。断面形は方形。稜線は鈍い。頭部幅は4.2cm、下端幅6.2cmで頭部がほそくなる。外面には指による調整痕が凹凸で残る。現存長13.8cm。12、14～19、Fig. 23－1は滑石製石鍋あるいは、その再利用品である。12は石鍋に利用されたかは明らかでない。むしろ、滑石原石を利用した可能性が強い。石材中央部に穿孔途中の孔がある。孔は径0.7cm、深0.4cm。断面形は特異で管状の錐を使用したのが明瞭である。15、16は石鍋の口縁付近の破片。15は外面の口縁下に鍔をめぐらす。16は大型の石鍋。口縁は残っていないが、長方形の把手がつく。15は丁寧なつくりであるが、16は製作痕が顕著に残る。14は再利用するために、加工が加えられている。加工は割れた側面の1ケ所と内外面に加えられている。ススの付着の有無で、加工痕は明瞭に判別できる。途中で加工がやめられているので、何に利用するつもりであったかは不明。18、19は底部破片。いずれも平底である。18は内底部と外面にススの付着が顕著である。内面には横方向の条線が数多くみられ、平滑にしようとした調整痕とみられ、外面、製

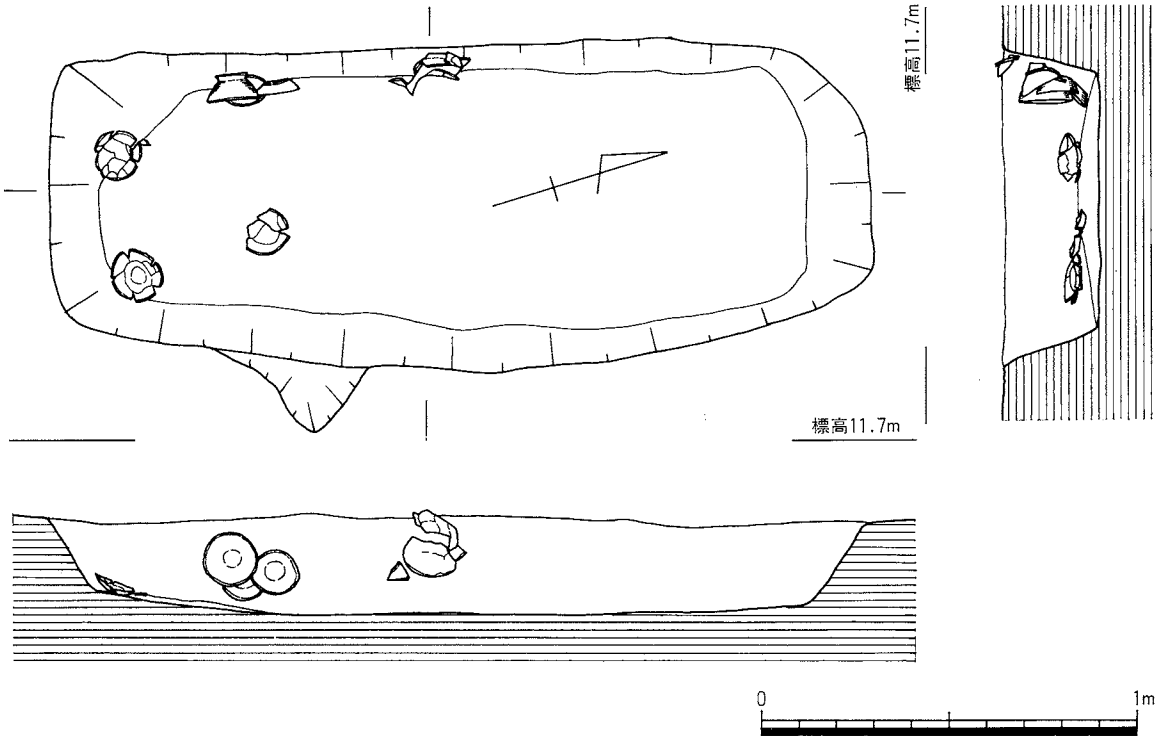


Fig. 24　土壙墓実測図

作時のノミ痕が顕著に残っている。19は、外面に再利用の加工痕があるが、非常に部分的である。Fig. 23－1は、2ケ所に穿孔の痕跡がある。孔径は共に1.2cm前後。孔は使用時にすでに穿れていた可能性もある。3～6は布目瓦。3、4～6は平瓦、2は丸瓦である。タタキ痕はそれぞれ異なる。2は荒い条痕状をなし、3は縄目タタキ。4～6は斜格子のタタキ目文であるが、それぞれ若干の差がある。

(5)　土壙墓と出土遺物

①　土壙墓（Fig. 24）

調査区の南端、中央より、やゝ西に片寄った位置で確認した。SB－43と重複するが、その先後関係は不明。ただし、副葬品の時期からみて、掘立柱建物に先行すると見られる。

土壙墓は、確認面で長軸218cm、短軸88cm、床面で長軸187cm、短軸68cmの隅丸長方形をなす。主軸方向はN－18°－E。深さは25cmと浅く、断面形は逆台形をなす。本例や柱穴の深さからみて、調査区内は、かなりの削平があったことがうかがえる。土壙墓の埋土中からは釘の発見はなく、プランの状況

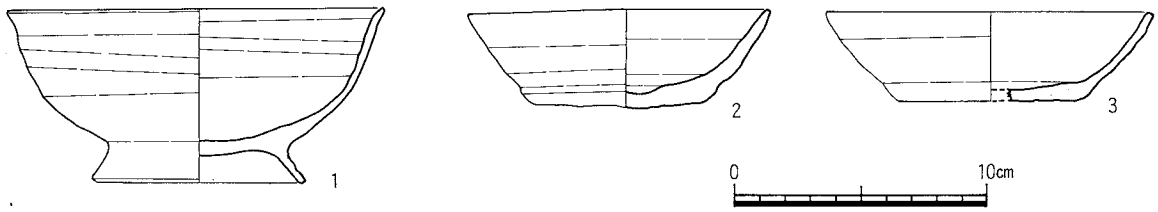


Fig. 25　土壙墓出土遺物実測図

も含めて考えると、木棺の可能性は低い。土壙墓の南半部には土器が副葬されている。その配置は、木口の両端床面に各1個、木口よりやゝ離れた床面に1個、それに対応する両側面にたてかけるように3個、さらに北に離れて1個、計7個の土器が配されている。頭位は副葬品のある南にとった可能性が強いと考えるが、その逆の北をとる可能性も否定できない。

② 出土遺物 (Fig. 25)

黒色土器1個、土師器6個があるが、西側壁にたてかけられた3個体を除いて、保存状態が極めて不良で、細片化し、復原が不可能であった。復原した3個体について説明を加える。

1は黒色土器。高台は高く外に張り出す。体部は丸味をもってたちあがり、口縁端部はわずかに外反し、端部を丸くおさめる。全体に薄手のつくりである。内面は黒色、外面は黄褐色をなす。口径14.9cm、器高6.9cm、高台径8.5cmである。2、3は土師器。底部は平底であるが、ヘラ切りのため、わずかに丸味をもつ。底部から体部に移行する部分に段ないしは凹みをもち、体部は外傾しながらたちあがる。内外面共に横ナデ調整。2は口径12.0cm、器高3.9cm、3は口径13.0cm、器高3.6cmを測る。

(6) 製鉄遺構 (Fig. 26、27)

① 第1号製鉄址 (Fig. 26)

調査区のほぼ中央、第4号製鉄址およびその覆屋であるSB－20のすぐ東に位置する。他の遺構との切り合い関係はなく、単独で存在する。長軸258cm、短軸134cmのやゝ中央部がふくらんだ不整楕円形の土坑である。土坑は主軸をN－24°－Eにとっている。最大の深さは38cm、断面形は皿形をなしている。土坑の中央部の最も深い部分の82×50cmの範囲が加熱のため焼土化し、さらに、西側壁面も中央部程ではないが焼土化している。また、南側に続く土壙(75×100cm)も、中央部ほどではないが、加熱のため焼土化している。中央部の焼け方や周辺の状況から、製鉄関連の遺構と考えた。

② 第2号製鉄址 (Fig. 26)

第1号製鉄址の南東、SB－48と重複する位置関係にある。SB－48との先後関係は直接の切り合い関係がないので不明。遺構は長軸106cm、短軸90cmの隅丸長方形プランの土坑である。主軸をN－63°－Wにとる。深さ42cm、床面は平らで、壁も垂直に近く、断面は箱形をなす。埋土は自然の流れ込みの状態を示している。第1層、暗褐色土層、厚さ5～15cm。第2層、ローム土を多く含んだ暗褐色土層、厚さ20～25cm。第3層、床面直上の土層、ローム土をわずかに含んだ粘質の暗褐色土層、厚さ5～20cm。第2層中に土師器甕の胴部破片出土。遺構の南隅に円礫2個、スラッグ1個、鉄片1個が出土。壁面等は焼けていない。積極的に製鉄関連遺構とはみられないが、スラッグ等の出土から、製鉄址とした。

③ 第3号製鉄址 (Fig. 26)

調査区西端中央部、西壁のすぐ東に検出した炉址である。炉の周囲には掘立柱建物はなく一定の広さの空間があるので、元来は覆屋的な掘立柱建物があった可能性が強い。

炉址は長軸110cm、短軸60cm、隅丸長方形プランをなす。北東コーナー部分には径25×20cmの張り出しの掘り込みがある。この張り出し部と炉の床面は同じであり、炉に関連した遺構とみられる。深さは13cmと浅いが、これは他の遺構同様、削平のためと考えられる。断面は浅い箱形をなす。炉址の北

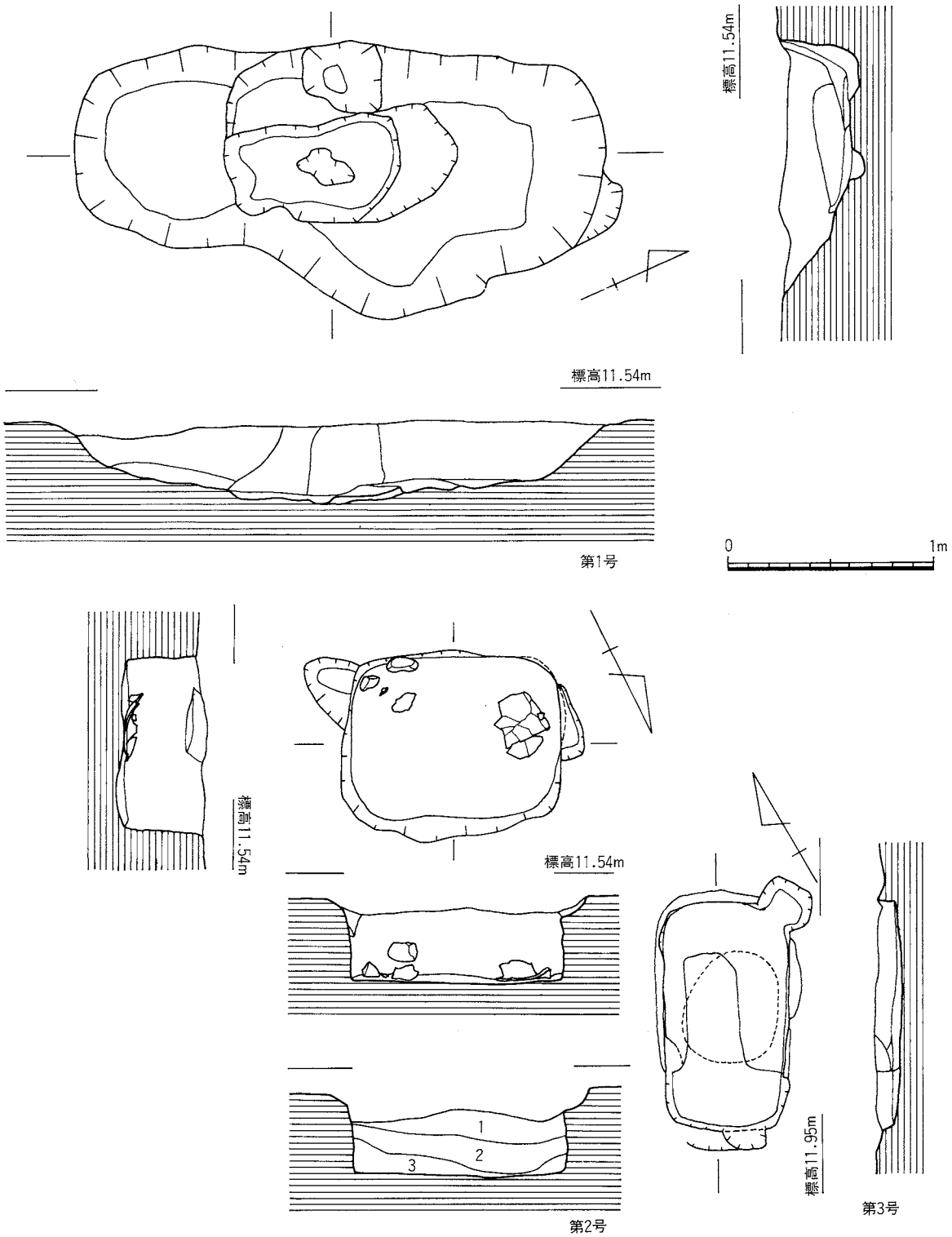


Fig. 26　第１～３号製鉄炉址実測図

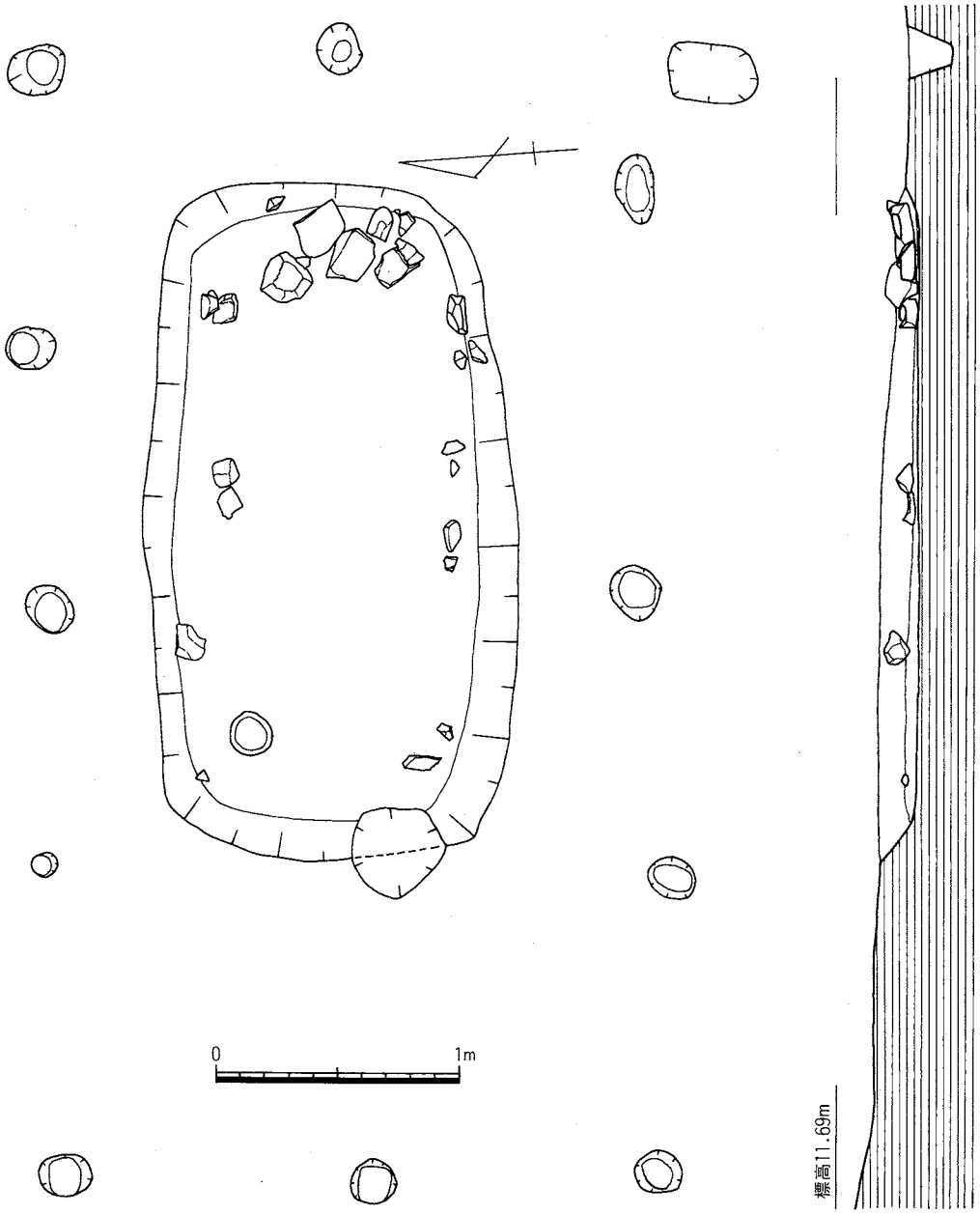


Fig. 27　第4号製鉄炉址実測図

側は強い加熱のため焼土化し、焼土は約4cmの厚さで変色している。床面も大部分が赤く変色し、炉の中央部分には灰が集中していた。炉址は主軸をN－30°－Eにとっている。

④　第4号製鉄址（Fig. 27）

調査区のほぼ中央、第1製鉄址のすぐ西側に位置する。製鉄関連遺構に覆屋（SB－20）をもつ唯一の例である。SB－09、11と重複しSB－09に切られるが、SB－11とは直接の切り合い関係がないため、先後関係は明らかでない。遺構は長軸277cm、短軸154cm、の隅丸長方形プランで、主軸をN－87°－Eにとる。深さ16cmと比較的浅いが、これは他の遺構同様に削平による結果とみられる。床面は平坦である。断面形は皿状をなす。土坑の壁に沿って石材が分布している。これらの石材は単に投棄された

ものとは考え難く、この遺構上部構造と関係あるものと考えられる。石材に混じって、スラッグ6点がある。1ケ所にまとまることなく散在している。石材は特に東壁部に集中するが、後述する覆屋の西側空間との関係を考慮する必要があろう。覆屋は掘立柱建物で。梁行2間、桁行4間で、主軸方向は土坑と一致している。土坑と柱筋は、北、東、南側で間隔は40～50cm、西側が広く、120cmを測る。なお、掘立柱建物の南東隅の柱穴は確認できなかったが、ここに煙出し等の施設があった可能性がある。そうすれば、西側の空間は、焚口であった可能性が強い。スラッグ以外、製鉄関連の遺物はなく、積極的に製鉄関連遺構とする根拠はないが、遺跡全体の状況から、製鉄関連遺構とした。

(7) 竪穴遺構

① 第1号竪穴 (Fig. 28)

調査区南端部近く、土壙墓のすぐ北側に位置する。他の遺構との重複はみられず、単独で存在する。竪穴は長軸250cm、短軸80～116cmの不整楕円形プランで、主軸をN－30°－Eにとる。深さは各部で異なり、最も深いところで36cmを測る。断面形は全体的に皿状をなす。土坑は大きく、南半と北半部に分かれ、南半部は、65cm×50cmの不整長方形プランで一段（深さ12cm）深くなる。北半部は階段状の遺構で2ケ所にピットが掘り込まれている。全体としての土坑の形状は、第1号製鉄址とした遺構に類似しているが、加熱によって変色したような部分はない。埋土中からは、微細な土器片が出土している。時期的には古代～中世の範囲におさまるものと考えられる。

② 第2号竪穴 (Fig. 29)

調査区南端中央部、第1号竪穴の東側に位置する。他の遺構との重複関係はみられず単独で存在する。竪穴は長軸260cm、短軸213cmの楕円形プランをなす。主軸方向をN－16°－Wにとる。深さ10～20

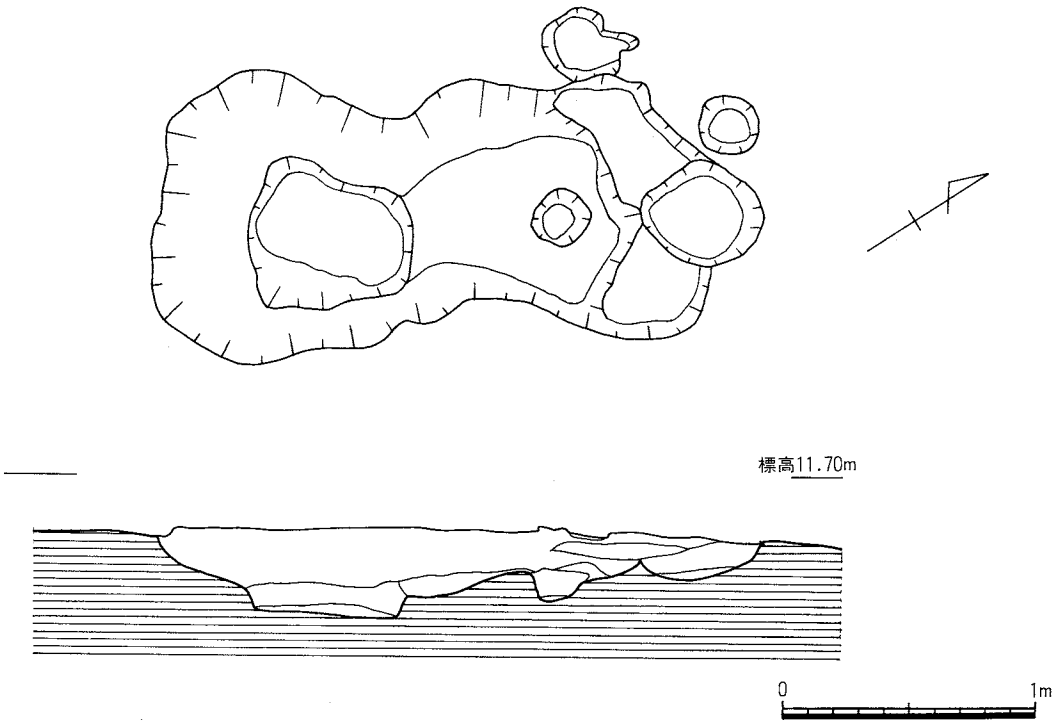


Fig. 28 第1号竪穴実測図

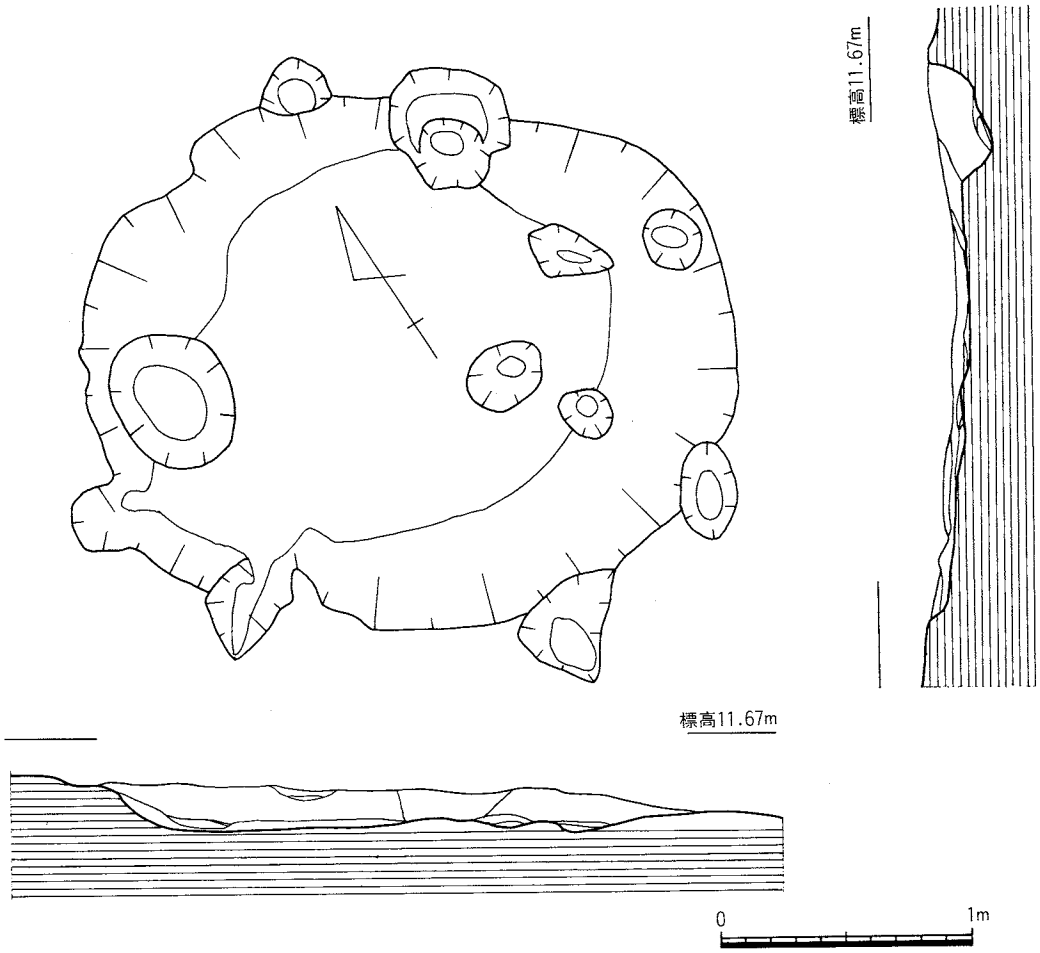


Fig. 29　第２号竪穴実測図

cmと比較的浅く、断面形は皿状をしている。元来は、さらに深かったものであろう。竪穴遺構の周囲および内側には10個のピットが掘り込まれている。ピットは径20～55cm、深さはいずれも浅く８～15cmで、柱穴とは考えがたい。埋土中らかは微細な土器片が出土しているが、いずれも図化できない。遺構の性格は不明。

③　第３号竪穴（Fig. 30）

調査区の南西部、第１号竪穴の北西の所に位置する。SB－13・16と重複し、SB－13に切られるが、SB－16とは直接の切り合い関係がないので先後関係は不明。竪穴は長軸335cm、短軸175～272cmの不整楕円形プランをなす。主軸方向はN－16°－Wにとる。壁は傾斜もち、床面はほぼ平坦に近い。床面には11ケ所にピットが掘り込まれる。ピットは径15～30cm、深さ10cm前後で、柱穴とは考え難い。竪穴の深さは30～40cm、断面形は皿状をなす。他の竪穴遺構より深いが、他の遺構同様に削平を考える必要がある。埋土は上下２層がある。第１層はやゝ黒味をおびた暗褐色土層、厚さ20～30cm。第２層、ローム土を含んだ暗褐色土層、厚さ７～20cm。埋土中には細い土器片を含んでいるが、いずれも器形のわかるものや、図化できるものはない。

竪穴遺構はいずれも調査区南西部にあり、相互間の距離は1.5m、３m離れた状態で極めて近い所に集中している。また、第１、２号竪穴は、掘立柱建物と重複することなく、むしろ、掘立柱建物間の

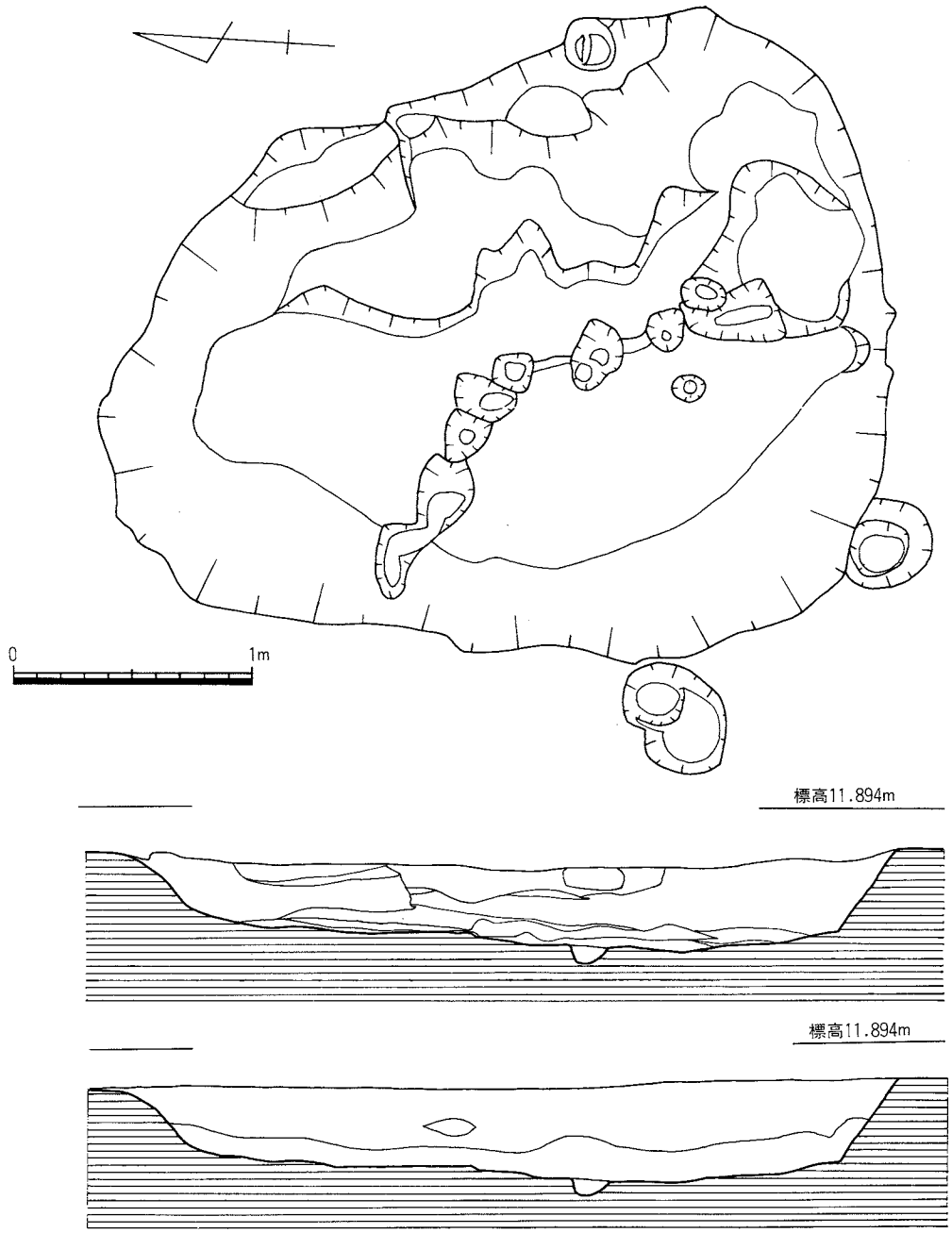


Fig. 30　第３号竪穴実測図

空地に掘り込まれたように単独で存在し、第３号竪穴も、同竪穴が埋った後に建てられた掘立柱建物の重複を考慮すれば、全く、１・２号竪穴の状況と同じである。以上からみれば、竪穴は掘立柱建物と組み合うことはない。むしろ、掘立柱建物に付随して掘り込まれたものと考えられる。ただし、ゴミ捨て穴のようなものとして掘り込まれたものでないことは、埋土中に極めて遺物が少ないことから肯首される。現在のところ、何に使用されたかは不明であるが、３基共にあり方が一致することや集中存在することから、同じ目的で掘削されたものと考えることができる。

4．第4次調査区のまとめ

(1) 旧石器時代

第4次調査区では、表面採集ではあるが、1点の旧石器を得た。このため、古代・中世遺構の調査が終了した時点で、旧石器時代の遺物包含層の有無の確認のため、トレンチを入れ試掘調査を実施した。試掘調査では、結果的に、当該期の遺物包含層を確認することはできなかった。しかし、本来、石器等を包含する新期ローム層の存在は確認することができたので、本調査区周辺部に、良好な旧石器時代遺跡が存在する可能性が強いことを示唆している。

有田・小田部の台地では、数ケ所で、当該期の石器が出土したり、採集されている。しかし、いずれもが、本調査区同様に、明確な包含層は確認されていない。このような中にあって、第5次調査区（31街区）では、遺物包含層が確認できた。この調査区は、有田・小田部の台地の南側の最高所近くに位置する。調査では2ケ所に礫群が認められ、剥片尖頭器、ナイフ形石器、削器等石器のみ約10点が出土している。剥片やチップがないなど、やゝ特異な遺跡であるが、今後、有田・小田部の台地で有力な旧石器時代遺跡が発見される可能性を示している。これからの調査に期待したいと思う。

(2) 掘立柱建物について

第4次調査区内において、柱穴の組み合せから建物として確認した掘立柱建物は68棟である。そして、これらの掘立柱建物と有機的関連性をもって併存し、集落の一画を占めていたと考えられる遺構に、溝・竪穴・土壙墓がある。以下、これらの各遺構の検討を行ない、古代末から中世にかけての集落構造の一端についてふれてみたい。

まずは、調査区の東端部に検出した溝の性格についてみていくことにしよう。検出した溝は2条、SD－01とSD－02である。SD－01は長さ12m、幅約1.5m、深さ0.5～1.0m、北西方向に延び、北側は調査区外に延びている。SD－02は、SD－01との間に約6mの空間地をつくり出す。SD－02は長さ10m、幅約1.5m、深さ0.9m、南方向に延びるが、調査区外にのび全形を知ることはできない。溝は共に削平によって浅くなっているので、元来はさらに深かったと考えられる。また、溝底には拳大～人頭大の礫が敷きつめたように存在する。何を目的としたものかは、現在、当を得た解釈を用意できないが、有田･小田部の古代末～中世の溝には共通した状況である。注目されるところである。なお、SD－01・02は空間部をもつものの一直線上に位置しており、一連の遺構であることは疑いない。溝は大きく見れば、西にわずかに円弧を描き、溝の内側、つまり調査区西半部と溝の外側、調査区東側で遺構の密度が極端に異なり、掘立柱建物の大部分が、溝の内側に存在する。以上から、SD－01・02の溝は集落を囲み、区画していた可能性が強い。溝の切れ間は集落の出入口の機能をもっていたとみられる。

掘立柱建物は、調査区の西半に集中していて重複が著しい。掘立柱建物68棟の内訳は、次のとおりである。① 梁、桁行共に1間の建物、20棟。② 梁行1間、桁行2間の建物、9棟、③ 梁、桁行共に2間の建物 5棟。④ 梁、桁行共に2間の総柱の建物、2棟、⑤ 梁行2間、桁行3間の建物、19棟。⑥ 梁行2間、桁行4間の建物、3棟。うち1棟は、製鉄関連遺構の覆屋となっており小規模である。⑦ 建物として確認できるが、建物の大部分が調査区外にのび、規模の全容が不明な建物 10

棟である。

次に、掘立柱建物の重複関係がどのようになっているかをみてみよう。相互の重複関係を多い例かみると、SB－08・22・24～26の相互に5棟切り合いが最も多い例、SB－06・51～53とSB－10～12・39が相互に4棟切り合う。その他、相互に3棟、2棟例は、大部分の掘立柱建物間でみられる重複関係で、むしろ、単独で存在する例は珍しい。また、重複する建物の多くの場合は、同規模あるいは同じ機能をもつ建物を同じ場所に建て替えたものが多いことが指摘できる。重複関係からみた建物群の時期幅は5時期以上にわたることが推測される。

以上の結果から、68棟の掘立柱建物を5時期として単純計算すると、同時併存の建物は13.6棟となり、14棟前後の建物があったことになる。次に、掘立柱建物の規模、機能の差異により、さらに詳しくみてみよう。①の建物の場合、4棟、②の場合、1.8棟、③、④は総柱か否かで、規模は同じであるので、同種の建物として扱うと、1.4棟、⑤、⑥は、規模に若干の差があるが機能的には同種であるので、同様に扱うと、4.2棟となる。これから同時併存の建物を求めると、①が4棟、②が2棟前後、③、④が1～2棟、⑤、⑥が4棟前後の11～12棟前後が同時併存になる。⑦の全容不明の建物を除外しているので、先に単純計算で出した14棟前後と大差はないことがうかがえる。しかし、ここでは、規模、機能による建物の最小単位を抽出することができる。すなわち、2間×3間または2間×4間の建物、2棟、2間×2間の建物1棟、1間×2間の建物1棟、1間×1間の建物2棟、計6棟が建物の組み合せの最小単位となる。この組み合せが、何を意味するかは充分な検討が必要であるが、ここでは一戸を構成する単位と考えておきたい。そうすれば、調査区内には2戸以上の家族の生活址がとどめられていたことになる。具体的に一戸、一戸の建物配置および、その領域を示すべきであるが、詳細な建物の切り合い関係、柱筋の通り具合、柱穴内の遺物の検討が不充分であり、隣接地域が未発掘で、資料的制約が多いことから、明確に示すことはできない。建物は南北棟およびそれに直交する東西棟で占められており、その主軸方向の検討では、同時併存の建物は先に示したと同じような結果がでそうであるが、さらに検討が必要である。

製鉄関連遺構や竪穴遺構は、掘立柱建物とは重複がきわめて少なく、むしろ、建物をさけて作られた可能性が強く、居住区内に工房的施設があったことがうかがえる。土壙墓は1基確認したのみである。副葬遺物からみれば、本調査区では、最も時期がさかのぼる。前述したように、屋敷神的存在と考えてよいものであろう。

(3) 製鉄遺構について

製鉄関連遺構は4基を確認した。炉址、あるいは炉が破壊されたものと考えることができる。壁あるいは壁が熱によって焼土化し、埋土に多量の灰を含み、石材のみられるものもある。スラッグが少なからず出土することから製鉄関連遺構とした。箱形をしたもの2例がある。第4号製鉄炉址の上部構造として覆屋があることを確認したことは成果の一つである。2間×4間、3.0m×4.4mの小規模なものである。やっと遺構を覆い、作業場的な空間の確保はやゝ困難と考えられ、この遺構が、どの段階に使用されたか、興味深い。なお、建物の一隅柱には柱穴が確認できなかったが、これは煙出し等の遺構と関連した施設があった可能性が強い。

調査区内で検出した製鉄関連遺構は小規模かつ集落内に存在することから、大きな発展はみられない。溝内からも少なからず鉄滓が出土しているが、量的には少なく、家内的生産活動であったことがうかがえる。

第４章　第176次調査報告

有田第176次調査

遺跡調査番号	9417	遺跡略号	ART176
地番	有田１丁目６－１	分布地図番号	原82
開発面積	180.28m² 対象面積	180.28m²	調査面積　123m²
調査期間	平成６年５月24日～平成６年６月16日		

調査概要

本報告は、平成６年度の国庫補助の対象事業として発掘調査を行なった民間の個人専用住宅の建設にともなうものである。

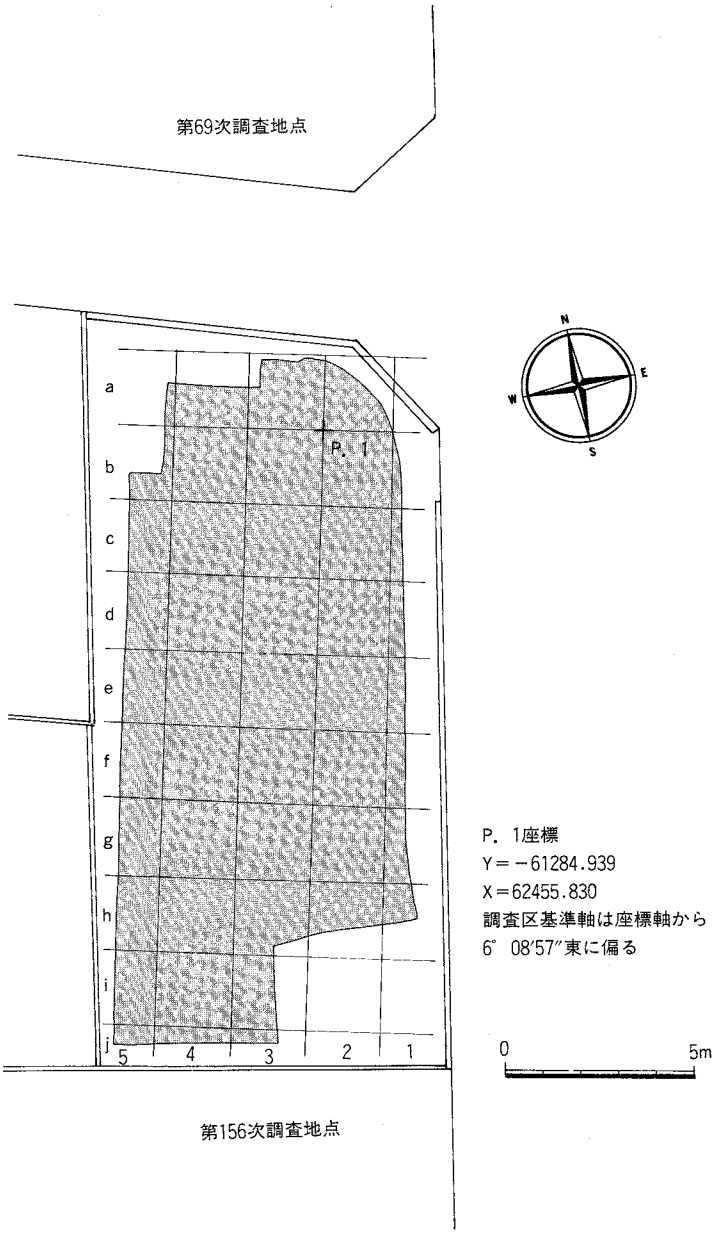


Fig. 31　第176次調査地点位置図 調査区設定図（1：200）

調査の組織

調査主体　福岡市教育委員会
　　福岡市教育委員会文化財部
　　埋蔵文化財課第１係
庶務担当　第１係長　横山邦継
　　（庶務）　内野保基
調査担当　池崎譲二

立地

当該地は福岡市早良区有田１丁目6－1に所在し、発掘調査面積は123m²である。有田地区の最高所平坦地の標高は約15mを測るが、当該地は平坦地から北東方向に伸びる舌状尾根の付け根ほぼ中央に位置しており、標高約9.5mを測る。

周辺では道路を挟んだ北側で第69次調査が、南接する宅地で第156次調査が行なわれており、弥生時代から中世にいたる遺構、遺物が検出されている。

概要

今回の調査区の基本的な層序は、上層からガラ混じり客土(約15cm)、茶褐色整地層（約10cm)、黒色強粘質土（約10～15cm）となっている。このうち上面２層は近世以降のもので表土として機械で除去した。黒色

土粘質土は中世の整地層で、弥生から平安時代までの遺物を包含し、地山（八女粘土）の傾斜する北西に向かって厚くなる。検出遺構はこの層の直下から地山に掘り込まれたものである。調査区は宅地造成に係る削平、住宅基礎攪乱を受け、遺構の遺存状態は全体に不良である。検出された遺構は古墳時代竪穴住居２軒、古代の掘立柱建物１棟、土坑１基、不明遺構１基、古墳時代～中世のピット若干である。遺物は弥生時代から近世まで及ぶが量は少なく、総量でコンテナ１箱に満たない。以下検出遺構、遺物について述べる。

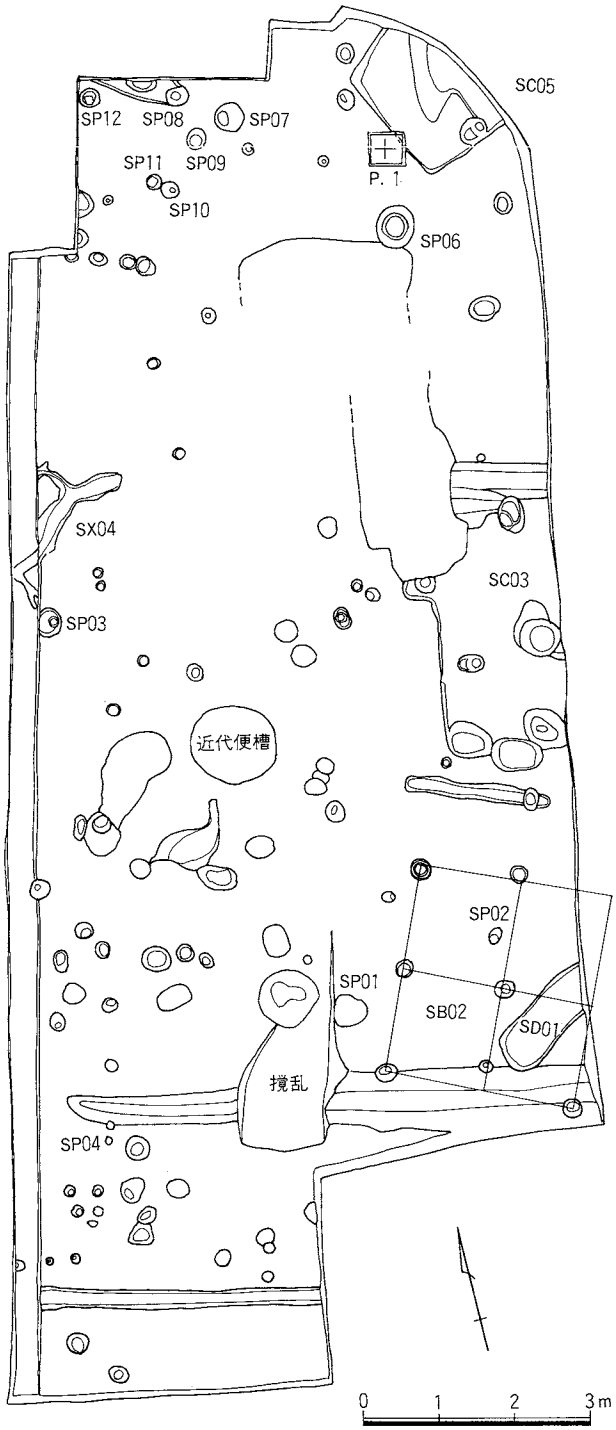


Fig. 32　第176次調査遺構配置図（1：100）

SK01（写真　）

調査区南東隅で検出されたが一部調査区外に伸び全容は不明である。幅0.5m、長さ1.5m＋α、深さ20cm程の規模である。やや軟質の赤褐色土が充塡しているが、遺物はなく性格不明である。

SB02（Fig. 33、写真　）

１～２－f～g区で検出された総柱の掘立柱建物である。一部調査区外に伸び全容は不明であるが、２×２間の規模であろう。南北柱列を桁行とすれば、主軸は磁北よりN25°Eの向きをとる。桁行総長2.7m梁行総長2.6mを計る。柱穴から土師器細片が微量検出されている。奈良～平安期の建物であろう。

SC03（Fig. 33、写真　）

１～２－d～e区で検出された古墳時代竪穴住居である。調査区外に伸び、また建物基礎等の攪乱に寸断され全容は不明である。残りはきわめて悪く浅い周壁と溝によって辛うじて竪穴住居と判断できる。建物解体の際の廃棄物処理坑によって切られているが、西側中央部に張り出しがあり、竈の可能性がある。覆土から丹塗りの弥生土器細片、古墳時代土師器片が微量検出された。

SX04（Fig. 33、写真　）

５－d区で検出されたものである。枝分かれした溝状の遺構で、下面に焼けた礫とともに土師器、須恵器、白磁片小量が流れこんだような状態で出土した。基盤層は乾燥時にクラックが目立ち、それに上面の黒色整地層の遺物が流れこんだものであろう。

SC05（Fig. 33、写真　）

調査区北東端２～３－a区で検出した竪穴住居状の遺構である。調査区外に伸び全容は不明であるが、西辺は1.7mを計る。上面を削平されているものと思われ深いところでも10cm程の残りしかない。南側壁ぎわに柱穴と思われる掘方がある。黒色の覆土から土師器鉢の破片が出土している（Fig.34－１、写真　）。外面ユ

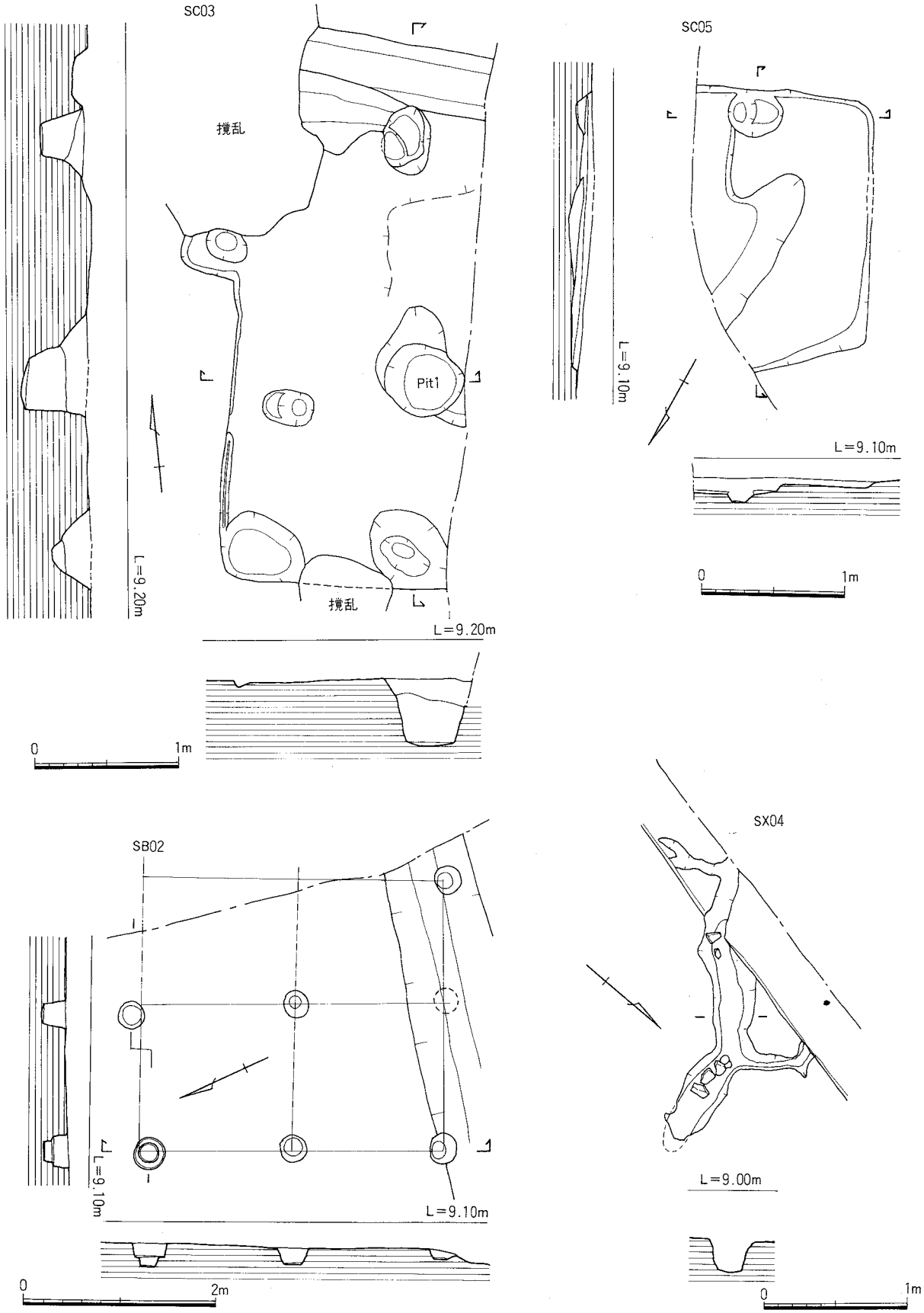


Fig. 33 SB02、SC03、SX04、SC05実測図（1：60、1：40）

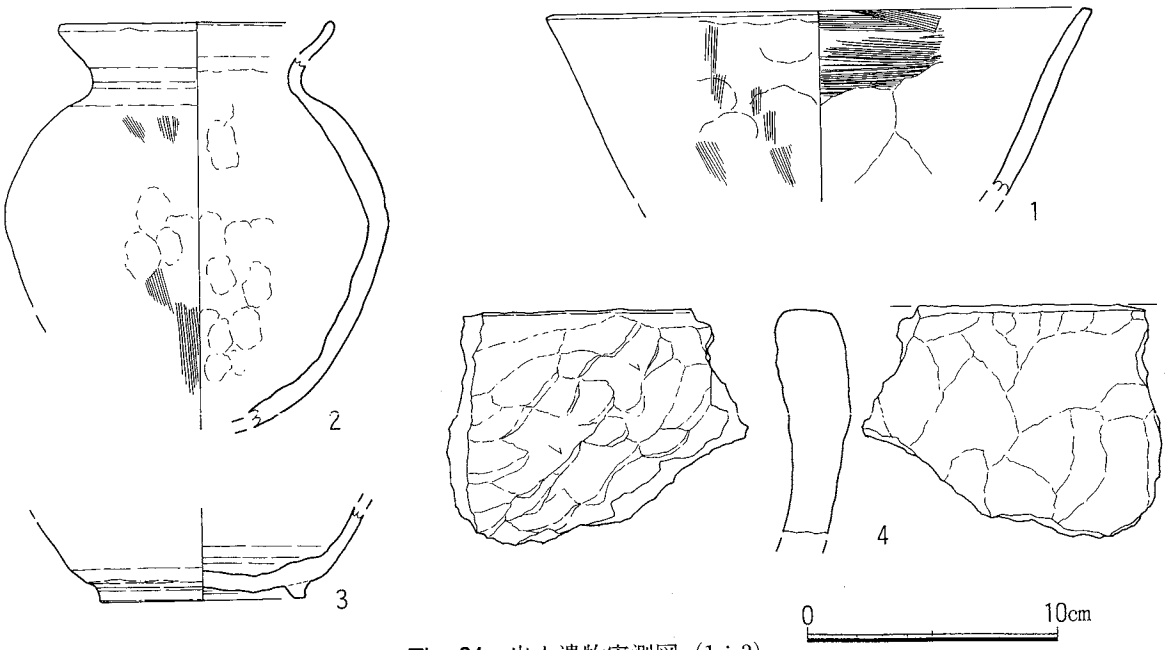


Fig. 34　出土遺物実測図（1：3）

ビ押さえのちハケ目、内面上半は横ハケ目、下半はヘラけずりしている。他に土師器甕もみられるが図示しえない。

その他の遺構

調査地点全体に柱穴と思われるピットが散見されるが、組織的な把握は困難である。これらのうち遺物を出土したものには番号を付したが、遺物はいずれも細片、微量で図示できない。ほとんどが古墳時代～奈良時代の土師器である。

出土遺物（Fig. 34－２～４、写真　）

黒色の整地層から弥生時代から中世にいたる遺物が出土しているが量的に少なく、また図示しえるものも小量で、３点を載せている。２は全体がうかがえる唯一の遺物で内外面をユビ押さえし、外面にハケ目が残る。３は高台付きの須恵器坏である。４は滑石製石鍋の破片である。外面は比較的平坦に削っているが、内面はノミ状工具で抉るように削りだしており、凹凸が目立ち粗い。端部が肥厚する。縦耳の付くタイプである。

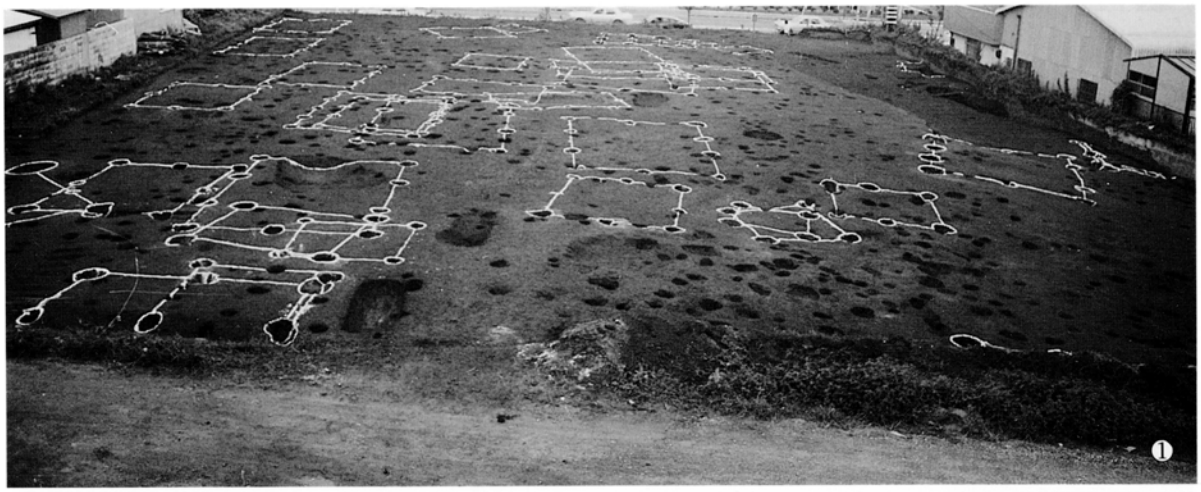
まとめ

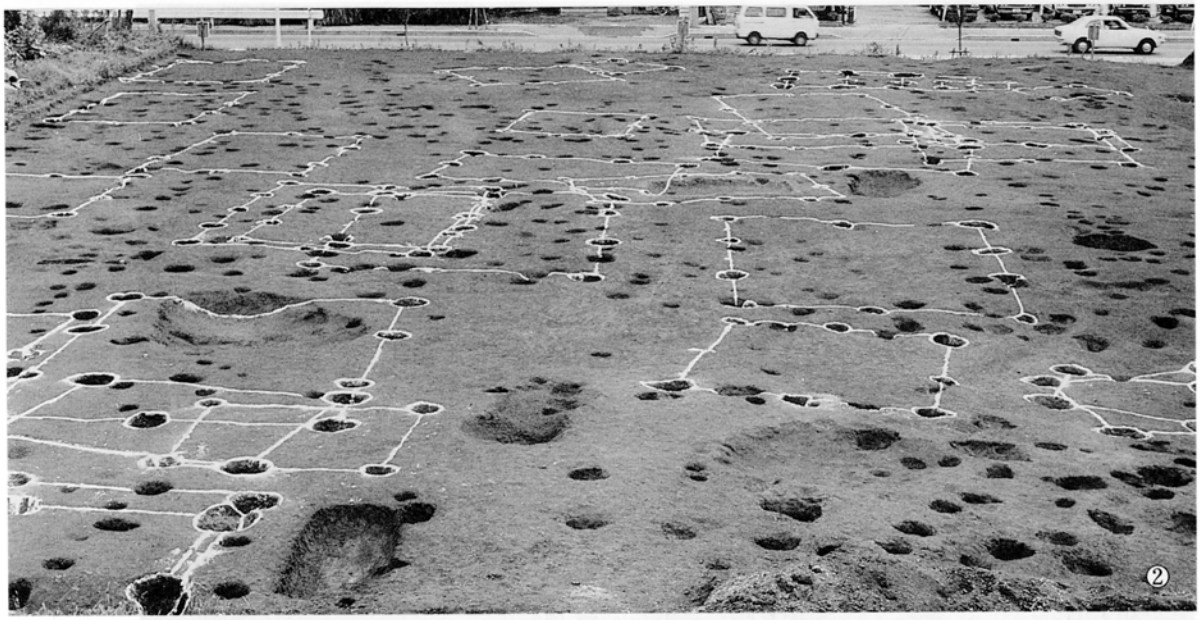
今回の調査地点では面積が狭小なうえ、地形の改変をうけ遺構の遺存状態は不良であり、この調査区だけで遺跡全体を云々することはできない。周辺の調査地点とあわせて遺跡をみる必要がある。今回の調査では奈良～平安時代の２×２間の１棟の総柱掘立柱建物、古墳時代、奈良時代の２軒の竪穴住居が検出できた。第69次調査、第156次調査ではいずれも黒色の弥生時代から中世にいたる遺物を含む整地層がみられ、中世のある時期に大規模な造成が行なわれていることを示している。今回の調査地点では有田遺跡群の中心からは、ややはずれた位置にあるが、遺構の遺存状態は良好でないものの第69次調査、第156次調査でも同様の掘立柱建物、竪穴住居が検出されておりかなりの広範囲に遺跡が広がっていることを示している。今回の調査は、有田遺跡群全体を把握する上で、一つの資料を提供するものでもある。

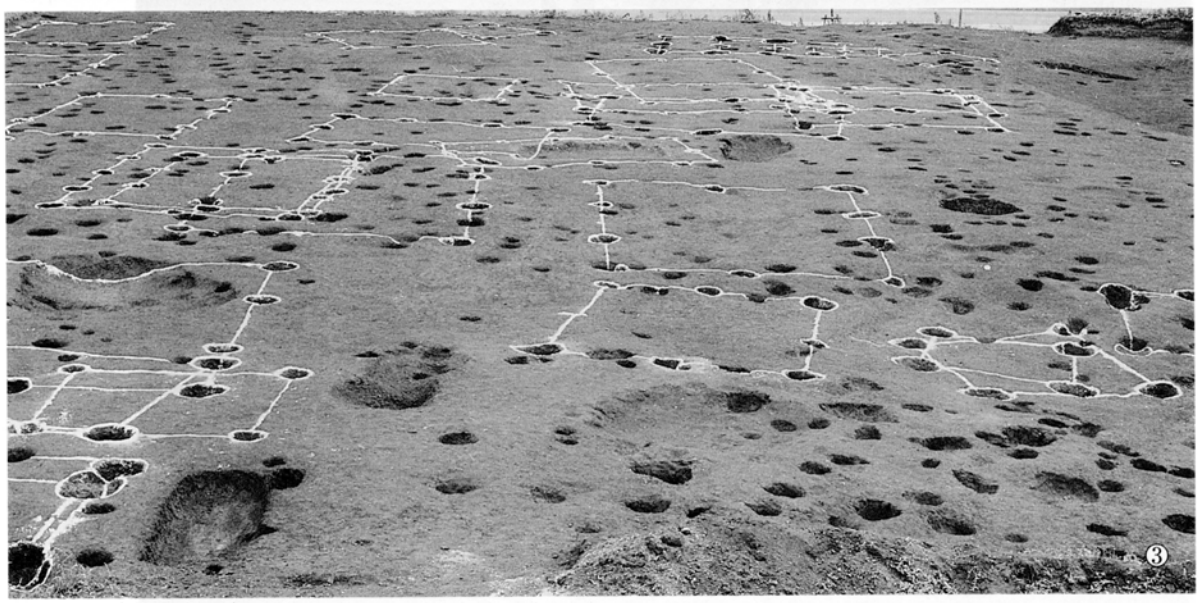
図　版

PLATES

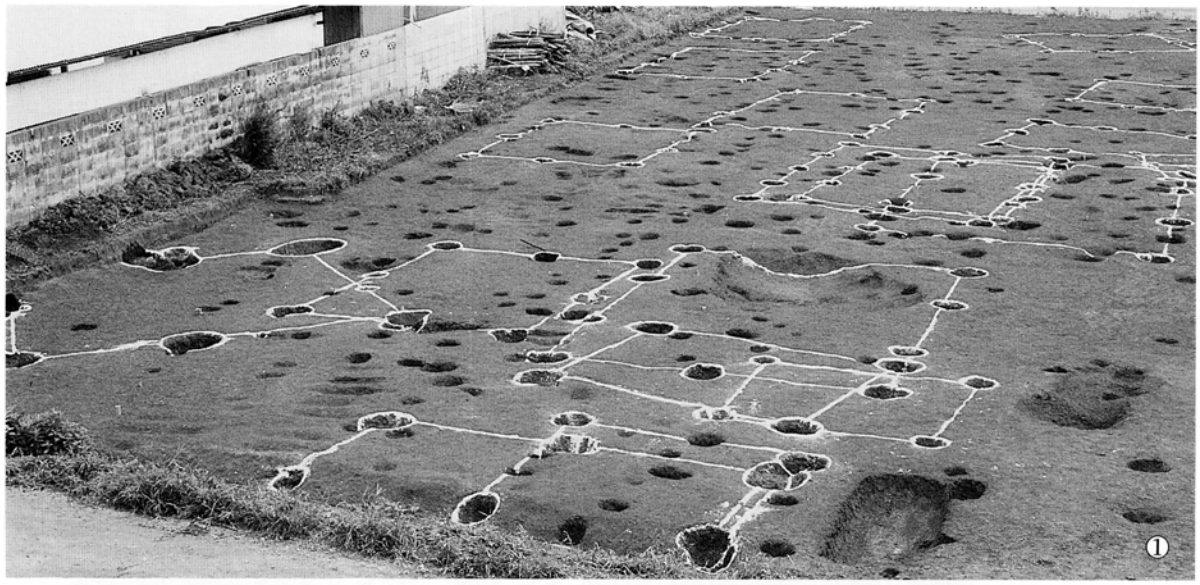
①調査区全景　②旧石器時代探査の調査状況　③旧石器探査の試掘トレンチの位置

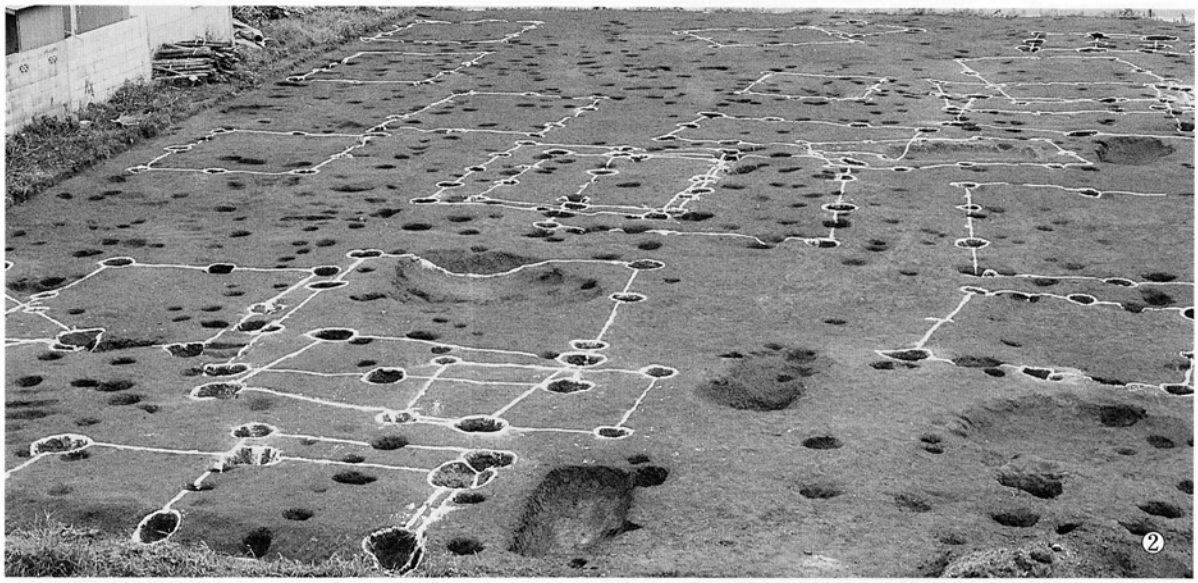


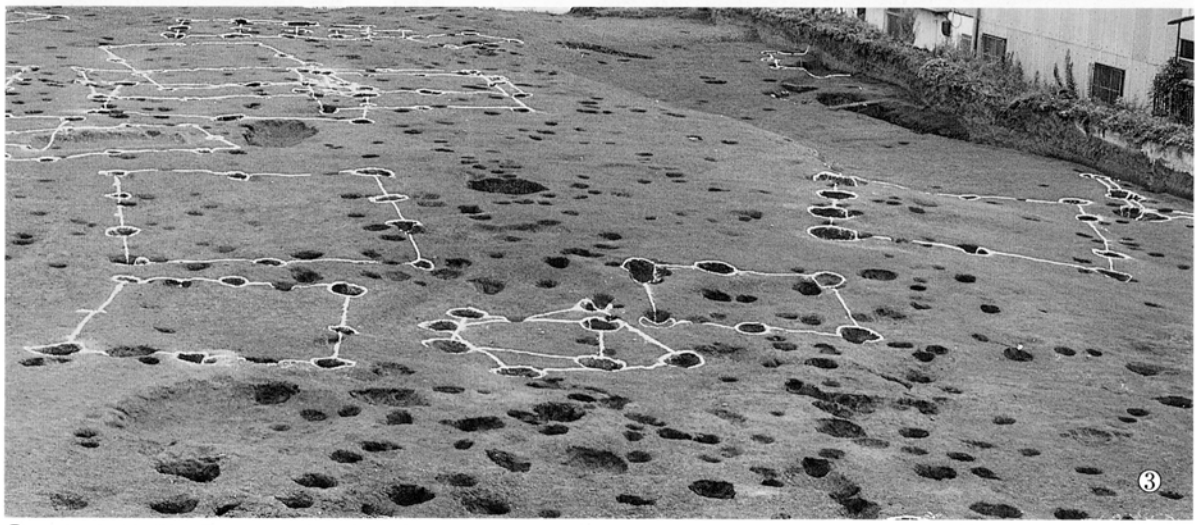




①調査区・掘立柱建物全景　②中央部掘立建物　③中央部（拡大）

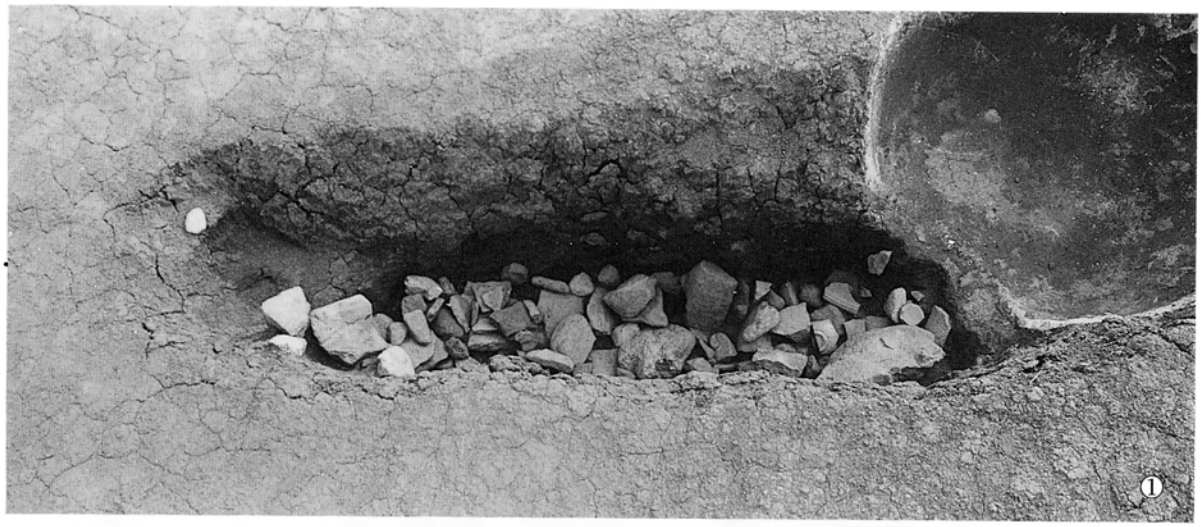


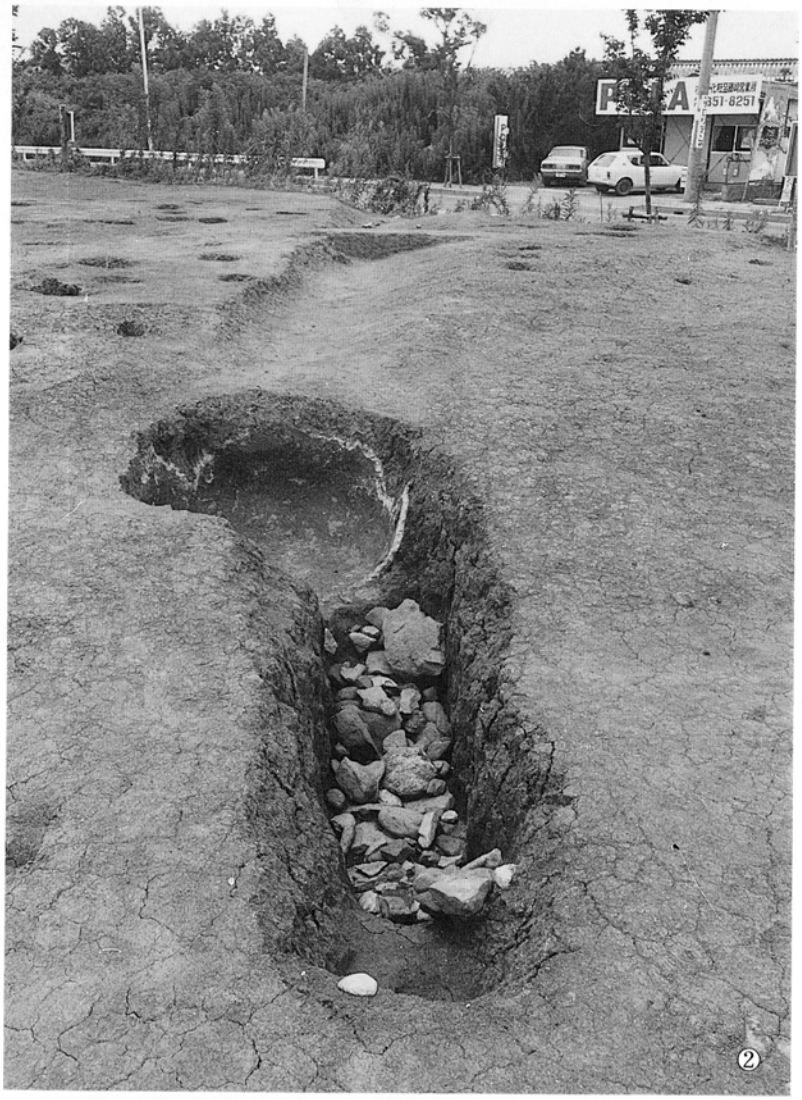




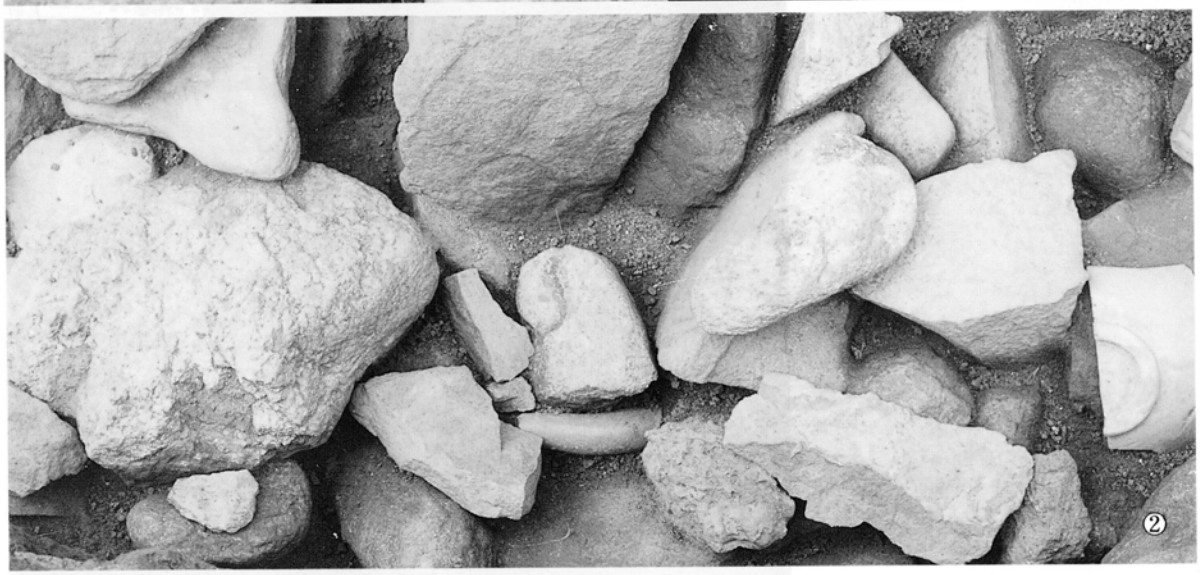
①調査区西半部・掘立柱建物　②調査区中央～西半部・掘立柱建物　③調査区・東半部・掘立柱建物

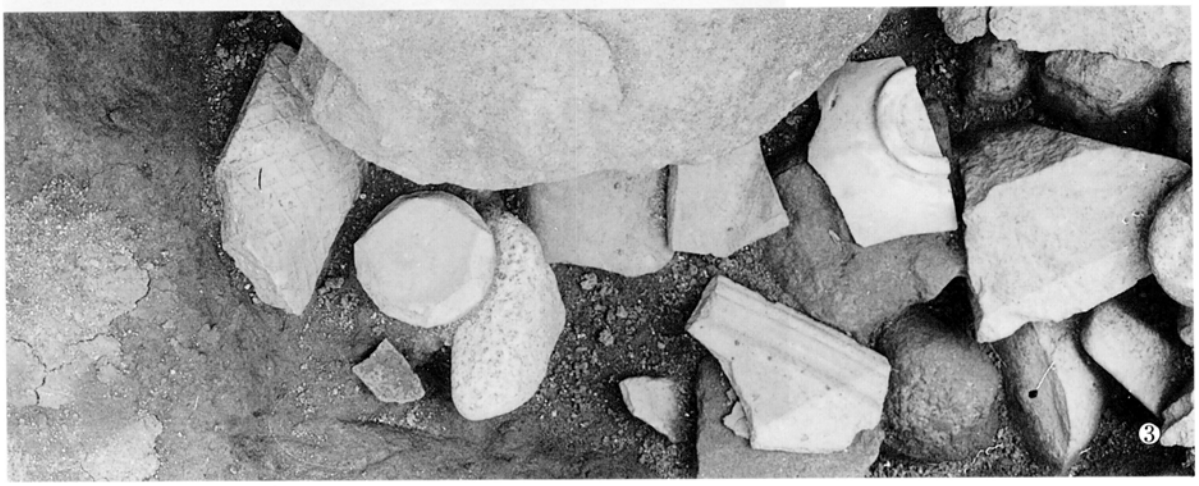
①調査区全景・南北棟建物　②調査区・南北棟建物　③調査区東半部・掘立柱建物



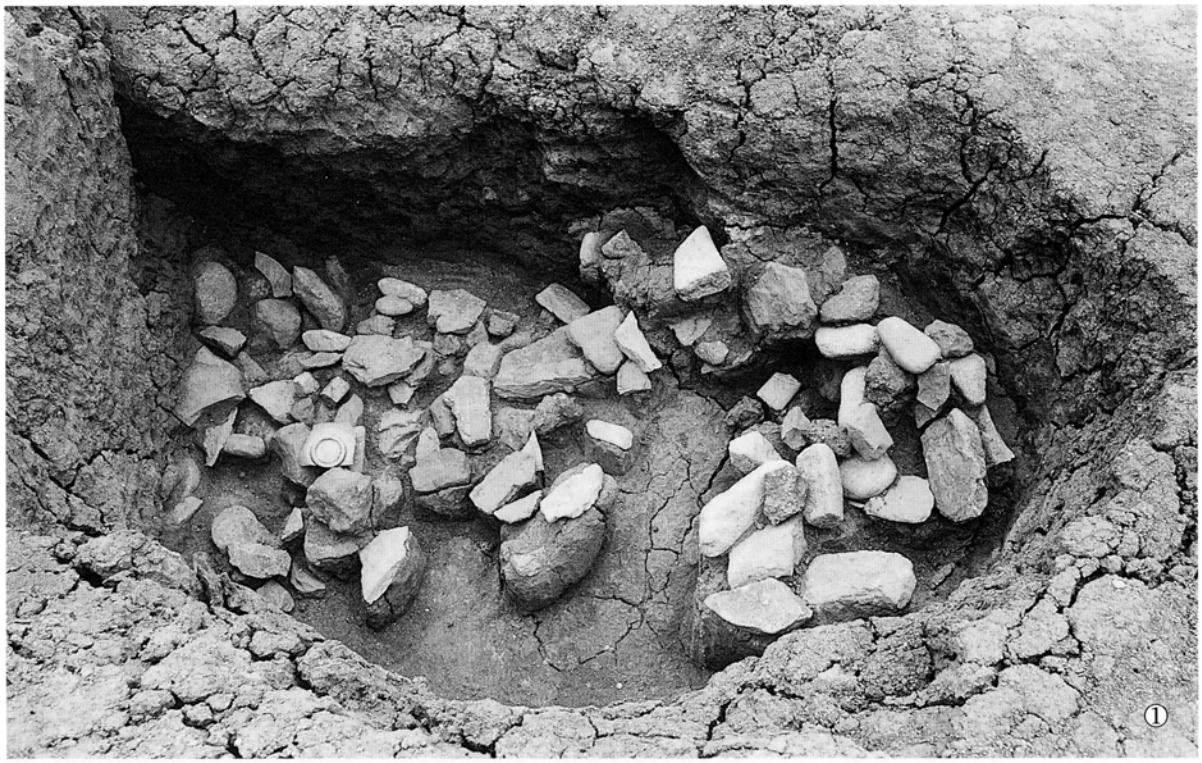


①SD－01 先端部状況
②SD－01 全景

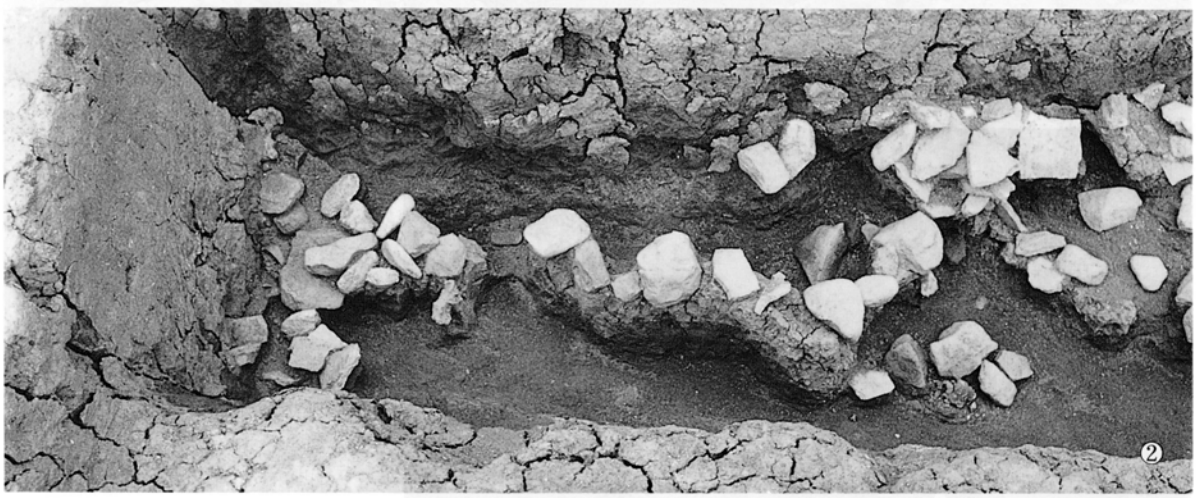




①～③SD－01 遺物出土状況

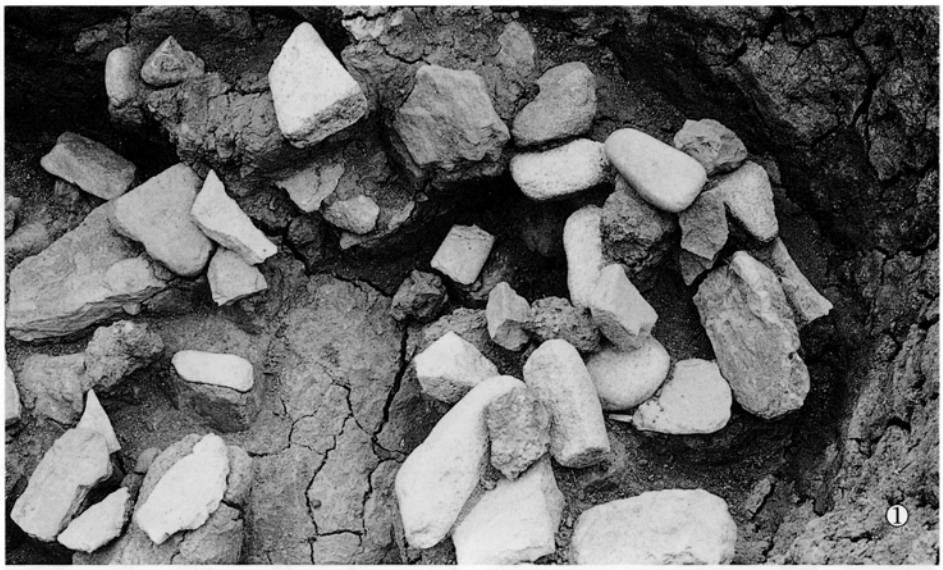


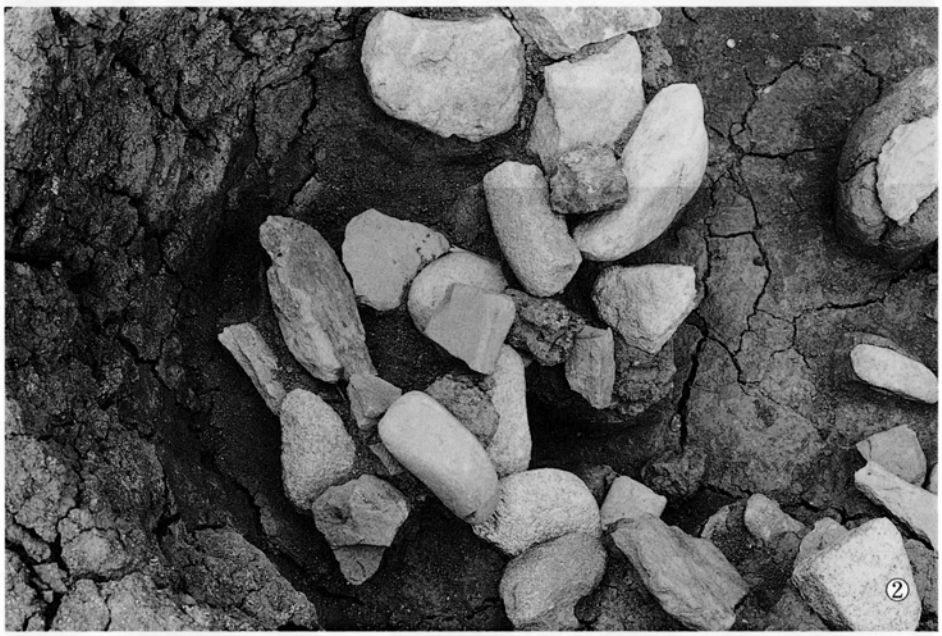
①SD－02 先端部
②SD－02 全景



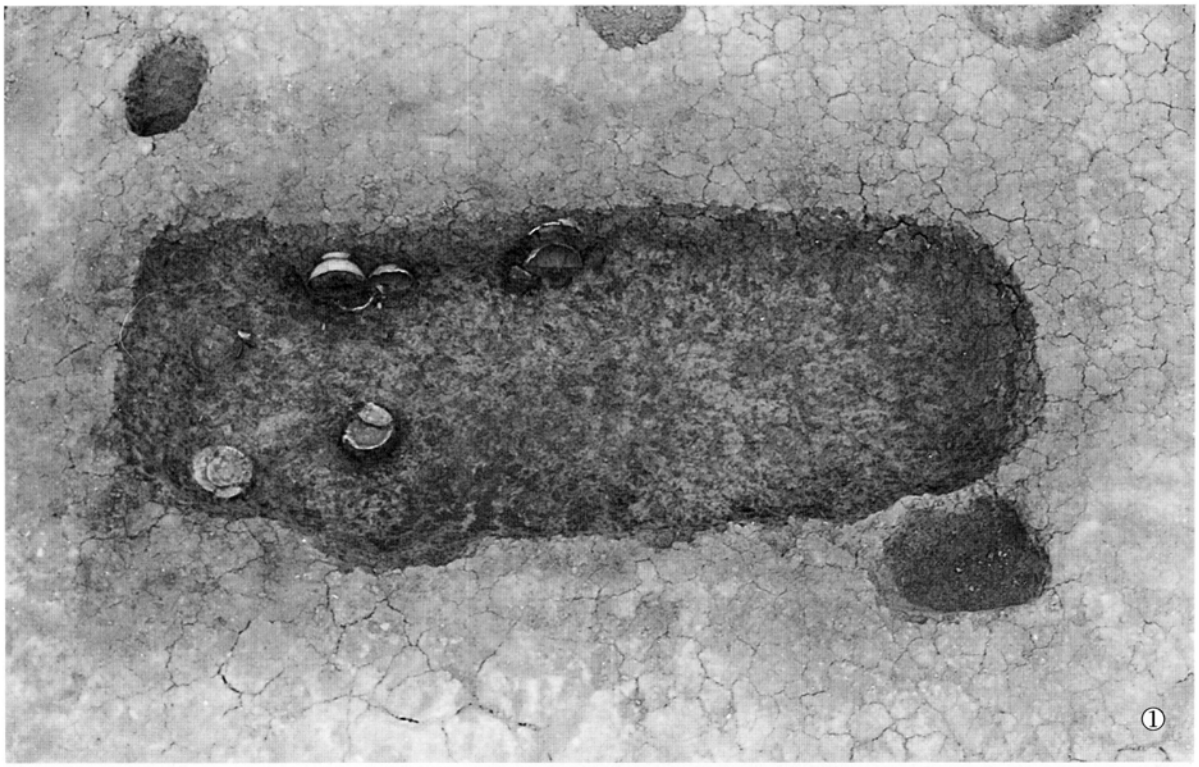
①～③SD－02 礫露出状況

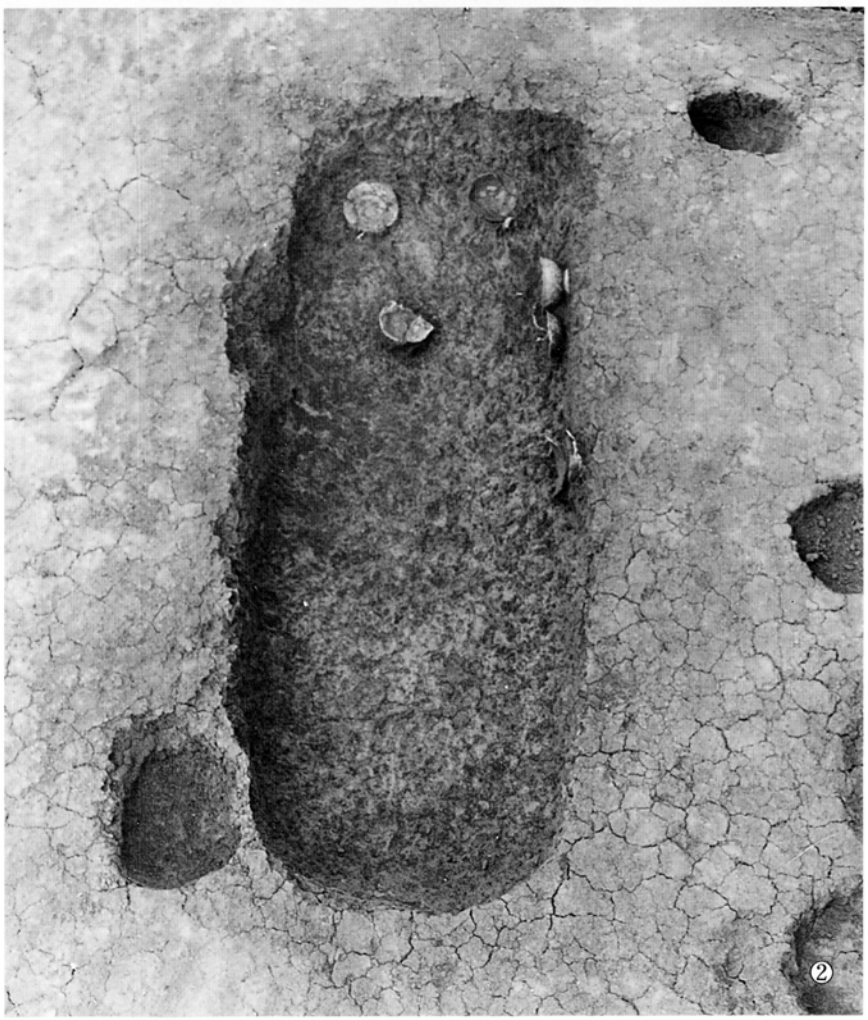
①～③SD－02 遺物出土状況





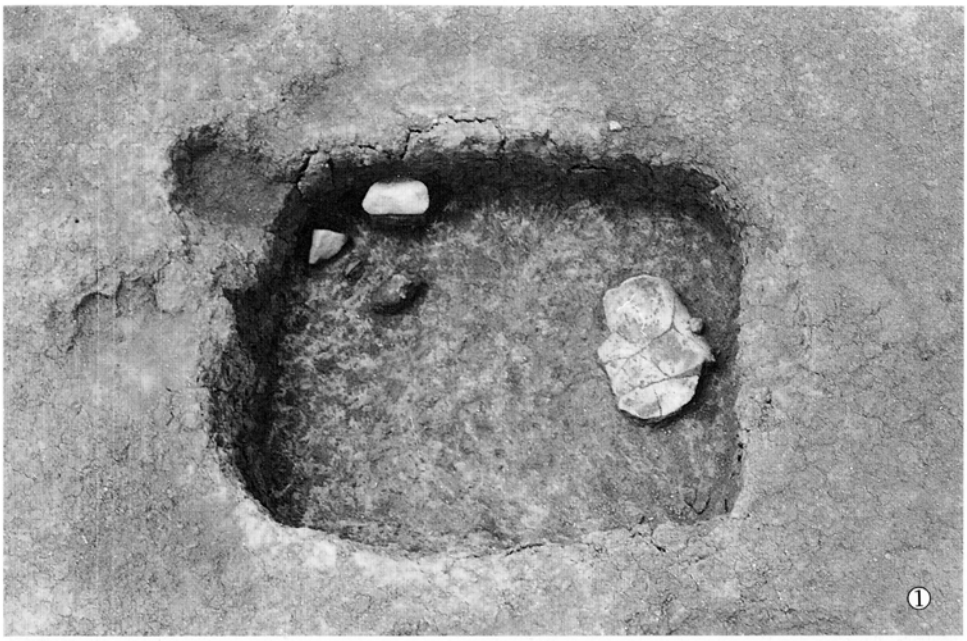
①～③
SD－02 遺物出土状況





①土壙墓（東より）
②土壙墓（北より）

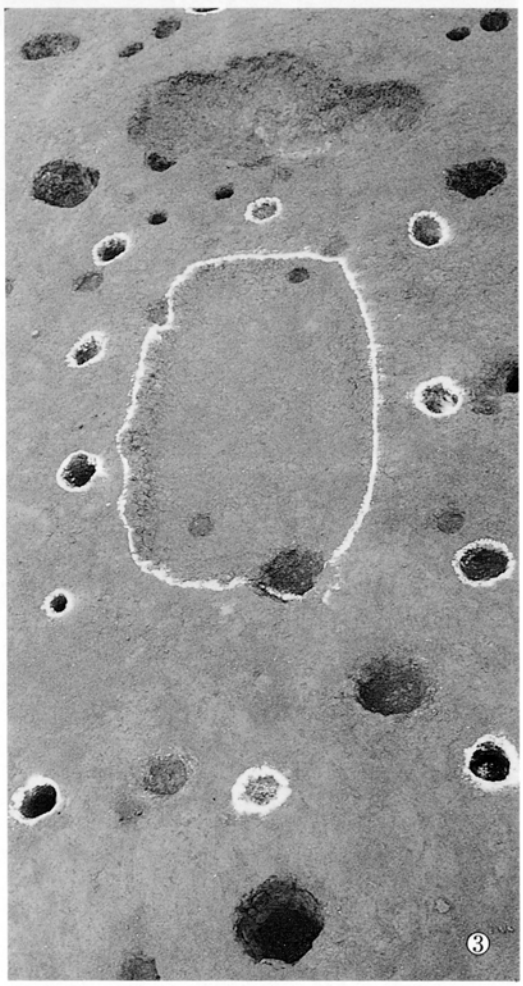
①～③ 土壙墓・副葬土器出土状況



①第 2 号製鉄址

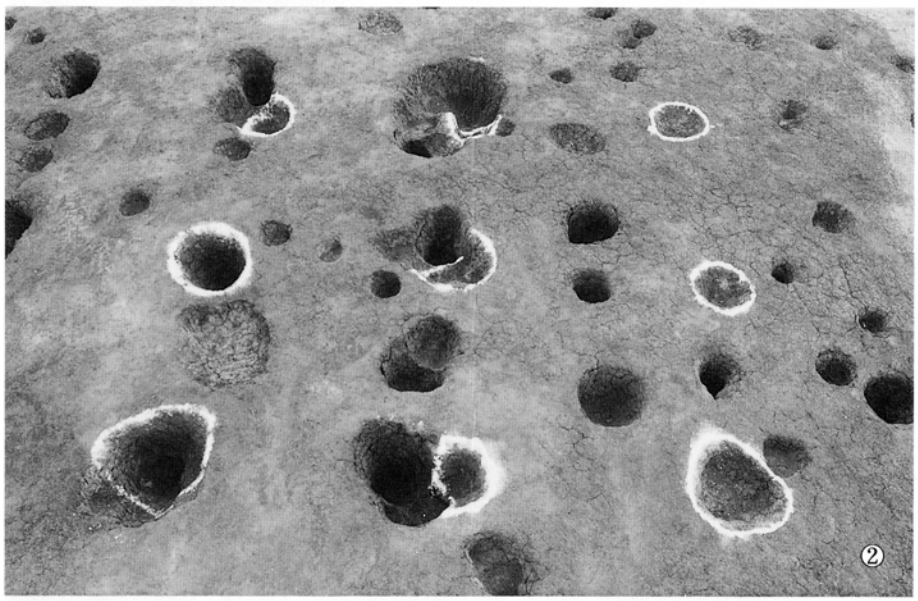
②第 2 号製鉄址
スラツグ出土状況

③第 3 号製鉄址



①第４号製鉄址全景（南から）②第１・４号製鉄址全景 ③第３号製鉄址全景（西から）

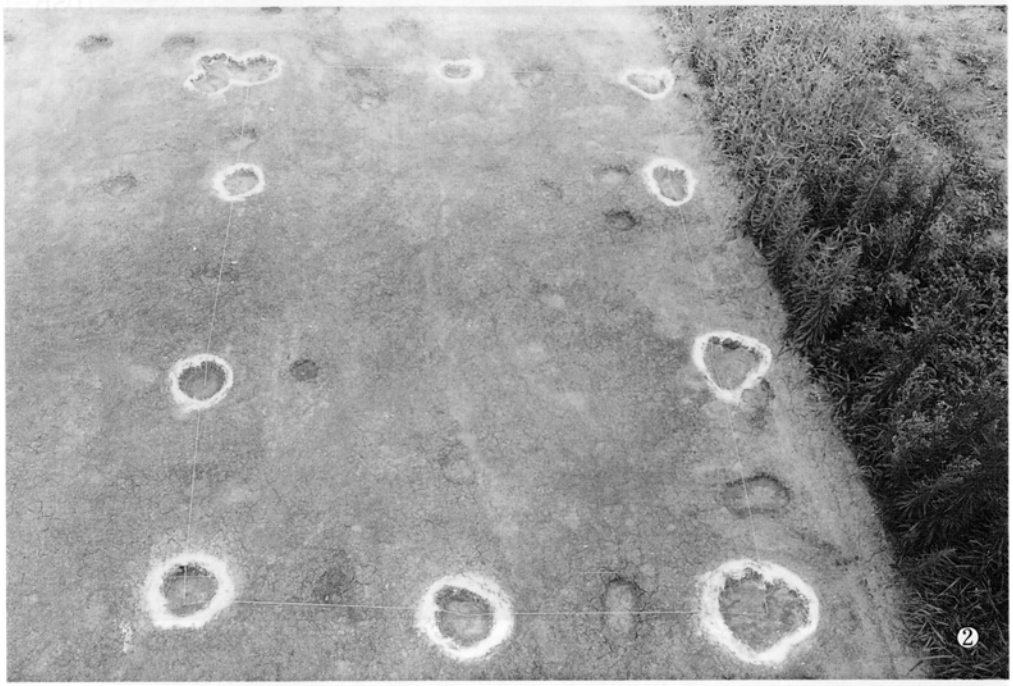
①SB－02



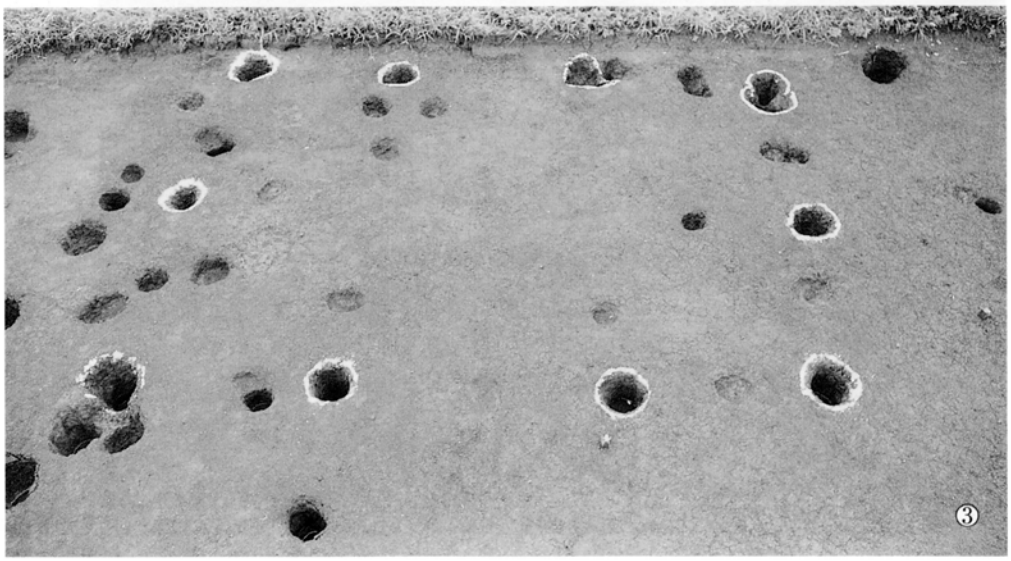
②SB－01

③SB－01・02

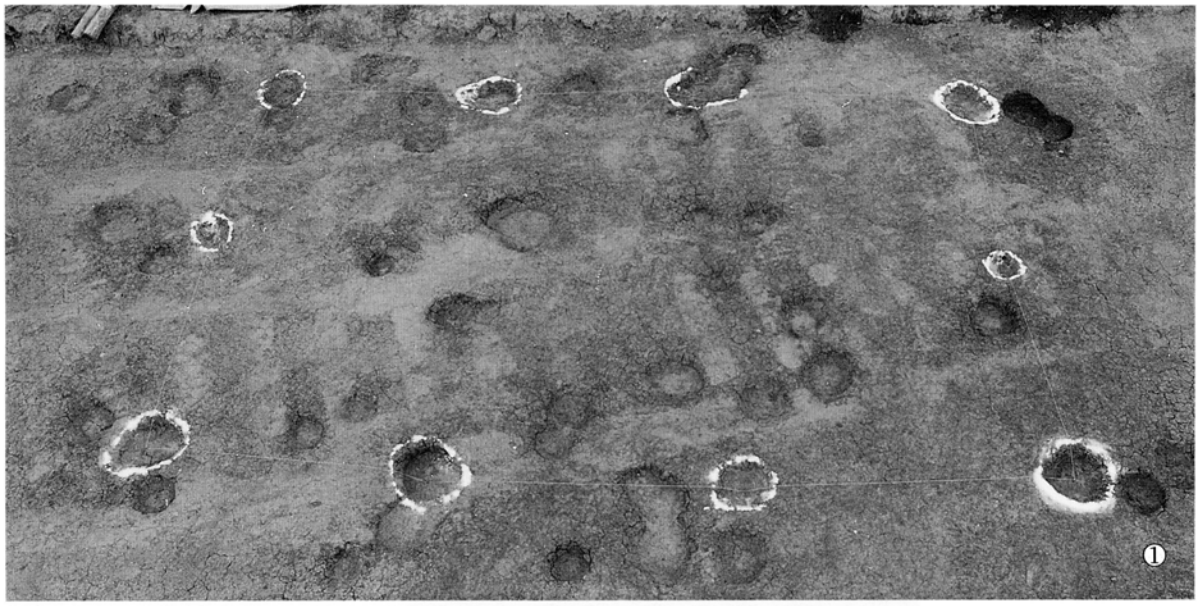
①SB－05
（南から）



②SB－05
（北から）



③SB－05
（東から）

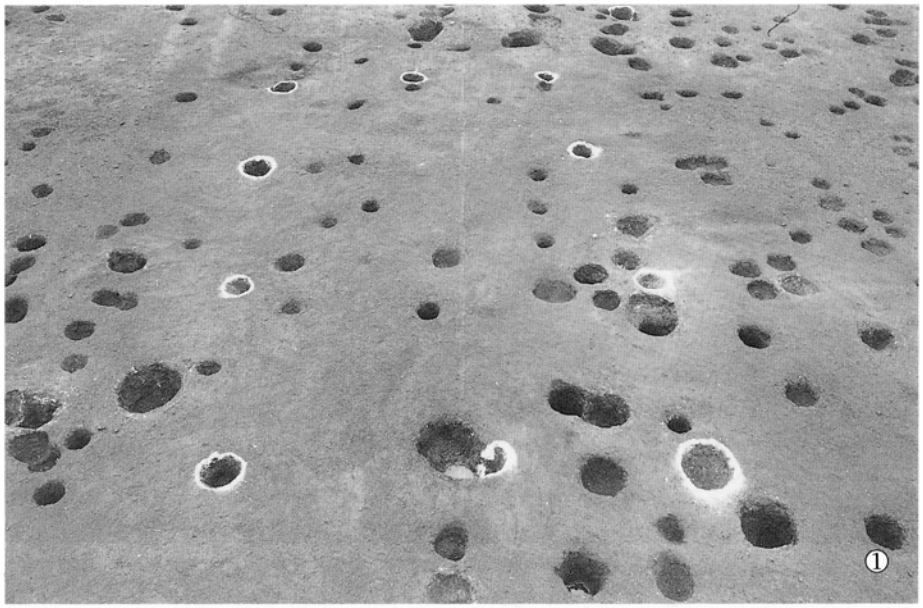


①SB－06（東から）
②SB－06（北から）

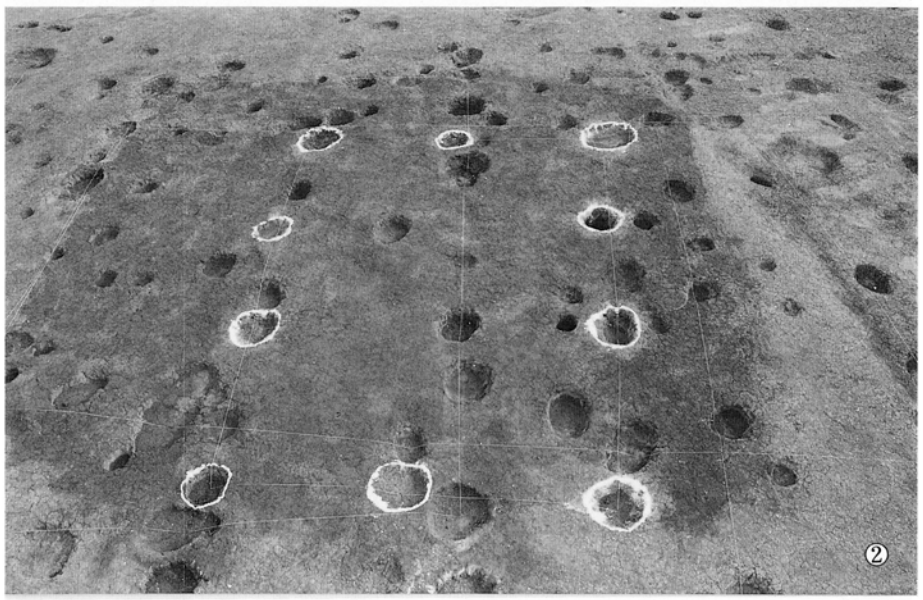
①SB－68

②SB－23

③SB－38（北から）



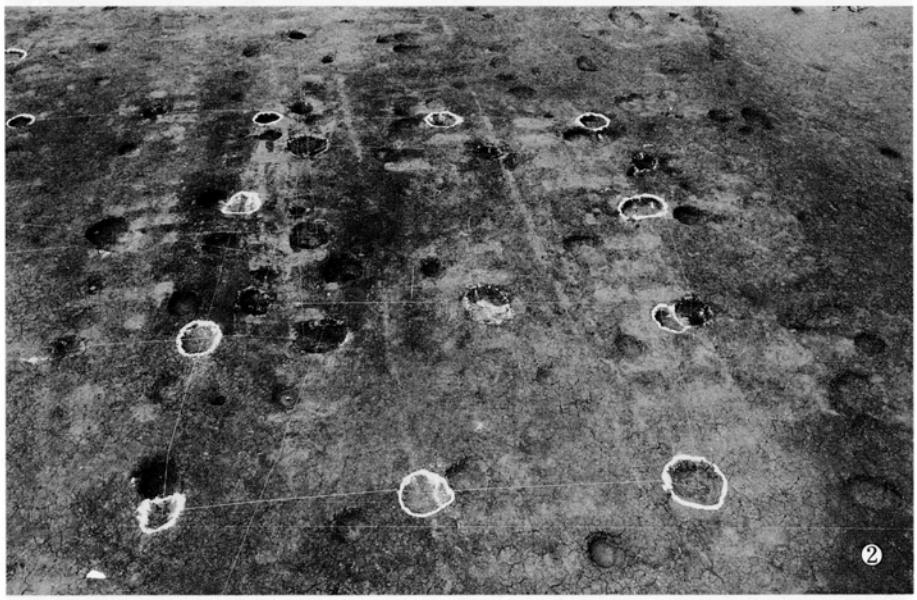
①SB－24



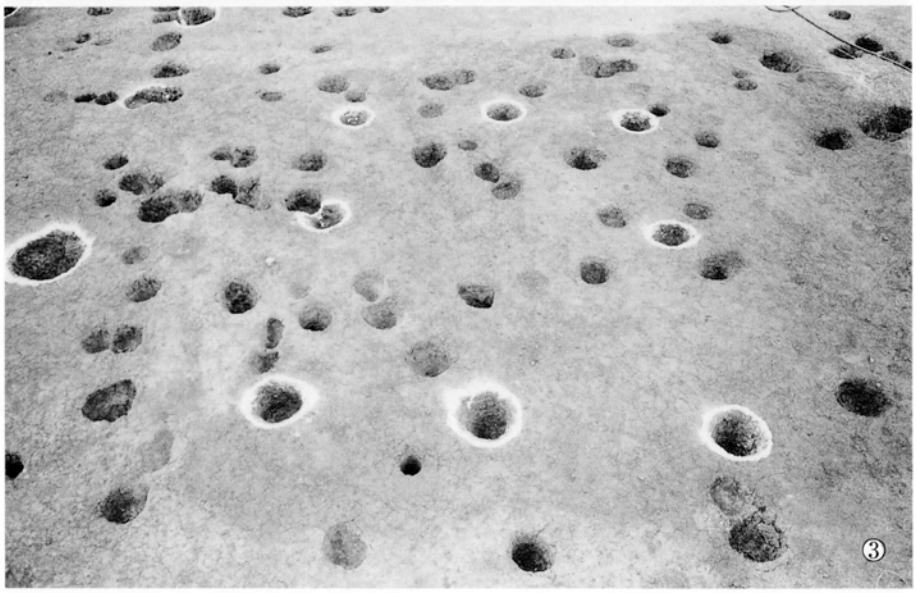
②SB－10

③SB－21

①SB－04（南西から）

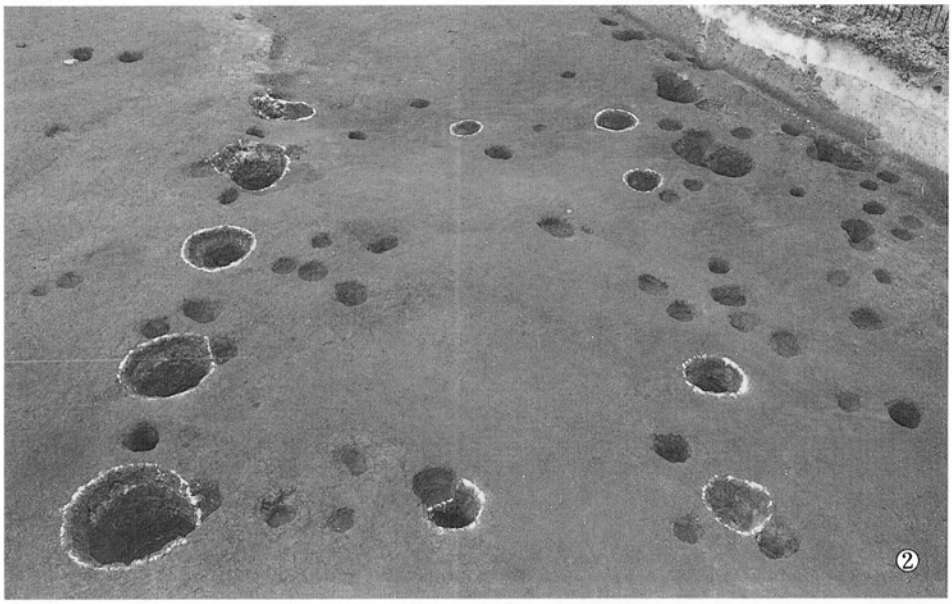


②SB－22

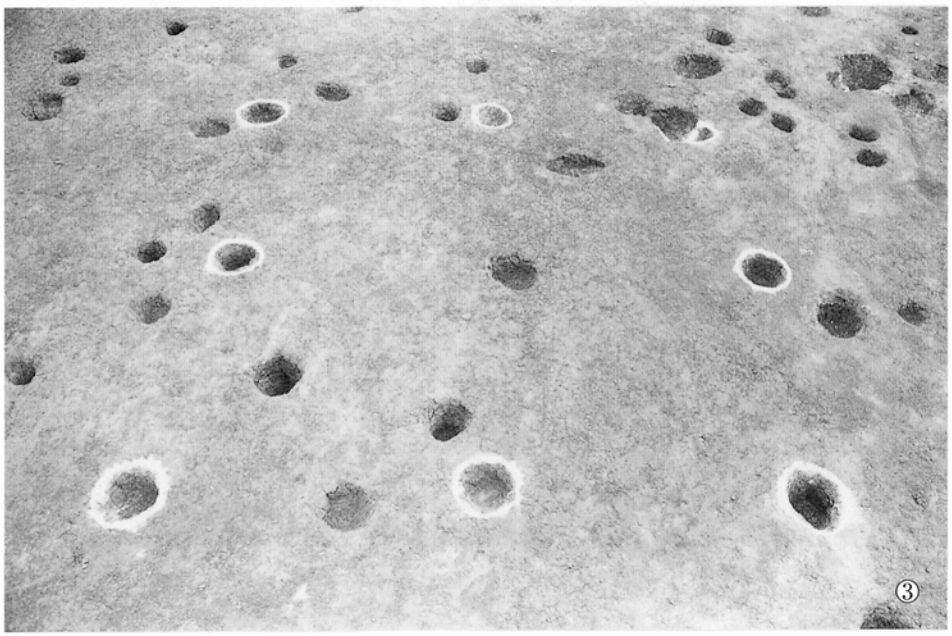


③SB－60

①SB－29（北から）

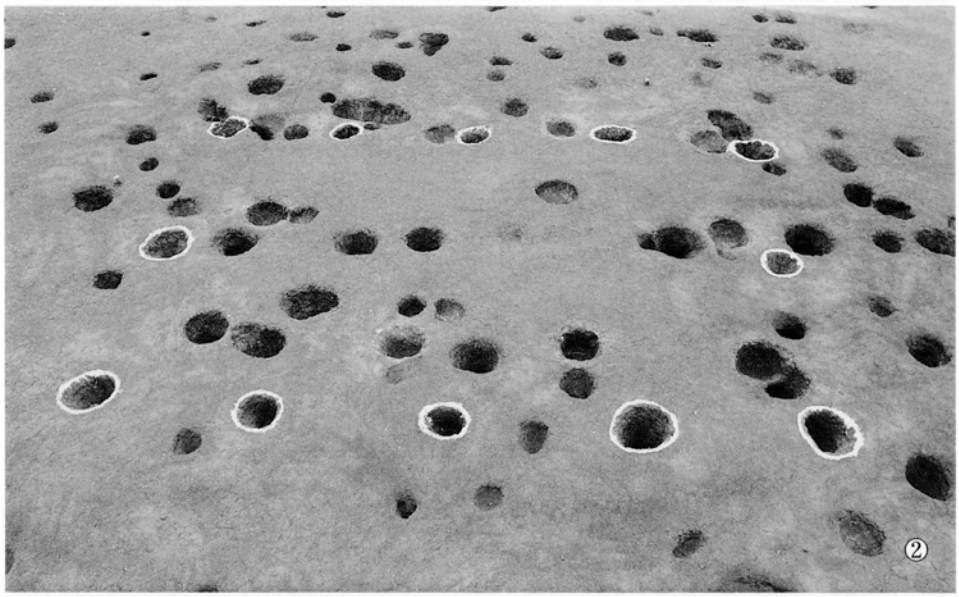


②SB－29（南から）

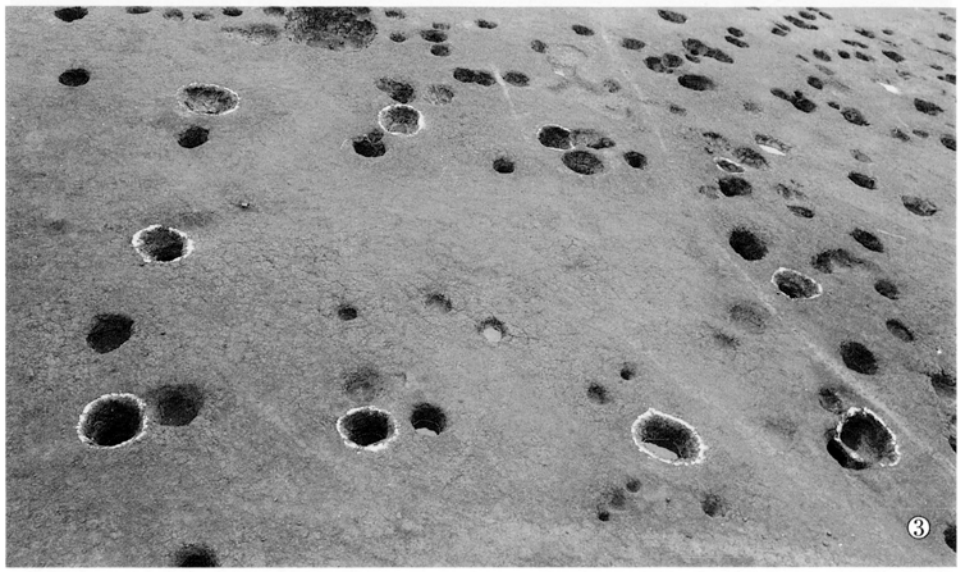


③SB－04

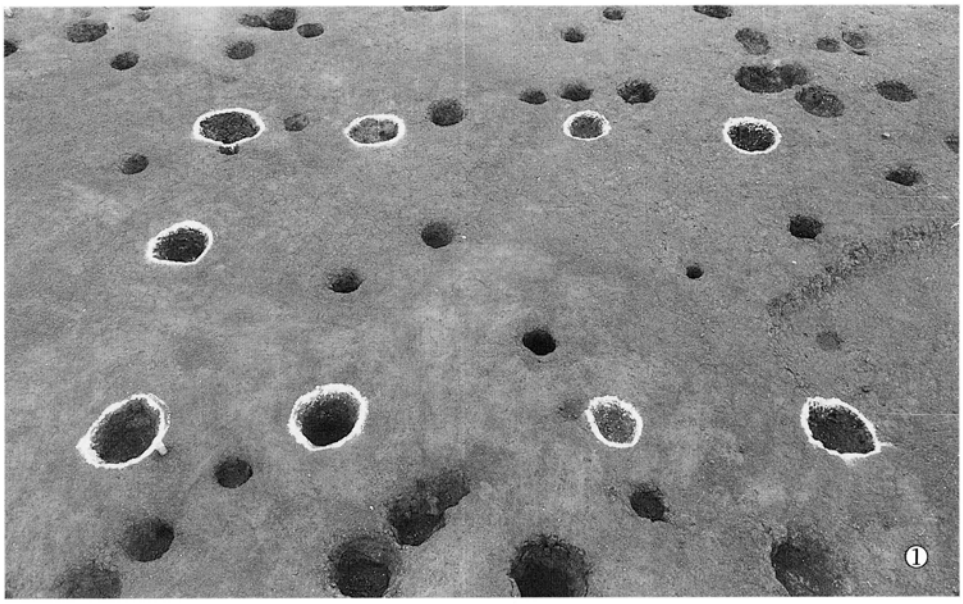
①SB－39（東から）



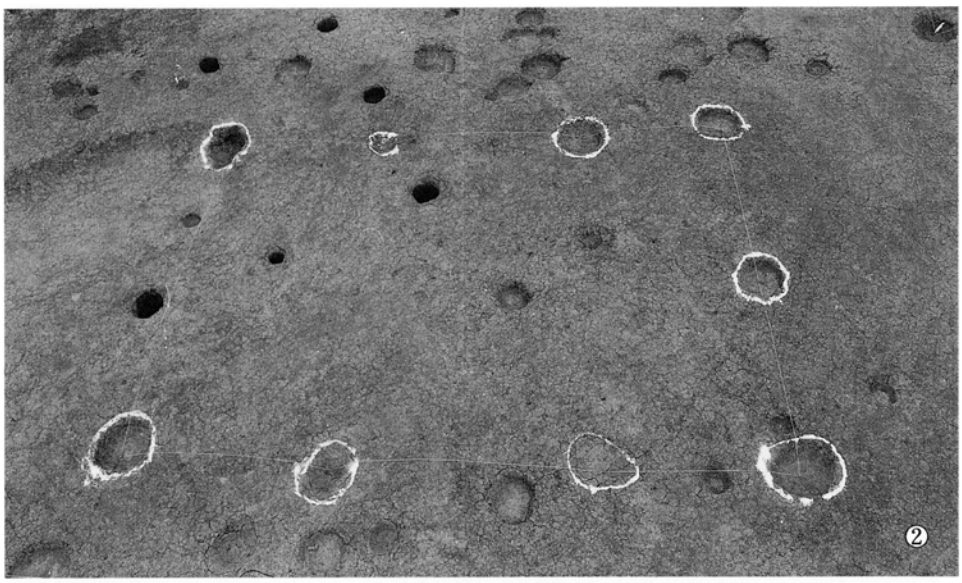
②SB－39（西から）



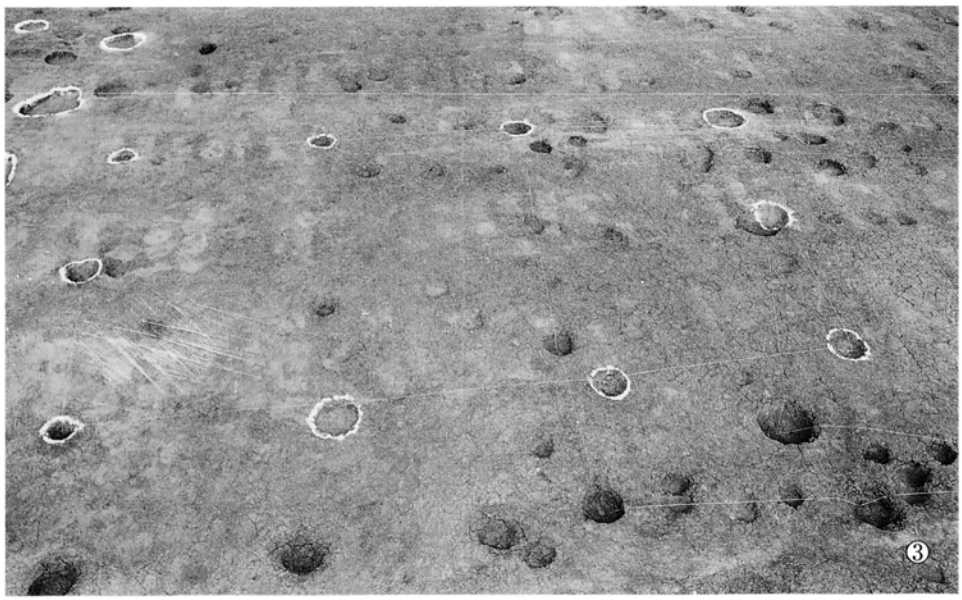
③SB－52



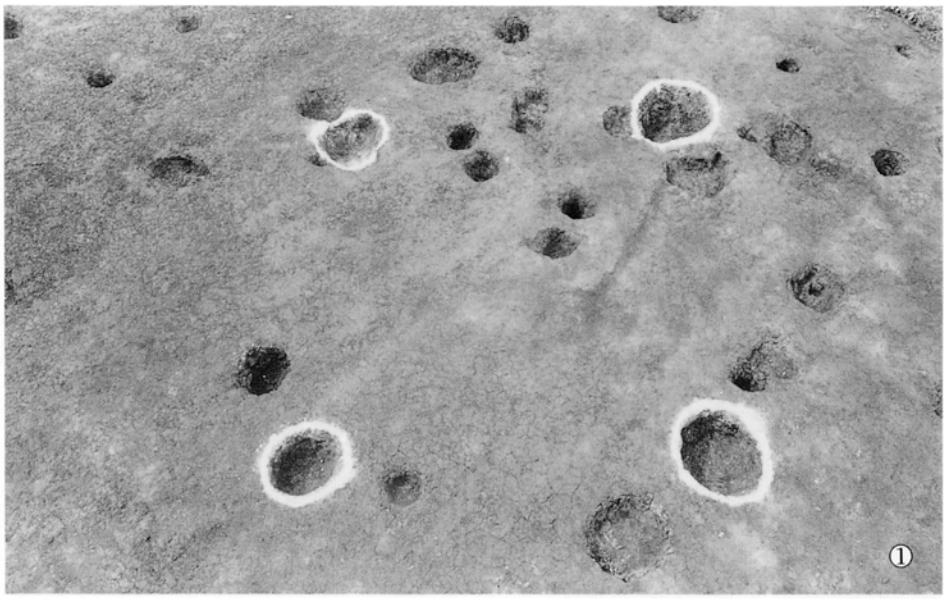
①SB－09（南から）



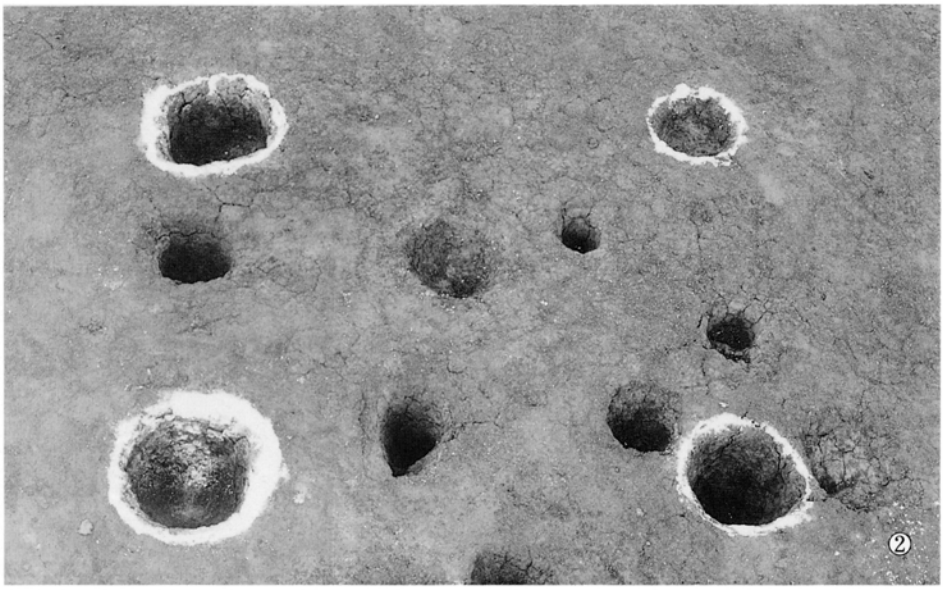
②SB－09（北から）



③SB－61



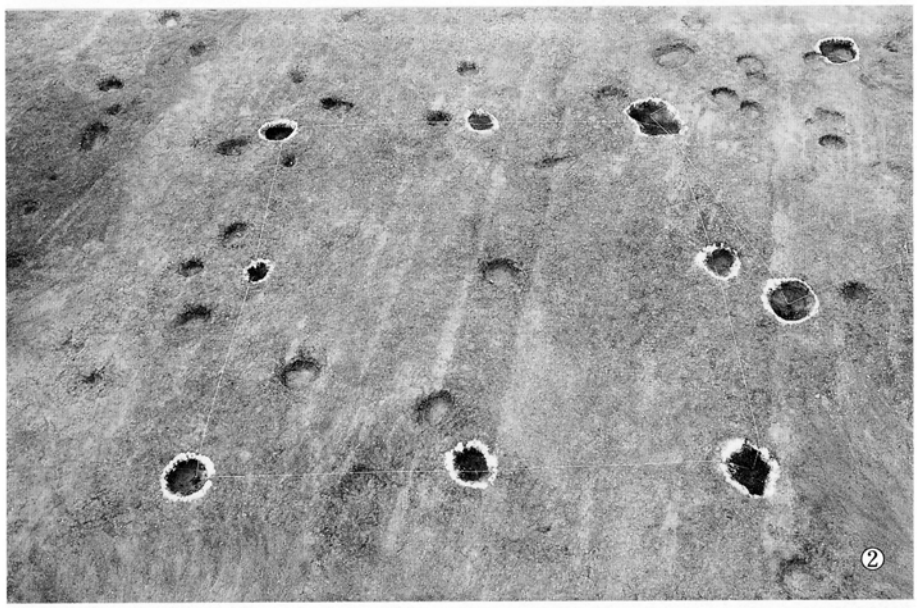
①SB－03



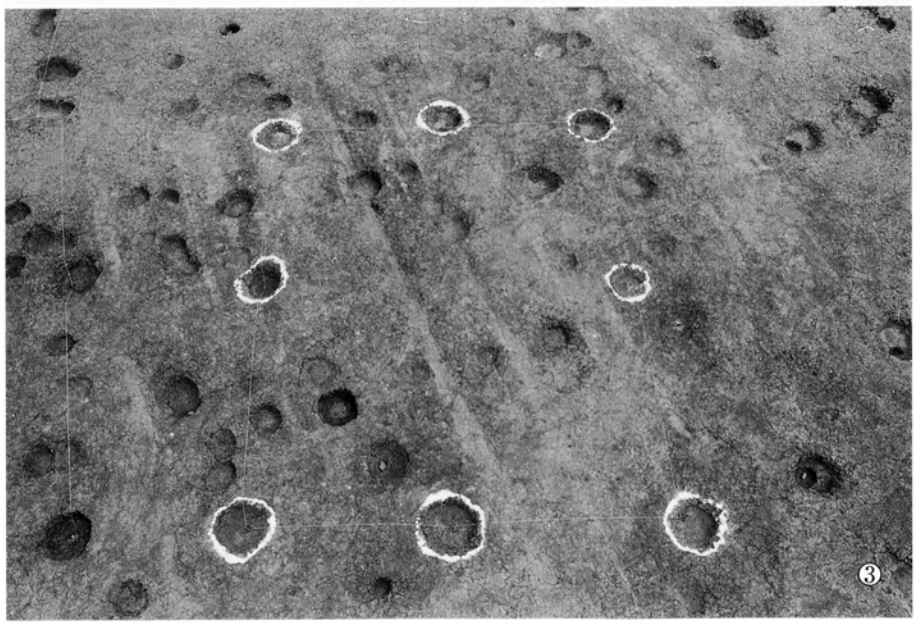
②SB－67

③SB－27

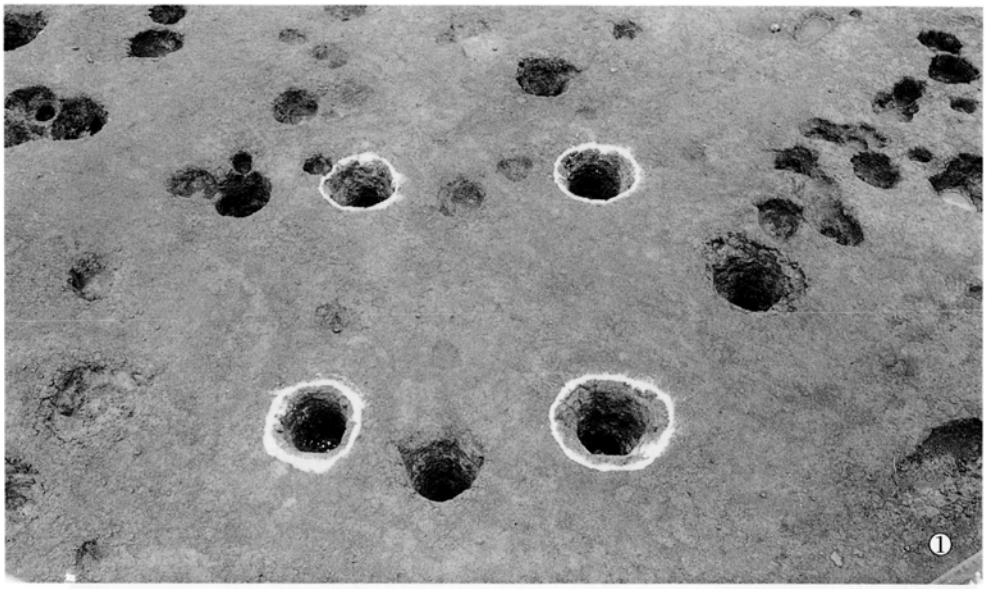
①SB－60



②SB－04

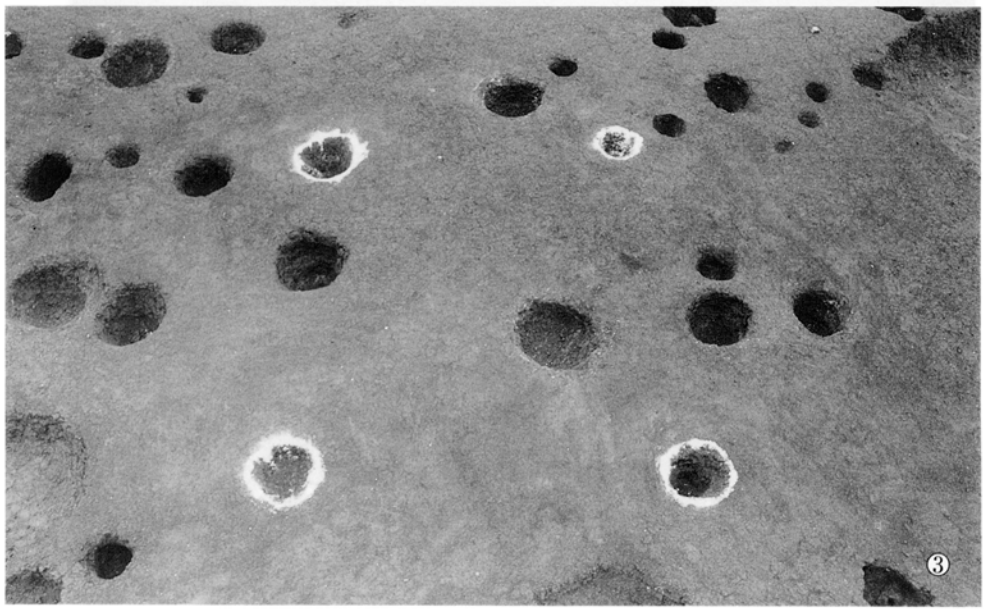


③SB－07

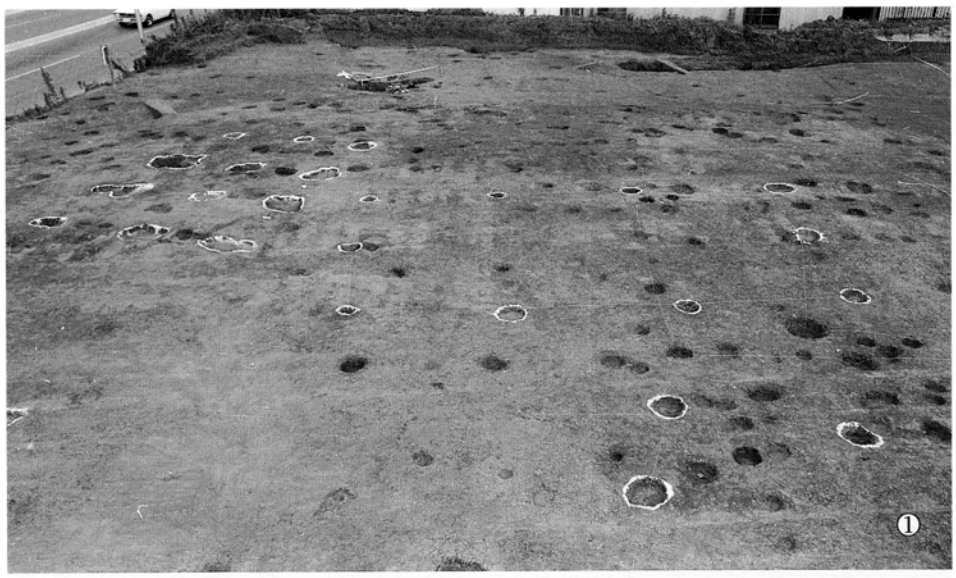


①SB－32

②SB－54



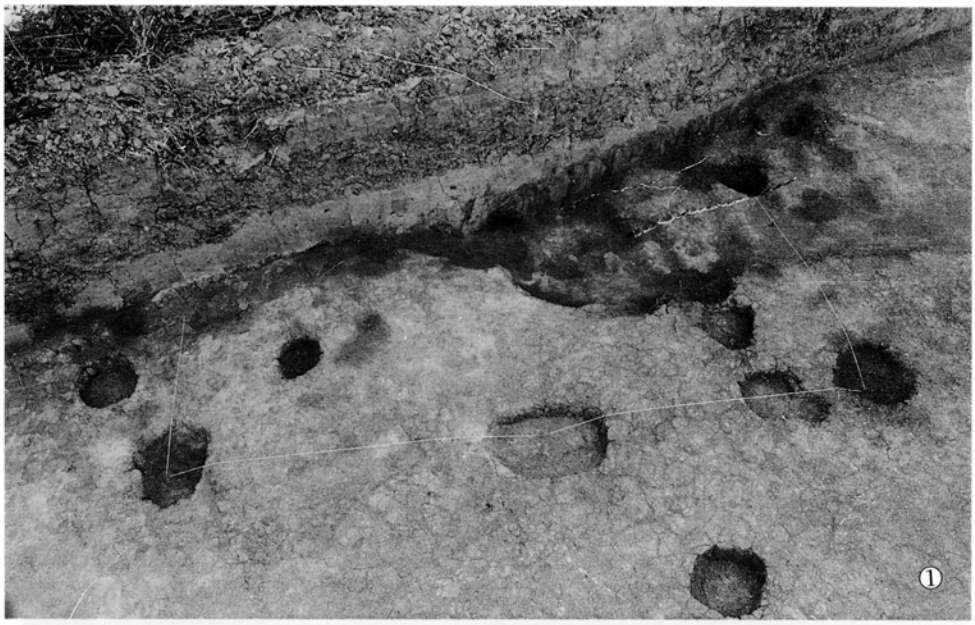
③SB－40



①調査区北東部

②調査区北東部

③SB－07

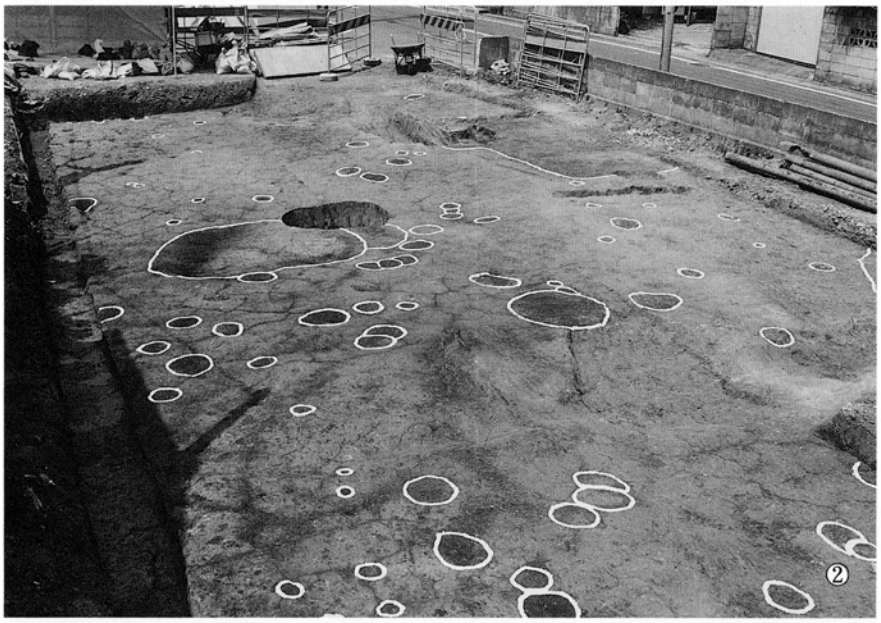


①SB－62（西から）

②SB－31（西から）

③SB－44（南から）

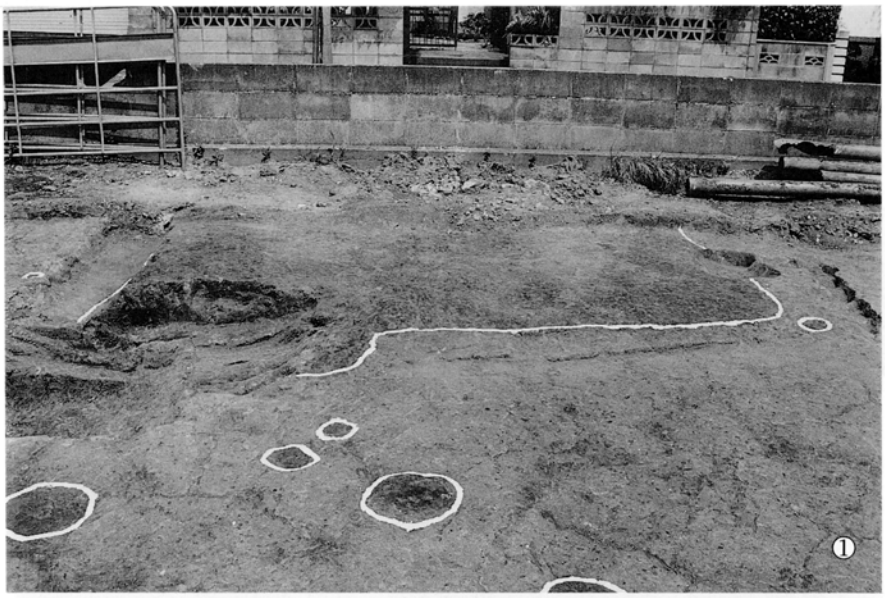
①調査地点調査前近景（北東から）



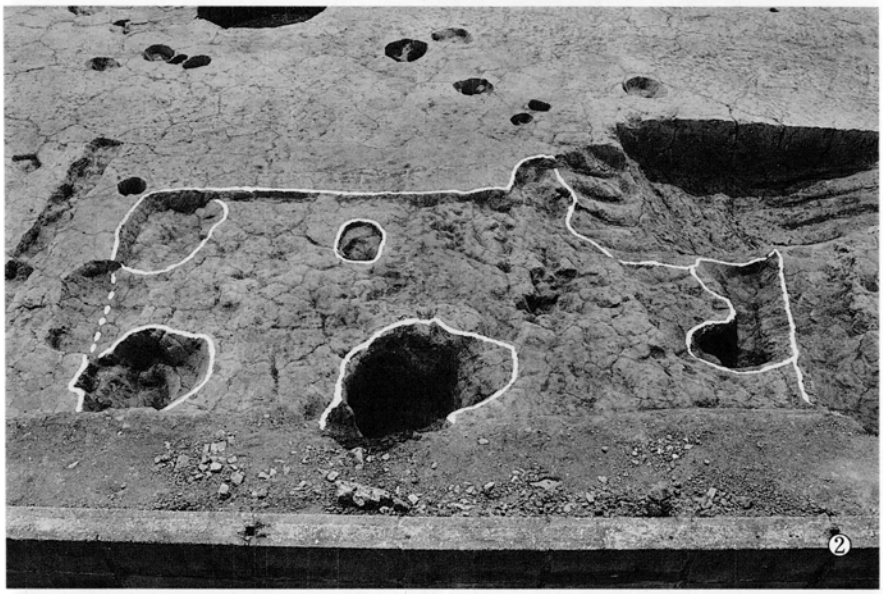
②遺構検出状況（南西から）

③遺構完掘後（南西から）

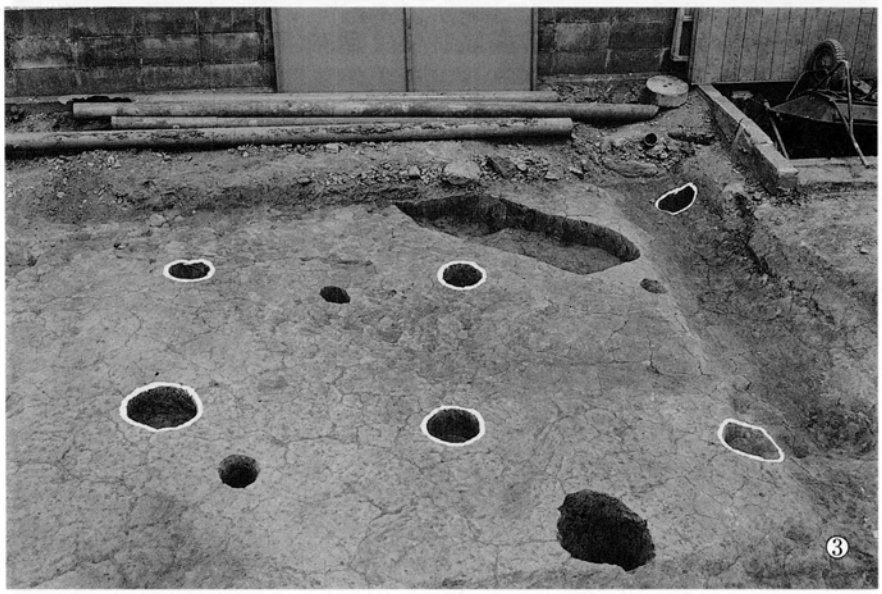
①竪穴住居SC03検出状況（西から）

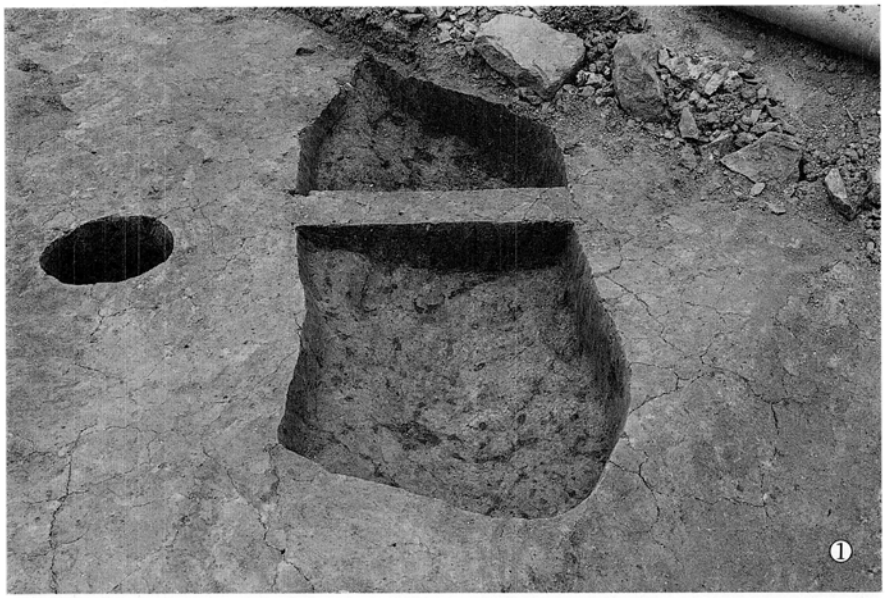


②竪穴住居SC03検出状況（東から）

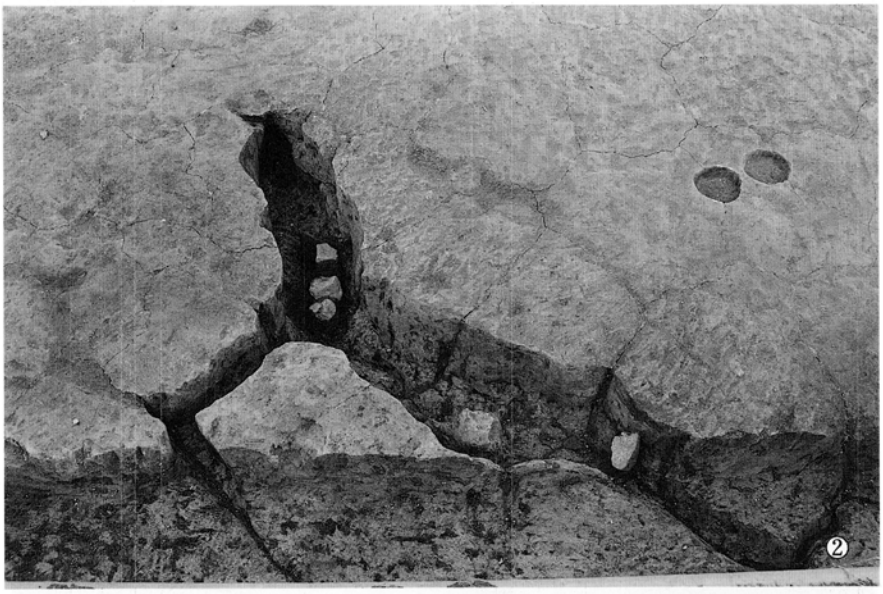


③掘立柱建物SB02（西から）





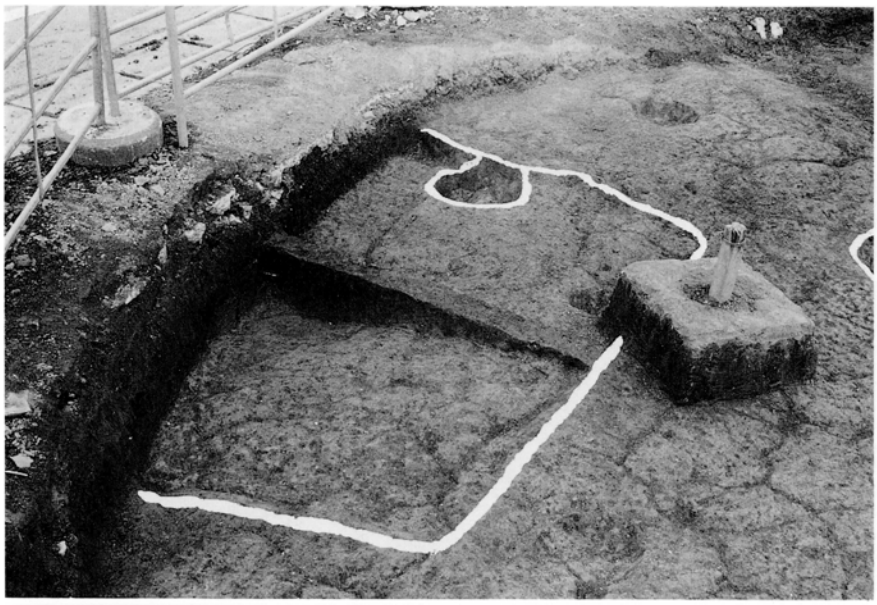
①溝状遺構SD01（南西から）



②不明遺構SX04（西から）

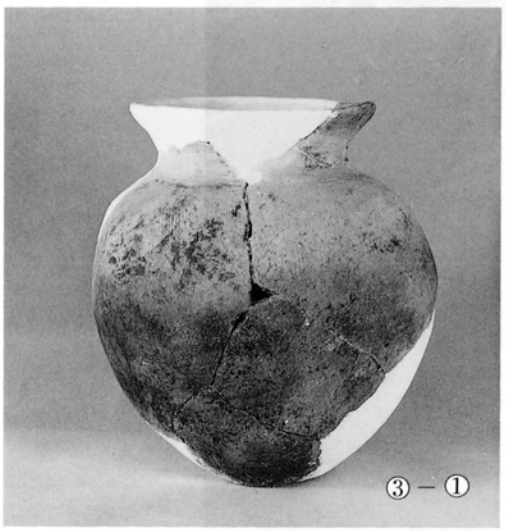
③拡長区遺構検出状況（西から）

①竪穴住居SC05（西から）

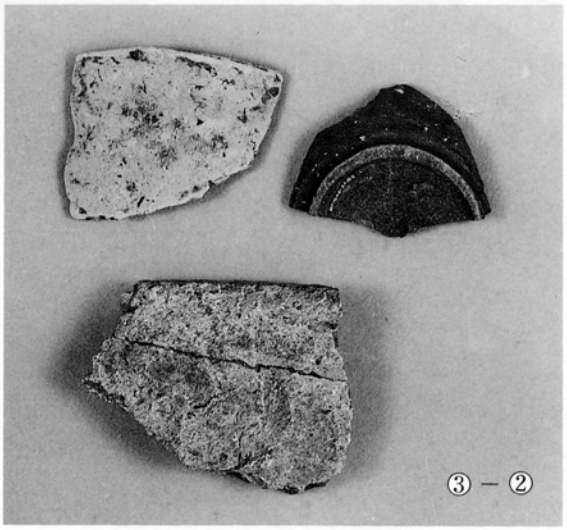


②ピット（西から）

③出土遺物



③－①



③－②

有田・小田部 第23集

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第470集

1996年（平成８年）３月29日

発　　行　福岡市教育委員会
〒810 福岡市中央区天神１丁目8の1

印　　刷　寿印刷株式会社

有田・小田部　第23集

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第470集

1996　福岡市教育委員会